

中世墓坑群の調査

高根町

横森赤台(東下)遺跡

YOKOMORIAKADAI(HIGASISITA) SITE

—国道141号(箕輪バイパス)建設に伴う発掘調査報告書—



2000・2

山梨県教育委員会
山梨県土木部

中世墓坑群の調査

高根町

横森赤台(東下)遺跡

YOKOMORIAKADAI(HIGASISITA) SITE

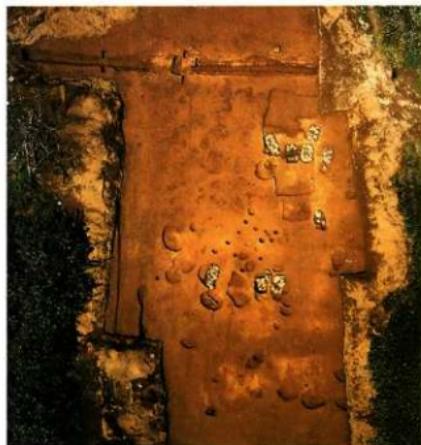
—国道141号(箕輪バイパス)建設に伴う発掘調査報告書—

2000・2

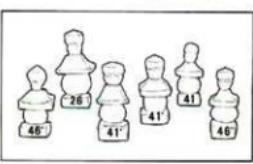
山梨県教育委員会
山梨県土木部



調査区全景（南より）



中世墓坑群

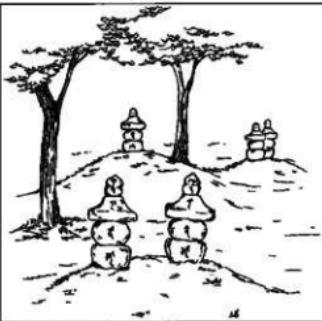


土坑出土五輪塔（数字は土坑番号）

よこ もり あか だい ひがしした い せき 横森赤台(東下)遺跡のあらまし

〈横森赤台(東下)遺跡とは…〉 山梨県の北西部、八ヶ岳の南側の高根町で、国道141号のバイパス道路をつくる時に、武田信玄のおじいさんやひいおじいさんが活躍していた頃の時代のお墓があることがわかって発掘をしました。遺跡の名前は土地の小字名から「横森赤台(東下)遺跡(よこもりあかだい(ひがしした)いせき)」といいます。この本は遺跡の調査結果をまとめたのですが、ここでは簡単に遺跡から何が出てきて、どんなことがわかったのかお話をします。

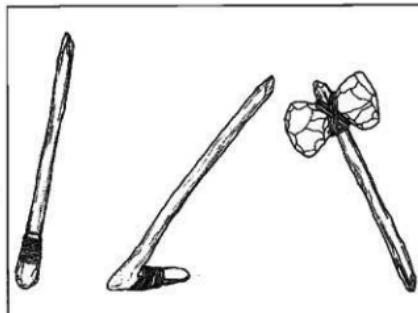
横森赤台遺跡は、主に今から4000年くらい前の生活の跡と、400～500年前のお墓が見つかりました。教科書では、「縄文時代」と「戦国時代」と呼ばれているところになります。戦国時代この遺跡がある一帯は「笑輪郷」と呼ばれていたようです。



〈遺跡はどうしてわかるか〉 長い年月を経て植物などが枯れて土になり、それがたまって昔の地面は埋まっていきますが、洪水や噴火などの突発的な自然環境の影響が無ければ、1年で約0.1mmの深さで積もっていきます。縄文時代だと約40cm、戦国時代だと約5cmとなります。実際は遺跡の上が畑などとして利用されてたりするため、もう少し深いところから見つかったりします。発掘調査では、昔に掘られた穴が埋まって土の色やその性質の変化した部分を観察して、その部分を掘り込んでいくと家の跡やお墓がでてきます。

〈縄文時代のようす〉 遺跡からは土で作った土器の破片や、石で作った石器が見つかりました。家の跡が見つかなかったことや、見つかった道具から人々がここに住んだのではなく、立ち寄って食料などを採りに来たところであったものと考えられます。見つかった道具の主なものは、黒くてガラス質の黒曜石(くこうせき)製の皮をなめしたり削ったりするスクレイパー、穴を掘る鎌の役割をするもので打製石斧(だせいせきふ)とよばれるものがあります。

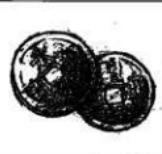
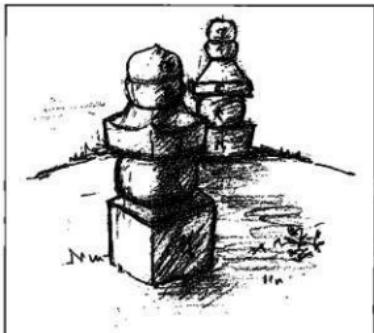
〈石の道具〉 遺跡から見つかった主な石器では、打製石斧(だせいせきふ)があります。これは今から約4000年前の縄文時代のもので、その名のとおり木を切ったりする斧(おの)として使われたものではなく、穴を掘ったり、イモなどを採集するための鎌(くわ)のように利用されていたもので、その形は長方形の短冊形・刃の先が広くなっている振り形・鎌(くわ)のような分銅形の三つの形に分類することができます。



〈葬られた人とお墓のつくり〉 横森赤台(東下)遺跡に埋葬された人々は、戦国時代の始めの頃この地域を開発した有力者と考えられます。墓地は、現在のようにお寺に造られたものではなく、自分たちが住んでいた家の近くや、やや高い丘の水田地帯を見下ろせるような場所に造られることが多いことが知られています。お墓を造るのはゆとりのある人々だけで、その多くは穴を掘ってそのまま埋めた土坑墓(どこうぼ)が多く、その中でも特に豊かな人々は今と同じように火葬したようです。

発見されたお墓は、地面に長方形または円形の穴を1mくらい掘り下げた「土坑墓(どこうぼ)」と呼ばれるもので、遺体を直接埋めるか、木の棺に納めて埋めています。また遺体が埋められた土坑墓の上には、五輪塔(ごりんとう)と呼ばれる石塔が建てられて、今と同じように手厚く供養されました。また、これとは別に火葬した跡も見つかっています。この時代のお墓は、古墳時代のお墓のように生前身に付けていたものなどを一緒に埋めたりすることなく、お金だけが埋められたものが多いです。これは、現在でも紙のお金を入れると同様に、当時流行していた「地獄信仰」の影響が強く、いわゆる「三途の川の渡し賃」として納められたことがわかります。

〈お石塔ってなに?〉 今は木製の卒塔婆が一般的ですが、中世や近世では五輪塔と呼ばれる石塔が建てられました。その目的は葬られた人々の供養やお墓の標としてでした。この形のものは平安時代の11世紀の終わり、醍醐寺円光院旧跡出土の本願御骨石幢内銅造五輪形が1085(応徳二)年に見られることからこの頃出来上がったようで、鎌倉時代に供養塔としてたくさん造られるようになりました。横森赤台(東下)遺跡のように、お墓の標として建てられるようになったのは室町時代から後になります。五輪塔は大きく五つの形から出来ており、下から方形、球形、三角形、半球形、宝珠形のものを積み上げていて、これは宇宙を形づくる要素である「地・水・火・風・空」を表すものとされています。遺跡から見つかったものの中には、墨で書かれた文字(梵字や年号)が見られるものもあります。



〈お墓から出てきたお金〉 約1000年前の平安時代中頃から戦国時代にかけて、貿易で日本に渡ってきた中国のお金です。お墓からは六枚のお金が見つかることが多いのですが、これは一般に「三途の川の渡し賃」と呼ばれているもので、事の善悪を見極めるために六つの世界で生死をくり返すとされ、悩みや苦しみから逃れるためにこの六つの世界のそれぞれの地蔵に祈りを捧げ、極楽淨土(仏の世界)へ生まれ変わるために、地蔵へのお賽銭として死者と共に納められたものです。



〈土師質土器(かわらけ)〉 一般的に、平安時代から後に造られた軸薬(じくせき)がかけられていない素焼きの土器のことと、当時一般の食卓や祭りの道具として広く用いられたものです。

序

本書は、国道141号（箕輪バイパス）建設工事に先立って、1995年度より実施されてきた一連の調査の最終年度（1998）に行われた、山梨県北巨摩郡高根町箕輪字横森に所在する横森赤台（東下）遺跡の発掘調査報告書であります。

横森赤台（東下）遺跡の周辺には、下原、東浦、海道前C遺跡といった縄文時代の営みの跡のほか、横森・横森前、清水氏屋敷跡などといった中世の遺跡も多く存在しており、古くから人々の生活が窺えます。今回の調査では、主に中世の土坑墓・火葬墓を伴った墓域が認められ、出土した土器や五輪塔から戦国時代に属することが明らかとなりました。当該地域では、既記のように在地の有力者層である土豪の屋敷跡が散在する状況が明らかで、15世紀前半代にはこの地域の開発は進んでいたようですが、15世紀後半代には信濃と甲斐の戦場となり『王代記』に見られる「逸見一門皆腹切り」に代表されるように、幾つかの家が滅亡していった状況が推察されます。全国的には1467年、京の都では世に言う「応仁の乱」が勃発し、群雄が割拠する時代に突入しますが、前述のようにここ山梨県も例外ではなかったようです。発見された墓坑群には、北枕西向合掌の土葬と火葬跡、そして五輪塔といった人々の浄土信仰に対する現れが如実に反映されており、当時の精神文化を知る上で貴重なものとなっています。本遺跡は残念ながら消滅してしまいましたが、今回の調査成果が我々の先祖が残した足跡を少しでも解明する一助となれば幸いであります。

最後に報告書を刊行するにあたり、発掘調査並びに整理作業に深い御理解と御協力をいただいた県土木部葦崎土木事務所、高根町役場などの関係機関、地域の皆様、並びに直接調査・整理に携われた方々に対し、深甚なる謝意を表する次第であります。

1999年2月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 大塚初重

例 言

1. 本報告書は、国道141号（箕輪バイパス）建設工事に先立って、1998年度に行った横森赤台（東下）遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本報告書は、第Ⅱ章の第1・2・4節を網倉邦生、第3節を大木丈夫が、その他の全章を野代幸和が執筆・編集したが、自然科学分析で委託した部分については、執筆者を文頭に示した。
3. 分析依頼・委託した部分については、附編1・2を株式会社 バレオ・ラボに、附編3は国立科学博物館に、附編4については環境庁国立環境研究所に、附編5は昭和女子大学に依頼し、附編1を山形秀樹（バレオ・ラボ）、附編2を植田弥生（バレオ・ラボ）、附編3を梶ヶ山真理・馬場悠男（国立科学博物館）、附編4を米田 積（国立環境研究所）、附編5を武田昭子（昭和女子大学）が執筆した。
4. 炭化物の選別、骨の精査と保存処理、遺物の拓影、接合、復元、実測、図面調整、トレースおよび図版作成に至る過程の分担は、下記のとおりである。平美与枝、向井美絵春、菅沼芳治（炭化物の選別、骨の精査と保存処理）、平美与枝（遺物の拓影、接合、復元）、澤登由美、平美与枝、菅沼芳治（遺物の実測および計測）、澤登由美、平嶋純一、平嶋弘子、大塚敦子、三好美智（図面調整、トレースおよび図版作成）、鈴木由香（計測一覧の作成）
5. 遺跡の写真は、野代幸和および長田雅巳が行ったが、航空写真および航空測量については株式会社 フジ・テクノに委託した。
6. 口絵の遺物の写真是、写真家小川忠博が行った。
7. 現場の基準点測量については、(有)東雲に委託した。
8. 表紙のイラストは大塚敦子、本文中は大塚敦子と三好美智が行った。
9. 調査の図面・写真・遺物は山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。

凡 例

1. 揭載した遺構図面の縮尺は原則として、竪穴状遺構は60分の1、土坑は30分の1、溝や畝状遺構などは120分の1、特殊な遺構はこの限りではない。
2. 揭載した遺物図面の縮尺は原則として、土器の実測図・拓本は3分の1、小型の石器類は3分の2、五輪塔などの石造物は6分の1であるが、特殊な遺物はこの限りではない。
3. 石器の内、砥石などの擦り面には  のスクリントーンがかけてある。
4. 遺構平面図のスクリントーンは以下のとおりである。

炭化物



人骨



5. ここに掲載した石造物（宝篋印塔・五輪塔）の形態について、次ページに示した。第3表の五輪塔一覧表に示した計測値に関する計測位置については、図のとおりである。

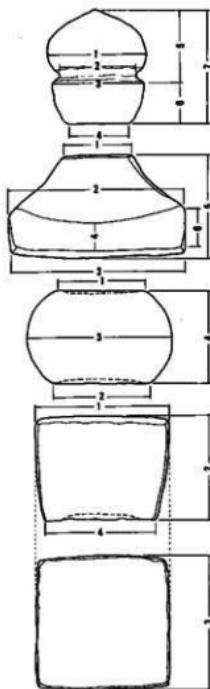
凡例



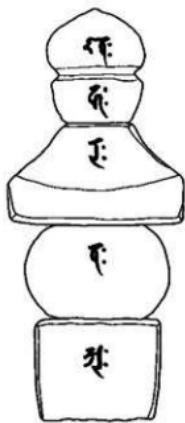
宝筐印塔



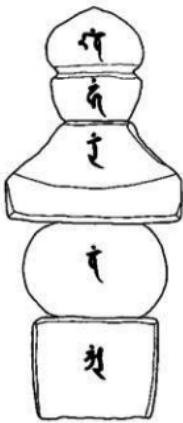
(第33図57)



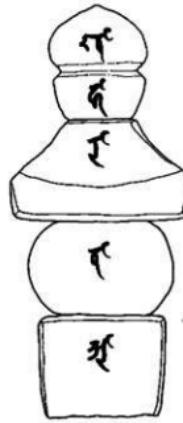
五輪塔計測位置図



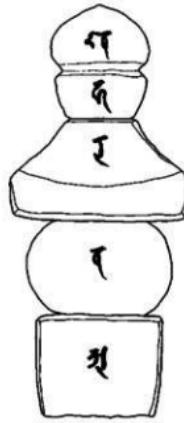
(北方涅槃門)



(西方菩提門)



(南方修業門)



(東方發心門)

目 次

口絵	
横森赤台(東下)遺跡のあらまし	
序	
例言	
凡例	
目次・挿図目次・表目次	
第Ⅰ章 発掘調査および整理経過	1
第1節 調査・整理作業日程	1
第2節 調査・整理作業組織	1
第3節 調査・整理作業方法	2
第Ⅱ章 環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3節 室町時代末期における甲斐国並びに北巨摩郡の歴史的背景について	5
第4節 基本土層	7
調査の概要と遺構および遺物	8
第1節 壁穴状遺構	8
第2節 捨立柱建物跡	9
第3節 土坑(縄文時代)	9
第4節 墓坑群(中世)	14
第5節 五輪塔集中区	40
第6節 溝	46
第7節 歓状遺構	46
第8節 包含層出土遺物	59
第Ⅳ章 成果とまとめ	62
第Ⅴ章 おわりに	64
附 錄	
1 横森赤台(東下)遺跡出土の炭化材の樹種同定	65
2 横森赤台(東下)遺跡第29号土坑出土炭化材の放射性炭素年代測定	68
3 横森赤台(東下)遺跡出土人骨	72
4 横森赤台(東下)遺跡出土人骨の炭素・窒素安定同位体比による食性復元	77
5 第41号土坑出土漆塗腹片について	81

挿 図 目 次

第1図 横森赤台(東下)遺跡周辺遺跡分布	3	第16図 第31号土坑出土遺物	26	第29図 五輪塔集中区遺物分布	40
第2図 基本土層	7	第17図 第39・40号土坑	27	第30図 五輪塔集中区遺物(1)	41
第3図 第1号壁穴状遺構	8	第18図 第40号土坑出土遺物	28	第31図 五輪塔集中区遺物(2)	42
第4図 第1号捨立柱建物跡	11	第19図 第41・41'・42・43号土坑	28	第32図 五輪塔集中区遺物(3)	43
第5図 土坑(1)	12	第20図 第41・41'・42・43号土坑遺物	28	第33図 五輪塔集中区遺物(3)	44
第6図 土坑(2)	13	出土状況	30	第34図 五輪塔集中区遺物(3)	45
第7図 第20・22号土坑および出土遺物	15	第21図 第41・41'号土坑出土遺物	31	第35図 第1号溝	48
第8図 第26・27号土坑	16	第22図 第41'・42・43号土坑出土遺物	32	第36図 第1号溝出土遺物分布	49
第9図 第26号土坑出土遺物	17	第23図 第44号土坑および出土遺物	34	第37図 第1号溝出土五輪塔(1)	50
第10図 第26・27号土坑出土遺物	18	第24図 第45・46・46'号土坑	35	第38図 第1号溝出土五輪塔(2)	51
第11図 第28号土坑	20	第25図 第45'・46・46'号土坑遺物	36	第39図 第1号溝出土五輪塔(3)	52
第12図 第28号土坑出土遺物(1)	21	出土状況	36	第40図 第1号溝出土五輪塔(4)	53
第13図 第28号土坑出土遺物(2)	22	第26図 第46'号土坑出土遺物	36	第41図 第1号溝出土五輪塔(5)	54
第14図 第29号土坑および出土遺物	24	第27図 第46'・46'号土坑出土遺物	37	第42図 第1号武状遺構	55
第15図 第31号土坑	25	第28図 第58号土坑	38	第43図 第2号武状遺構	56

表 目 次

第1表 遺跡地名表	4	第2表 土坑一覧表	9	第3表 石造物一覧表	60
-----------	---	-----------	---	------------	----

附図 横森赤台(東下)遺跡全体図

第Ⅰ章 発掘調査および整理過程

第1節 調査・整理作業日程

国道141号（箕輪バイパス）建設工事予定地となっている高根町箕輪字横森地内における具体的な工事計画が、県土木部道路建設課より提出された。これにより開発関係部局である同課と同蓋崎土木事務所、県教育委員会学術文化財課と同埋蔵文化財センターの4者との協議の結果、まず遺跡の有無の確認調査を実施したところ遺跡の存在が明らかとなつたが、計画の変更は不可能であることからやむを得ず直接工事によって影響を受ける部分の、記録保存を目的とした調査を実施することとなった。

試掘調査は1996年10月29・30日、同年12月19・20日に約7,000m²を対象として実施した。その結果、中世の五輪塔が地表面に存在する部分および火葬跡と考えられる構造が確認された地点を中心とした約1,000m²を対象に遺跡の存在を認めることができたため、本地点を発掘調査の対象地とした。周知の遺跡ではなかったため、遺跡名は字名を取って横森赤台遺跡と命名した。

発掘調査は蓋崎土木事務所、学術文化財課と埋蔵文化財センターの3者との協議後、調査区の設定、安全管理などの留意点を確認し、法的手続きを経て、面積約1600m²を対象に1998年5月11日から同年7月8日にかけて実施した。一部町有地に構造がかった部分については、町当局の協力を得て部分的に拡張して調査させて頂くと共に、地表面に存在した石造物（五輪塔）についても本調査との関連性が予想されることから町教育委員会の同意の下で回収させて頂いた。調査の結果、縄文時代から近世にかけての遺構が発見された。縄文時代では獨立柱建物跡や用途不明の土坑といったものがあり、平安時代と考えられる竪穴状遺構、戦国時代（15～16c）では土坑墓・火葬墓が環状に広がる墓域が認められ、恐らくこれに付随する施設と考えられる墓域を示す溝も発見された。近世以降では、畝状の遺構が認められた。遺構と遺物の分布から、遺跡はさらに調査区東側の台地平坦部に広がることが予想される。

本格的整理作業は、1999年4月13から7月12日にかけて、県庁里吉別館内里吉整理室にて実施した。

第2節 調査・整理組織

調査主体 山梨県教育委員会

調査機関	山梨県埋蔵文化財センター	所 次	長 大 塚 初 重
			長 穂 阪 忠（平成8年度）
			藤 田 修
			田 代 孝
		埋蔵文化財指導幹	森 和 敏（平成8～9年度）
			田 代 孝（平成10年度）
		調査研究第一課長	森 和 敏（平成8～9年度）
			末 木 健
		調査研究第二課長	田 代 孝（平成8～9年度）
			坂 本 美 夫

調査担当者（試掘調査）平成8年度

坂 本 美 夫（副主幹文化財主事）

高 野 玄 明（主任文化財主事）

川 手 昌 英（主任文化財主事）

雨 宮 芳 夫（主任文化財主事）

（発掘調査・基礎整理）平成10年度

野 代 幸 和（文化財主事）

(本格的整理) 平成11年度

長田 雅巳 (文化財主事)

野代 幸和 (文化財主事)

網倉 邦生 (非常勤嘱託)

調査作業員

清水昭子、八巻光子、小林英子、中村ふみ、清水きしの、下條たつ子、仲島まゆみ、小野ふみ子、日向たまの
(高根町) 千野松代、千野あやめ、浅川保代、浅川民子、小林明美 (大泉村) 向井袈裟春、菅沼芳治、平美与枝 (甲府市)

整理作業員

(平成10年度)

向井袈裟春、菅沼芳治、平美与枝、宮坂晴幸、小林裕子、石原 恵 (甲府市) 澤登由美 (山梨市) 長田可祝、
石井千秋、梶原初美 (中道町) 矢崎 緑 (御坂町) 中込幹一 (豊富村) 平鶴純一、平鶴弘子 (長坂町) 山崎靖子 (春日居町)

(平成11年度)

菅沼芳治、三好美智、大塙敦子 (甲府市) 澤登由美 (山梨市) 石井千秋、梶原初美、渡辺麗子 (中道町) 志村君子、鈴木由香 (石和町) 平美与枝 (一宮町)

協力機関

県土木部道路建設課、同莊崎土木事務所、高根町教育委員会、国立科学博物館、昭和女子大学、環境庁環境科学研究所、株フジテクノ、株パレオ・ラボ、㈲東雲測量

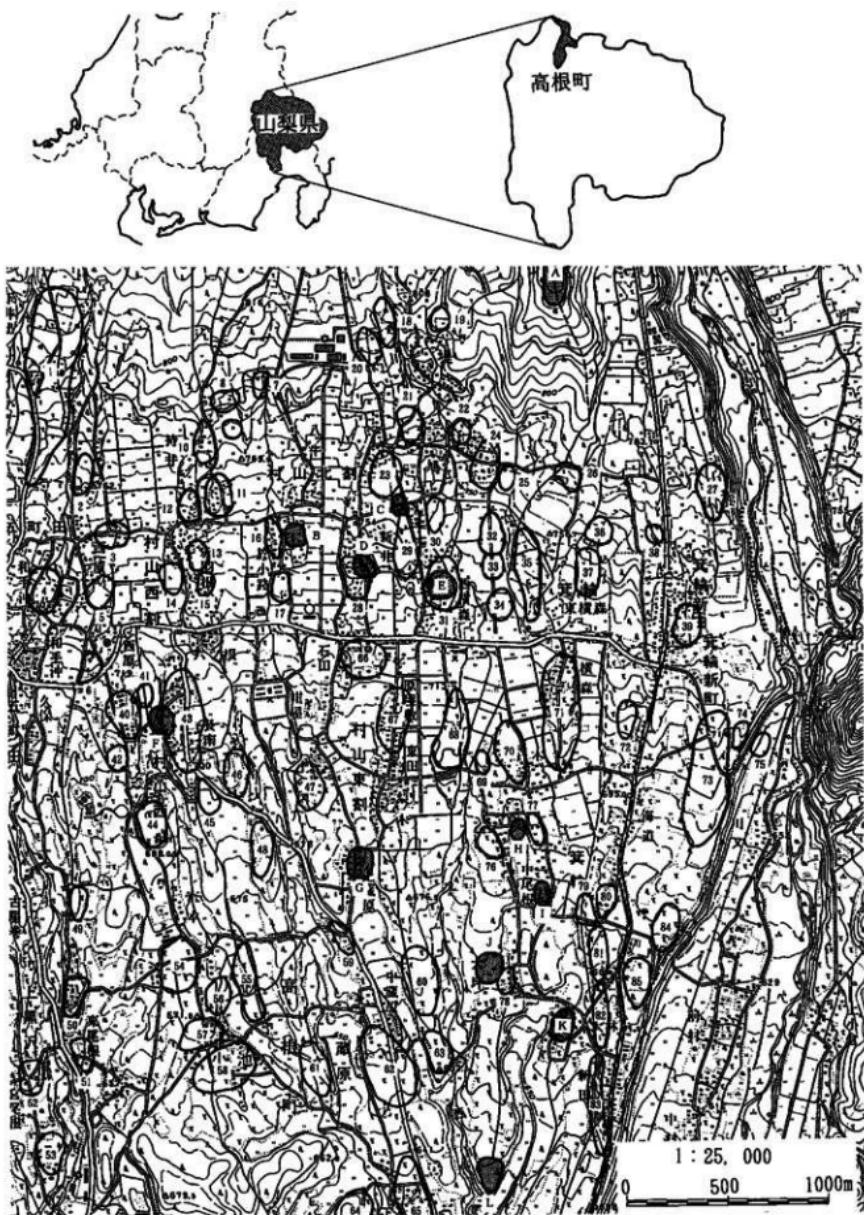
協力者

国立科学博物館 馬場悠男、梶ヶ山真里、環境庁環境科学研究所 米田 穣、昭和女子大学 武田昭子、県教育委員会県史編纂室 堀内 亨、高根町教育委員会 雨宮正樹、長坂町教育委員会 村松佳幸、甲府市教育委員会 志村憲一・佐々木 満、(勧)帝京大学山梨文化財研究所 烟 大介・櫛原功一、小川忠博

第3節 調査整理作業方法

調査区内に公共座標の北にのるように 5m グリッドを設定して、西から東に向かって A・B・C…のアルファベットを、南から北へ 1・2・3…の算用数字を付した。国土座標は B・C-5・6 グリッドの杭で、X=-19030、Y=-6055 の値を得ていることを記しておく。調査は、表土から確認面までを重複によって 排土作業を行ったが、地表面に五輪塔が集中していた部分については手掘りによって実施することとし、以後の造構確認については、作業員による人力で調査を進行していく。表土は浅く、縦斜面であったことから、造構の覆土がローム化しており、縄文期の造構確認作業は難航したが、中世のものについては墓の上部に存在したと考えられるマウンドなどは後世の耕作で破壊されていたが、火葬跡など炭化材が集中する地点を中心に、五輪塔などが多數確認面に突き刺さるようにして存在したことから容易であった。造構の遺存状態は、構築面までの掘り込みが深い火葬跡などはよくなかったが、墓については良好であった。

整理作業については、平成10年度としては、まず出土人骨の科学的分析を実施するためのクリーニングを行うと共に、五輪塔などの出土遺物の洗浄、注記、実測作業といった基礎的な作業を行った。平成11年度としては、報告書作成に向けた遺物の分類・記録・調査を中心に、造構及び遺物実測図のトレースを行い図版を作成、原稿執筆にあたった。



第1図 横森赤台(東下)遺跡周辺遺跡分布

第Ⅱ章 環 境

第1節 地理的環境

横森赤台(東下)遺跡は北側に八ヶ岳山麓を、東側には秩父連峰を、西側には南アルプスを、南側には甲府盆地を望むことができる緩斜面地に位置する。この緩斜面地は四万十層群を基盤としており、洪積世末期において八ヶ岳の山体崩壊に伴う熔岩粉碎物が土石流として二次堆積した上に、火山灰層や黒色土が堆積したことにより形成された七里岩台地の東寄りに位置する。八ヶ岳南麓地域は急峻な山岳地帯から甲府盆地側に向かって広大な裾野が広がり、その台地上を須玉川・塩川等の主要な河川やその他の小河川が開析する事によって、南北方向に細長い小規模の台地が連続するという独特の地形が形成されている。

第2節 歴史的環境

高根町は長野県と隣接していることから、江戸時代において「佐久往還」が設けられるなど古くから交通の要所として発達してきた。この地域の特徴は各時代の遺跡における様相とともに共通しており、様々な地域における文化的要素が認められており、同時に居住域として頻繁に活用されたため、濃密な遺跡の分布が周知されている。

高根町においては、綱文・平安・中世の遺跡が多数存在しているが、横森赤台(東下)遺跡と関連する中世の墳墓の他にも、砦や館・屋敷などの中世土豪に關連する主要な施設が検出されている。中世土豪の館・屋敷は、南北に伸びる尾根状の台地の上に立地し、その周囲に土塁を有するものと有さないものの両方が確認されている。高根町内に中世土豪の館・屋敷が多く存在しているということは、それまでの支配体制から脱却した在地の有力者が群衆割拠し、自らの土地を開拓しようとしていたという大きな歴史の流れを反映している。砦や城は山地や急峻な地形を利用して構築している。これらの中でも旭山城は城の構造が残存しているだけではなく、本能寺の変の直後に北条氏直が築城したという築城経緯や使用期間が判明している。

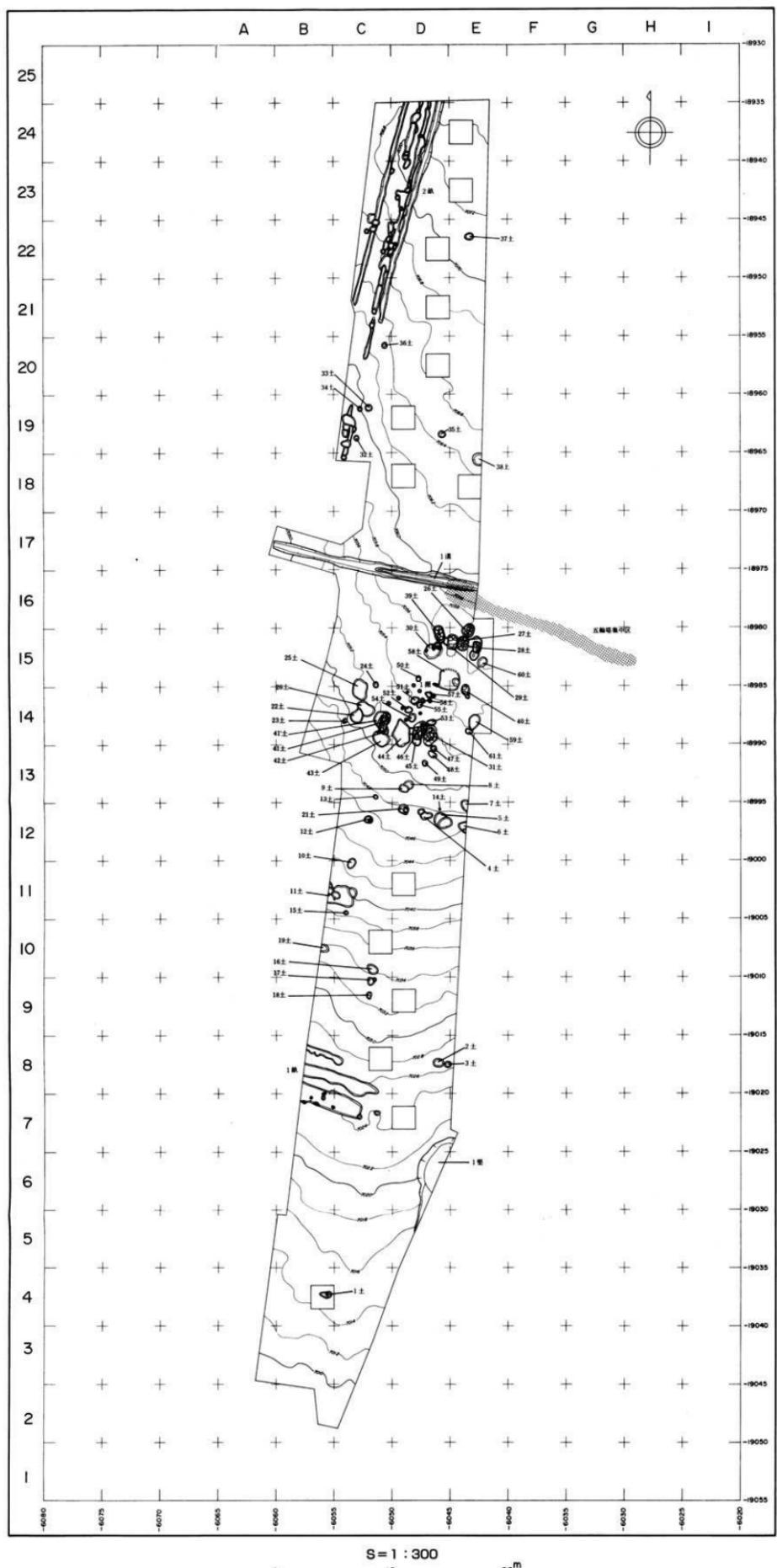
横森赤台遺跡において出土した五輪塔が認められた遺跡としては、藤林寺遺跡が知られているが、清里下念場における旧海岸寺跡と伝えられる場所からも14~15世紀前半と考えられる五輪塔群が出土しており、この他にも甲川西岸の畠の一角より出土した15~16世紀中頃に比定される五輪塔群が認知されている。藤林寺遺跡や伝旧海岸寺跡は寺社に伴う墓地であることから、横森赤台(東下)遺跡とは性格が異なることが推察される。

第1表 遺跡地名表

遺跡番号	遺跡名	時期	遺跡番号	遺跡名	時期	遺跡番号	遺跡名	時期
1	御子原	縄文	30	加茂原B	平・中	59	室の前A	風
2	大石城	平	31	御子原	風	60	御代A	風・中
3	西原山	中	32	立木長	風・中	61	西入原	風・平
4	大坪	周・平・中	33	青木谷	平	62	室の前B	風
5	西原	風	34	青木	風	63	御代B	風
6	菖蒲原A	周・平・中	35	社口	風・平	64	西ノ原	周・平・中
7	大久保、八ツ合	風	36	死池	周・平・中	65	折井A	周・平・中
8	山の神	風	37	死池保	周・中	66	石田前	周・平・中
9	大久保	風	38	吉坂	中	67	東京、原尾越	周・平・中
10	上の原C	風	39	足利	周・平・中	68	雪舟武道成	周・平・中
11	井井A	平・中	40	西ノ原B	周・古	69	勝ノ木	周
12	井井B	周・平・中	41	櫻ノ原A	周	70	勝ノ上	周
13	柏原の木、藤林寺跡	周・平・中	42	瓦屋原B	周	71	柳森・秋葉原	周・平・中
14	神木	周・平	43	大寺寺	周・平・中	72	横森赤台(東下)	周・平・中
15	当町A	周	44	宮地	周・平	73	下原	周・平
16	於小路	平	45	老の森	平・中	74	川又坂上	周・平
17	当町B	周	46	高内B	周・平・中	75	川又坂	周
18	水原	周・平・中	47	上ノ原	周・平・中	76	堤前	周・中
19	上ノ原	周	48	老の森B	周・平・中	77	中野原	周・平・中
20	上の原B	周	49	中央の森	周・平・中	78	大坪	周・中
21	旭西久保A	周・平・中	50	中久保B	周・平・中	79	藤波前A	周・中
22	旭東久保A、B	周・平・中	51	宮尾原A	周・中	80	藤波前C	周・中
23	新井A	周・平・中	52	宮尾原B	周・中	81	宮の前	周・中
24	旭東久保B	周・平・中	53	宮尾原C	周・平	82	大坪上	周・古・平・近
25	旭東久保A	周・平・中	54	後野	周・古・中	83	大林	周・中
26	北口、古城跡	周・平・中	55	出山	周	84	海波前B	周・平・中
27	道原、朝久保	周	56	長崎A	周・平・中	85	大林上	周・中
28	新井C	周・平	57	長崎、後原	周・平			
29	新井B	周・平・中	58	丘原B	周・平・中			

*中世の館・砦等

A	道山寺	D	美作赤穂	G	上原御殿	J	大坪御殿
B	日向丸御殿	E	四掛御殿	H	房木氏御殿	K	大林御殿
C	白糸氏御殿	F	小笠山御殿	I	中村御殿	L	大坪上(大坪城)



付図 横森赤台(東下)遺跡遺構全体図

第3節 室町時代末期における甲斐国並びに北巨摩郡の歴史的背景について

この節では、15世紀から16世紀の甲斐国並びに北巨摩郡の状況について述べることにする。15世紀前半の甲斐国は室町幕府と鎌倉府の争いの下にあった。鎌倉府とは、関東8ヶ国・伊豆・甲斐、後に陸奥・出羽2ヶ国を統括するために室町幕府が鎌倉に設置した政庁であった。鎌倉府の長官は鎌倉公方と呼ばれ、將軍足利氏の一族である基氏の子孫が代々世襲し、永享11年（1439）、成氏が下総古河に移るまで続いた。

15世紀の甲斐国の状況からみていくことにする。応永16年（1409）、鎌倉公方の足利満兼が死去し、子の持氏が跡を継いだ。関東管領である上杉禅秀（氏憲）と持氏の関係が悪化し、応永22年（1415）、上杉禅秀が関東管領を辞任した。翌年8月、上杉禅秀は持氏に反旗を翻し挙兵した（上杉禅秀の乱）。当時、甲斐国の守護であった武田信満の娘が禅秀の妻であったので、信満は禅秀方に加担した。しかし、応永24年（1417）正月、持氏方が優勢となり、禅秀は自害した。持氏は室町幕府の全面的な支援を受け、禅秀の味方をしたもの討伐を開始する。同年2月、持氏は甲斐へ出陣し、大槻（大月市）で甲斐國守護の信満を対峙することになる。この戦いは、鎌倉府側の勝利となり、信満は木賊山（大和村）で自殺を遂げる。武田信満の守護であった期間はたったの2年であった。

守護がいなくなったことで、甲斐国は内乱状態に陥った。信満の子の信重は、叔父の信元と高野山へ逃れ、甲斐国内では、鎌倉公方持氏のバックアップで逸見有直が守護なろうとした。だが、室町幕府は高野山にいた武田信元を守護に任命した。逸見有直は系図上ではよくわからない人物であるが、「鎌倉大草紙」によると「甲斐国の住人に逸見中務丞有直と云う者あり、古より逸見・武田・小笠原三家は甲州の大将なりしが、(中略) 東郡は加藤、西郡は逸見絵はりしを、後には一円武田拝領して加藤は被官に成、逸見は公方へ御奉公の躰也、西郡の名字の地斗知行有しかば、いかにしても武田を絶して甲州一円に守護せばやと、持氏公へ尽忠功ける」とあり、有直は北巨摩地域を領していたと考えられる。守護に任命された信元は自力で甲斐へ入国することができず、信濃守護小笠原政康の援助を受け、ようやく入国することができたのである。信元は逸見氏に対抗するため、信濃佐久から跡部氏を守護代として迎えている。しかし、応永28年（1421）以前には、信元は没している。

応永28年、幕府は再び高野山にいた信重を甲斐國守護に就任するよう要請している。一方、甲斐国内には信重の弟である信長の子の伊豆千代丸しかおらず、跡部氏が補佐して逸見氏と対峙していた。応永24年以来の合戦で、逸見氏は劣勢になりつつあった。そのため、応永33年（1426）6月、逸見氏の要請で足利持氏が一色持家に命じ、武田信長を攻めている。しかし、信長方が優勢であり、8月には持氏自身が甲斐へ出陣するのである。これには、信長も耐え切れず、鎌倉府へ降参した。そして信長は鎌倉へ出仕することになる。その間隙をぬって守護代の跡部氏が輪宝一揆という地侍集団と手を結んだ。信長は甲斐へ帰国し、日一揆と手を組み跡部氏に対抗するのである。永享5年（1433）4月、荒川で両陣営がぶつかり、信長方は敗れてしまい、信長は駿河へ逃れることとなる。このような状況下では、信重の甲斐入国実現はできなかった。だが、永享7年（1435）守護代の跡部氏が信重帰國を要請する使者を派遣するなどして、信重を受け入れる体勢が整いつつあった。永享10年（1438）、ようやく、信重は甲斐國守護となり、甲斐へ入国することができたのである。それと同時に、幕府は足利持氏追討の兵を起こし、持氏を自害させることに成功する（永享の乱）。逸見一族も、ほとんど持氏と運命を共にしたようである。また、嘉吉2年（1442）5月や文安元年（1444）2月にも合戦があり、逸見と名乗る人々が戦死している（『一蓮寺過去帳』）。信重入国後も甲斐国内は安定していなかったようである。

宝徳2年（1450）信重は没し、その跡を継いだのが、信守であった。その信守も5年後の康正元年（1455）に亡くなり、信昌がわずか9歳にして守護となるのである。そのため、守護代の跡部景家が権力をふるうことになる。そして、寛正6年（1465）、成人に達した信昌が跡部一族を滅亡させる。「王代記」に「上野守、西保小田野ノ城ニテ切腹」とあり、跡部景家は自害している。同時に逸見伊勢守らが討死をしており（『一蓮寺過去帳』）、北巨摩の武士たちもこの戦いに参加していたことが知ることができる。

寛正5年（1464）には信濃の諫諭信満が佐久の大井氏と結託して、甲斐へ侵入している。さらに、文明4年（1472）には再び、大井氏が甲斐へ侵攻し、花鳥山（御坂町）で武田信昌と合戦になっている。「王代記」に「岡（文明4年）五月四日、ヲハ子ノ城ニテ逸見一門皆切腹、逸見卅一才」とあり、この合戦にも、逸見氏が参加しており、逸見一門が切腹している。

一方、信昌は延徳4年（1492）に信綱に家督を譲っている。信昌隠居後、信綱の弟の油川信恵との対立が深

また、信昌は信惠に加担した。明応2年（1493）の合戦には信綱方が劣勢となり、逆に翌3年には信惠方が不利になりました。結局、信綱方有利のまま、明応7年（1498）に両陣営は和睦することになる。そして、永正2年（1505）武田信昌は没し、次いで、永正4年（1507）には信綱が病死した。そして、信虎（信直）が家督を継ぐのである（ここでは信虎で統一）。翌年に信虎は信惠を倒し、甲斐統一への道を歩み始めた。

信虎は、永正6年（1509）には郡内（都留郡）の領主小山田氏を屈服させ、永正14年（1517）には、駿河の今川氏結んでいた西郡の大井信達を降参させている。このときに、信達の娘が信虎に嫁いでおり、婦人との間には信玄らの子供が誕生している。永正16年（1519）、「妙法寺記」（『勝山記』）には「当国ノ内、浦ノ兵庫殿屋形様ト取合玉フヘキニ定リ、卯月迄モ不息」とある。「浦ノ兵庫殿」とは、今井信是で、浦城（須玉町）を本拠としたので、このように呼ばれている。結果は不明であるが、同じ年の12月には、信虎は川田（甲府市）にあった館を郷獨ヶ崎へ移し、甲斐国の国人たちを館の周囲へ集住させているので、信虎方が優勢であったのであろう。翌年には栗原・大井・今井といった国人たちが、甲府を離れ、信虎に離反した。【妙法寺記】には「同（永正17年）六月八日ニ東郡ノ内ミヤケ塚ニテ軍アリ、上意ノ足衆切勝テ、其日ニ栗原殿ノ城ヲマク、（中略）此年夏大炊殿ヲ屋形ヨリ賣玉ヘハ、貞テ大炊殿城ハ降参メサル、也、浦ノ殿モ屋形様ヘ降参アル也」とあり、三氏とも信虎に屈している。さらに、武田氏の家臣の駒井高白斎政武が書いた記録である「高白斎記」には「六月十日丙寅、今諏訪合戦、從是逸見・西郡滅却」とあり、今井氏が逸見氏と呼ばれていたことも注目される。つまり、今井氏は北巨摩の有力な国人逸見氏を継いでいたとみられていた。

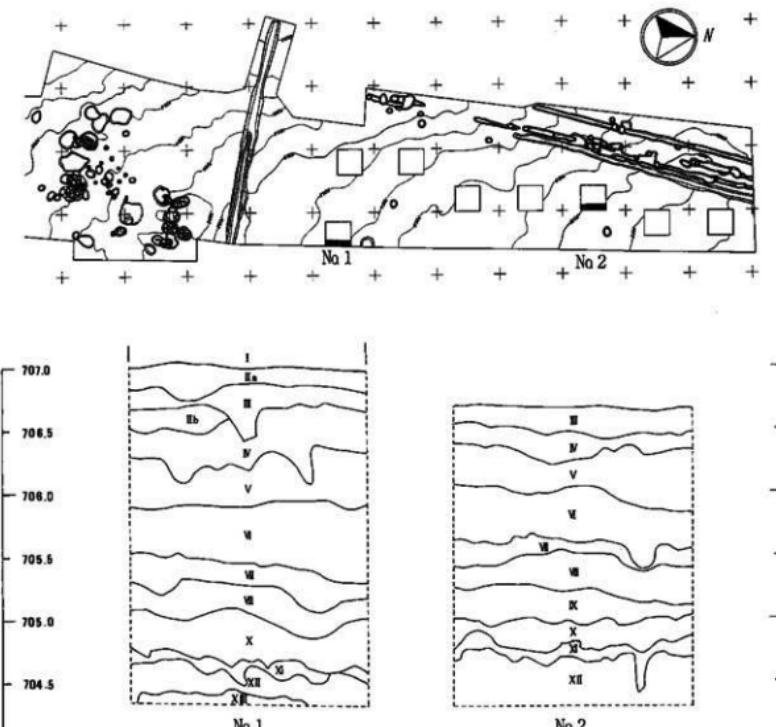
再び、享禄4年（1531）、「妙法寺記」に「此年正月廿一日ニ、浦殿・栗原殿屋形ヲサミシ奉テ府内ヲ引退、御獄へ馬ヲ入候、去間浦信本モ御同心ニテ御座候、然ハ此人信州譲方殿ヲ類候而、府中向メサレ候、（中略）浦衆打済、栗原兵庫殿譲方殿打死被食候」とあり、栗原氏と今井氏が武田信虎に謀反し、栗原氏らは謀反賴に援軍を頼んだが、それも実らず、信虎方の勝利となったのである。さらに、翌年（天文元年）、「妙法寺記」によると、「此年九月浦ノ信本、武田殿ニ敵ヲ被食候、去間信州ノ衆大勢賴娶候而、浦ヘ籠り被食候、去程ニ一国寄テ浦ノ城ヲ賣被食候、サレモ終ニ浦信本劣被食候而、屋形ヘ降参申候、去間城ヲ屋形ヘ渡シ申候而、ヒサシタニ御ツメ被食候、一國御無異ニ成候」とあり、今井信元が信虎を裏切り、浦城へ信州勢と共にこもっている。しかし、信虎は甲斐國の絶力を擧げて挑み、今井氏を降参させることに成功している。そして、「一國御無異ニ成候」とあるように、信虎は甲斐国を統一を完了したのである。

それ以後の北巨摩の武士というと、津金衆と呼ばれる武士団である。甲斐国内に衆と呼ばれる地域武士団があり、彼らは甲斐と他国との境の警備などを行っていたとされる。しかし、戦国大名武田氏の時代、津金衆が具体的に何をやっていたかは史料がなく不明である。津金衆のなかで、箕輪に勢力を張っていた清水氏は、武田氏滅亡後、天正10年（1582）に徳川氏と後北条氏の甲州の取り合いの時に、後北条方の味方をしていましたようである（『甲斐国志』）。津金衆の小池氏も、明確に事跡を追えるのは、やはり武田氏滅亡後である。小尾監物と津金修理亮とともに、小池筑前守が徳川家康の本領安堵状の宛名に出てくる。その後、徳川家康に仕えた。

ほかに、15から16世紀を物語るものとして挙げられるのは、石塔であろう。横森・赤台遺跡のある高根町域に限ってみても、何点か存在している。その中で銘のあるものは、永享9年（1437）の銘をもつ六地蔵幢が一つで、「永享九年丁巳三月時正」とある。二つ目は、「応仁元年九月廿四日 漸口建立 本横宗玄」と銘のある六地蔵幢もあり、これは龕部を欠いている。二つの石塔は、一般の人々に仏教が浸透しことを示すものであろう。さらに、板碑が数枚存在しているが、明確に銘がわかるものは一つしかない。それには、「南無阿弥陀仏長禄二年十月七日」とあり、これも仏教の広がりを示しており、自分の後生供養として造られるものが多いということから、極楽往生を願って建てられたものであろう。本遺跡から出土した五輪塔も、前述のような戦乱の時代と、仏教が一般の人々に浸透したこと反映するものと位置付けられるのではないか。

第4節 基本土層

I 黒褐色土層	VII 淡黄褐色土層	青色バミスを多く含む
IIa 黄褐色土層	VIII 明黄褐色土層	青色バミスを含む
IIb 暗黄褐色土層	IX 黄褐色土層	赤色スコリアを多く含む
III 暗黄褐色土層 ソフトローム	X 淡褐色土層	PM-1を稍粒状に含む
IV 暗褐色土層 ソフトローム	XI 茶灰褐色土層	



第2図 基本土層

- | | | |
|-----------|------------|-------------------------|
| V 黄褐色土層 | ハードローム | XII 灰茶褐色土層 |
| VI 明黄褐色土層 | 火山ガラスを多く含む | XIII 灰茶褐色土層 茶灰褐色土を粒状に含む |

基本土層図(第2図)は、旧石器時代における遺物の探査と堆積環境の把握を目的として深堀りした際に記録したものである。深堀り調査は2m×2mのトレンチを、遺構が存在しない調査区の北側に8本、南側に6本の合計14本設け、北側は3m近く、南側はほぼ1m掘り下げた。この結果、調査区北側は安定的に火山灰が堆積したのに対して、南側は北側で観察された層序関係は存在せず、2次堆積等によって土層は乱れていることが判明した。このことは、現在の地形からも裏付けられる。すなわち、遺構が密に存在する調査区中央から南側に向かう位置がちょうど台地の端部に位置しており、調査区南側は北から南へなだらかに傾斜している。

VI層のハードローム中に散在的に火山ガラスが含まれていたが、ATに比定され得るのかどうかは不明である。IX層の赤色スコリアはS-1となる可能性を有する。X層中のPM-1は黄褐色土層中に存在しているが、VI層やIX層の火山ガラスや赤色スコリアとは在り方が異なり、組成がやや密になる。しかし、量的多寡はあるにせよ、いずれも土層中にマトリックスとして微量に含まれるという点では同様であり、層序と年代の対応関係を追うのは困難である。

米山遺跡において良好な堆積状況に恵まれており、それとの比較が検討されたが、米山遺跡ほど良好で均質な堆積状況は認められず、微量に含まれるといった程度である。このため、厳密な意味での米山遺跡との対比ということは難しいが、一つの指標が確保されたということが言えるであろう。

第Ⅲ章 調査の概要と遺構および遺物

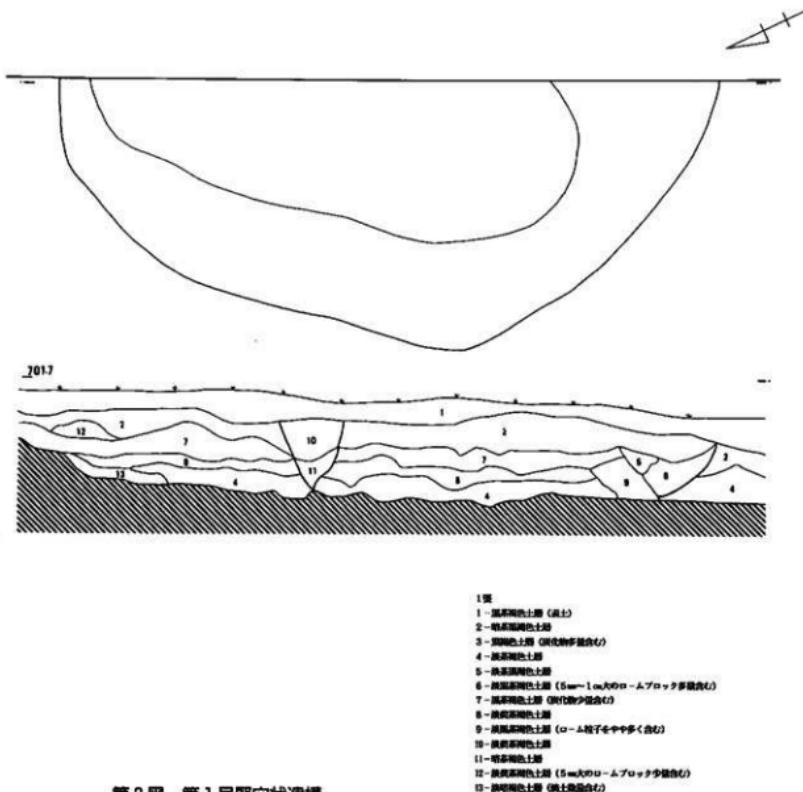
調査区全体を概観すると平安時代以降と考えられる竪穴状遺構1基、绳文時代中期の掘立柱建物跡1基、绳文時代から戦国時代にかけての土坑63基で、このうちの17基が戦国時代の墓坑群に伴うものである。このほか、五輪塔が集中した部分が1箇所、墓域を示すものと考えられる溝が1条、近世以降と考えられる畝状遺構が6箇所認められた。

本遺跡で主体を示す遺構は、上記に示したものの中でも調査区の中央付近から発見された15・16世紀代の戦国時代に造営されたと考えられる墓坑群で、立地的には南側に傾斜した斜面を登りきった平坦部存在しており、その眼下には水田地帯が広がっている。遺物では、これらの遺構に関連したものと考えられる多量の五輪塔と、副葬品としての銭（六道銭）・土師質土器・木挽の漆塗膜片が発見された。

第1節 竪穴状遺構

第1号竪穴状遺構（第3図）

（位置） D-5・7、E-7グリッド、東側が調査区外に位置している。



第3図 第1号竪穴状遺構

(形態・規模) 不整橢円形を呈するものと考えられ、長径4.27m、短径は現存値で2.13mを測る。立ち上がりは緩やかである。

(時期) 平安時代以降の所産と考えられる。

(出土遺物) 覆土からは、土師器の小破片が出土している。上層付近では、近世以降の陶器類の細片も出土している。

第2節 挖立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡（第4図）

(位置) D-14・15グリッド

(形態・規模) 不整方形を呈する。長径3.30m、短径は1.96mを測る。

(柱穴) 柱穴は直接関係があるものが8本と隣接して存在するものが1本あり、合計9本認められる。ピット1は長径28cm×短径25cm×深さ32cm、ピット2は長径27cm×短径24cm×深さ15cm、ピット3は長径36cm×短径28cm×深さ21cm、ピット4は長径28cm×短径22cm×深さ28cm、ピット5は長径30cm×短径27cm×深さ33cm、ピット6は長径31cm×短径25cm×深さ27cm、ピット7は長径32cm×短径20cm×深さ29cm、ピット8は長径20cm×短径17cm×深さ28cm、ピット9は長径35cm×短径30cm×深さ30cmを測る。

(時期) 繩文時代中期の所産と考えられる。

(その他) 炉穴が確認できなかったので掘立柱建物跡としたが、住居跡の可能性もある。

(出土遺物) 本構間に連すると考えられる第51号土坑から打製石斧（第45図1）が出土しているが、ピット内からの遺物の出土は認められなかった。

第3節 土坑（縄文時代）（第5～6図）（第2表）

確認された土坑は全部で63基である。このうち、覆土の状態や遺物の内容から縄文時代に位置付けられる46基についてここで取り扱うものである。調査区は桑畠であったこともあり、遺構の残存状況が悪かったこともあり、遺物はほとんど認めることができなかった。時期的には、包含層出土遺物などから中期から晩期にかけての所産と考えられるが限定できるものはない。遺物が出土した土坑は以下のとおりである。第6号土坑からは黒曜石製の抉入搔器（第45図8）が1点出土し、最大長3.00cm、最大幅1.50cm、最大厚0.76cmを測る。第49号土坑からは中期中葉と考えられる土器片が2点出土した。第51号土坑では前述のとおり打製石斧（第45図1）が1点出土しており、基部が欠失しているが良好な状態であり、石材は頁岩製で最大長11.2cm、最大幅6.6cm、最大厚2.0cmを測る。第57号土坑からは、沈線が施された晩期の水1式の土器片（第44図6・7）が2点出土している。

第2表 土坑一覧表

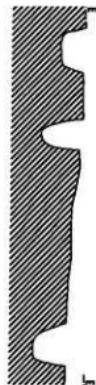
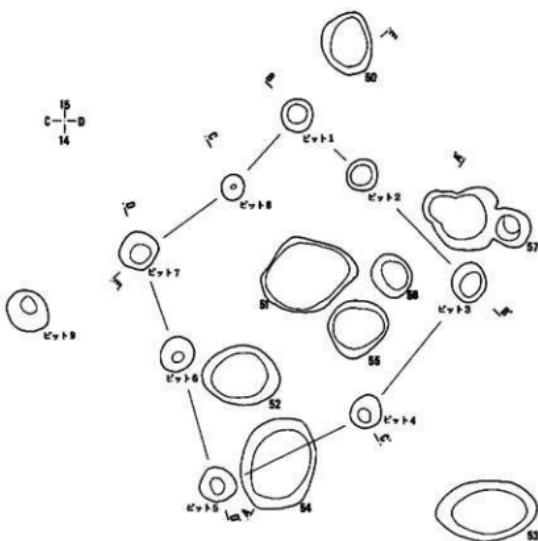
この表では、確認された土坑すべてについて記載したが、大部分のものが縄文時代に位置付けられるものであるため、中世の墓坑群に関連するものに限定して備考欄に時期ならびにその性格について明記した。後者の墓坑群に関する詳細な内容については、次の第4節を参照して頂きたい。

第2表 土坑一覧表

() 現存値

土坑番号	位 置	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	形 怪	立ち上がり	備 考
1	B-4	108	57	84	不整円	断面が緩く、変化が急	
2	D-8	93	70	19	相円	緩やか	西側から小窓2点。
3	D-8	55	46	22	円	緩やか	
4	D-12	122	61	—	不要機円	緩やか	小ピットが3箇所存在する。
5	D-12	160	96	38	不整	緩やか	北西面にテラス。
6	E-12	(73)	55	18	円	緩やか	東側が調査区外。2基の土坑が切り合っている可能性あり。黒曜石の細片。
7	E-12	90	(50)	12	不整機円	急	東側が調査区外。

8	D-13	81	75	49	円	急	東側がテラス状。土を切る。
9	D-13	68	55	18	楕円	やや緩やか	8土に切られる。
10	C-11	98	60	14	楕円	急	
11	B・C-11	(233)	165	34	楕丸長方	緩やか	坑底部に3箇所の落ち込みあり。近世火葬跡の可能性あり。
12	C-12	75	60	24	円	やや緩やか	
13	C-13	49	45	15	円	やや緩やか	
14	D-12	27	25	18	円	緩やか	
15	C-11	45	38	16	円	急	
16	C-10	88	57	14	不整円	西側が急、東側緩やか	
17	C-9	90	45	6	不整円	急	北東部にピットあり。
18	C-9	81	41	20	楕円	西側が急、東側緩やか	
19	B-10	(65)	60	16	楕円	急	西側半分が調査区外。
20	C-14	140	(105)	30	楕円	緩やか	中世の火葬跡。覆土から碳化物と多数の礫、銭1枚出土。
21	D-12	85	77	20	円	急	
22	C-14	(115)	95	19	楕円	緩やか	中世の墓の可視性あり。20cm大の礫出土。
23	C-14	51	30	31	円	南側は急、北側緩やか	
24	C-15	50	40	13	円	南側は急、北側緩やか	
25	C-14・15	117	111	38	不整円	やや緩やか	中世の墓の可視性あり。覆土に大型の礫を含む。すり鉢状。
26	E-15・16	112	100	42	不整円	緩やか	中世の墓。覆土から縄多段。すり鉢状。子供の墓か?
27	E-15	120	90	65	楕丸長方	急	中世の墓。覆土から縄多段。銭を5枚、人骨出土。
28	E-15	98	67	71	不整円	急	中世の墓。覆土から五輪塔および縄多段。銭5枚、人骨出土。
29	D・E-15	120	85	25	T字状	緩やか	中世の火葬跡。東側に煙道が存在する。土縛質土器2点、骨片、鐵製品出土。
30	D-15	148	106	60	不整円	緩やか	すり鉢状。直筒木棺。坑底部は△凹。
31	D-14	176	97	76	不整円	急	中世の墓。覆土から五輪塔および縄多段、銭2枚、人骨出土。南側に小ピット。
32	C-19	35	30	20	円	南側は急、北側緩やか	
33	C-19	35	30	24	円	緩やか	
34	C-19	32	20	20	楕円	緩やか	
35	D-19	35	30	26	円	緩やか	
36	C-20	28	23	20	円	緩やか	
37	E-22	78	54	20	円	やや急	
38	E-18	55	38	—	楕円	西側が急、東側緩やか	東側が調査区外。
39	D-15・16	153	87	53	楕円	急	中世の墓。覆土から縄多段、溶接した銭など5枚出土した。火葬骨を埋葬?
40	E-14・15	90	70	41	楕丸長方	急	中世の墓。やや小型。覆土から縄と五輪塔、銭5枚出土。南側に小ピット。
41	C-14	(120)	78	52	楕丸長方	やや急	中世の墓。41土に切られる。覆土から縄と五輪塔、人骨が出土。
41'	C-14	(120)	130(85)	38	不整円	やや急	中世の墓。40土を切る。覆土から縄多段、人骨、漆椀、銭6枚出土。
42	C-14	70	(60)	23	楕円	やや急	中世の墓。41と43土に切られる。覆土から銭1枚出土。
43	C-14	149	102	55	楕円	やや急	中世の墓。42土を切る。覆土から錢が8枚、銭を包んでいた紙、人骨出土。
44	D-14	236	152	40	不整円	急	中世の火葬跡。北側に小ピット。
45	D-14	103	(70)	18	楕円	緩やか	46土を切る。
46	D-14	95	85	108	楕円	急	45・46に切られる。覆土から銭5枚、人骨出土。
46'	D-14	85	70	40	不整方	緩やか	すり鉢状。46土を切る。小型の五輪塔を含むため、子供の墓か?
47	D-13	60	55	17	楕円	緩やか	
48	D-13	80	55	17	楕円	緩やか	
49	D-13	50	45	19	円	緩やか	
50	D-14	79	40	11	楕円	やや急	
51	D-14	78	54	7	楕円	急	
52	D-14	63	48	15	楕円	やや緩やか	
53	D-14	82	46	10	楕円	急	
54	D-14	75	56	12	楕円	急	
55	D-14	49	35	4	楕円	緩やか	直状。
56	D-14	35	24	41	楕円	急	
57	D-14	53	44	13	楕円	急	
58	D・E-14・15	90	(90)	5	楕丸方	緩やか	東側に直線約30cmのピット。撲土・炭化物の分布から中世の火葬跡か?
59	E-14	135	73	21	楕円	やや緩やか	
60	E-15	50	35	16	楕円	急	
61	E-14	78	34	17	楕円	急	

C
15
14

4



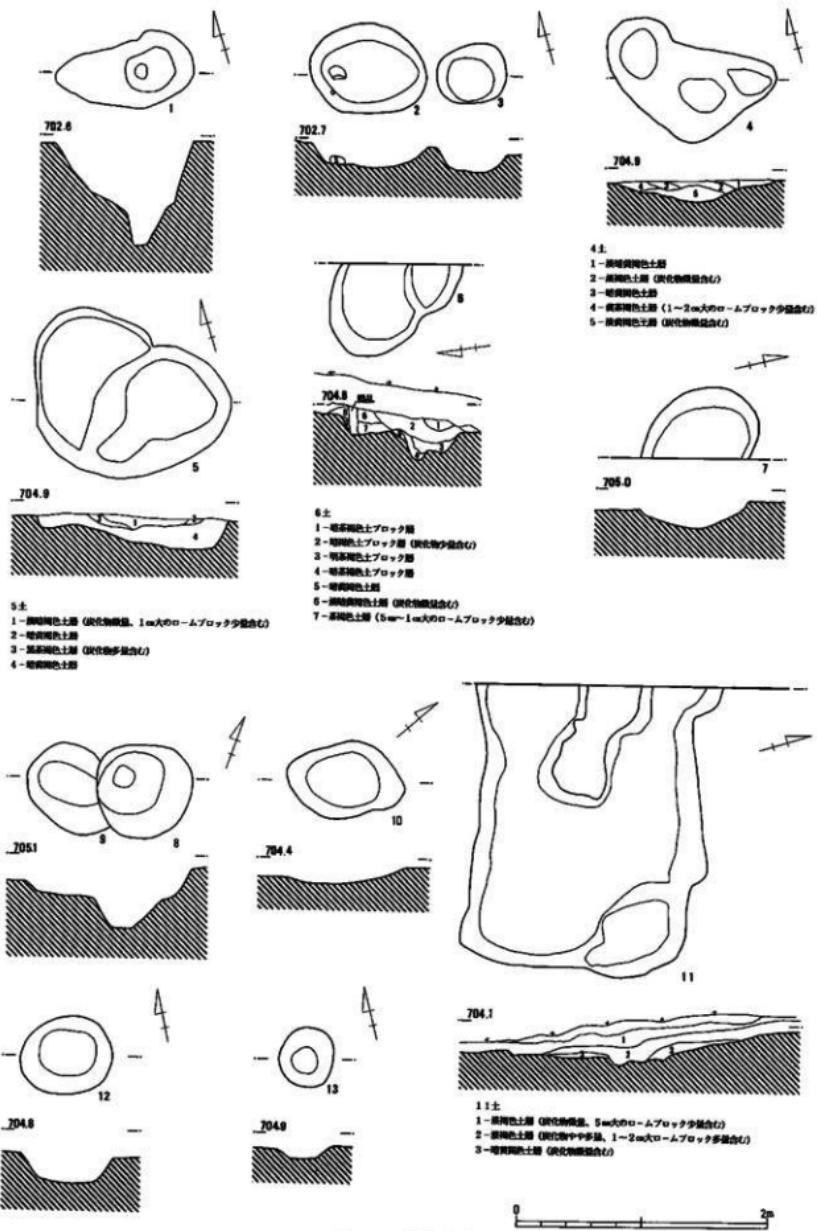
A.708.5



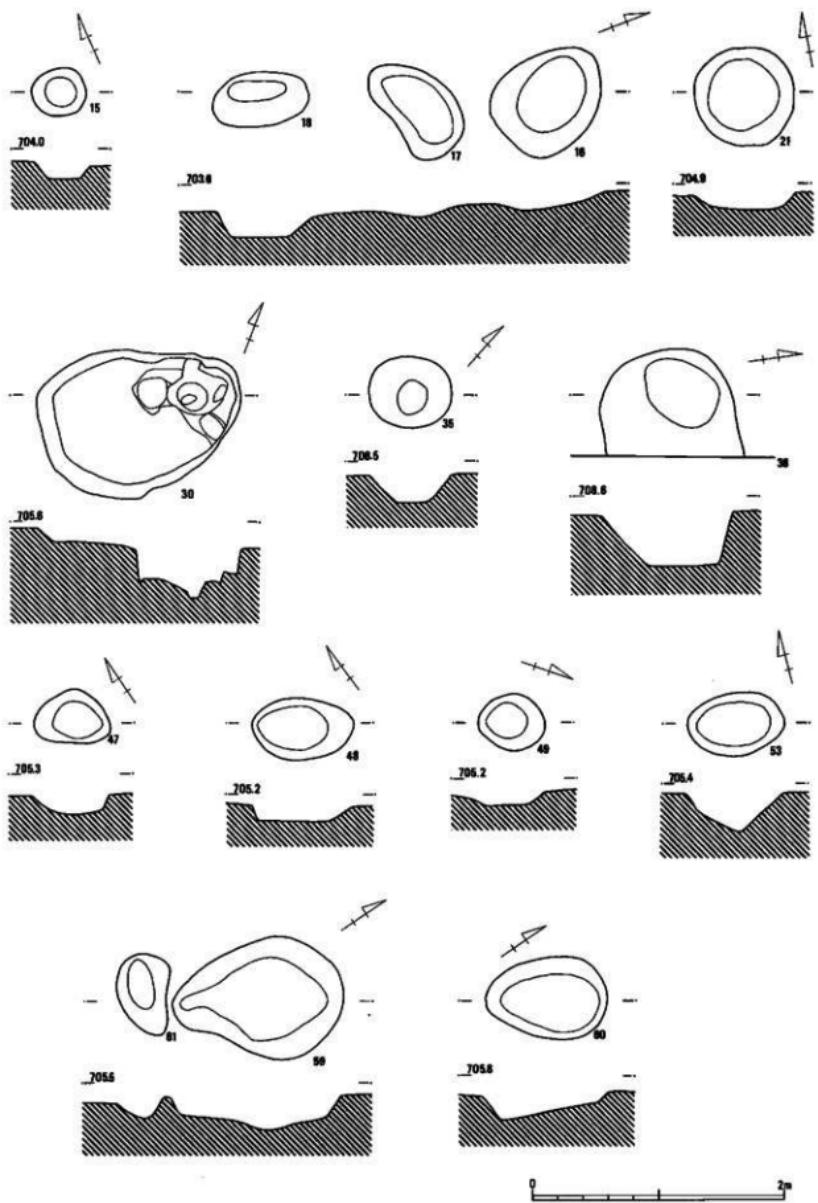
0 1 2 m



第4図 第1号掘立柱建物跡



第5図 土坑(1)



第6図 土坑(2)

第4節 墓坑群〔中世〕(第7~28図)

中世の墓坑群に関連する土坑は、第2表で示したように合計19基認められ、その分布は調査区のほぼ中央付近であるC~E-14・15グリッド部分に環状に存在する。地形的には南向きの緩やかな斜面を登りきった平坦部に位置し、その眼下周辺には水田地帯を望むことができる。時代的には伴出した五輪塔の形態や副葬された土質土器、また六道鏡である鏡種、墓の形態から戦国時代である15~16世紀代に造営されたものと考えることができる。墓の立地条件からは、一家族関係の墓地であることが予想される。また墓坑群の北側に東西方向に走る溝が存在しているが、この溝からも多量の五輪塔が出土しており、第6節でふれるが墓域を示す区画溝である可能性がある。これらの墓に伴って出土した五輪塔に関する詳細なことについては、特記事項を除いて本節の最後と第IV章で触れたいと思う。

第20号土坑(第7図)

(位置) C-14グリッドで、第22号土坑と隣接する。

(造構の種類) 挖り込みが浅く、覆土に多量の炭化材が含まれることから火葬跡と考えることができる。

(形態・規模) 不整がかった楕円形を呈しており、坑底部から少し浮いた地点に15~35cm大の礫が10点配置されている。規模は、長径140×短径(105)×深さ30cmを測る。

(人骨の有無・出土状態) 人骨と考えられる小片が、覆土中に少量認められた。

(出土遺物) 坑底部に敷かれた砾群の間から、六道鏡の一部と考えられる永楽通寶(第7図)〔初鑄年代 1408年〕が一枚発見された。

第22号土坑(第7図)

(位置) C-14グリッドで、第20号土坑と隣接する。

(造構の種類) 墓と考えられるが、第20号土坑に付随する造構の可能性も示唆される。

(形態・規模) 楕円形を呈しており、坑底部から浮いた地点に20cm大の礫が1点配置されている。規模は、長径(115)×短径95×深さ19cmを測る。

(人骨の有無・出土状態) 人骨は無し。

(出土遺物) 遺物は無い。

第25号土坑(第7図)

(位置) C-14・15グリッド。

(造構の種類) 墓の可能性が強い。

(形態・規模) 不整楕円形を呈しており、立ち上がりが緩く摺鉢形をしている。覆土中程から40cm大の礫が1点認められる。規模は、長径117×短径111×深さ38cmを測る。

(人骨の有無・出土状態) 人骨は無し。

(出土遺物) 遺物は無い。

第26号土坑(第8~10図)

(位置) C-14・15グリッド。

(造構の種類) 墓の可能性が強い(配石を伴う)。

(形態・規模) 不整楕円形を呈しており、立ち上がりが緩く摺鉢形をしている。覆土中程から20cm大の礫の他、五輪塔が認められた。規模は、長径122×短径100×深さ42cmを測る。

(人骨の有無・出土状態) 人骨は無し。

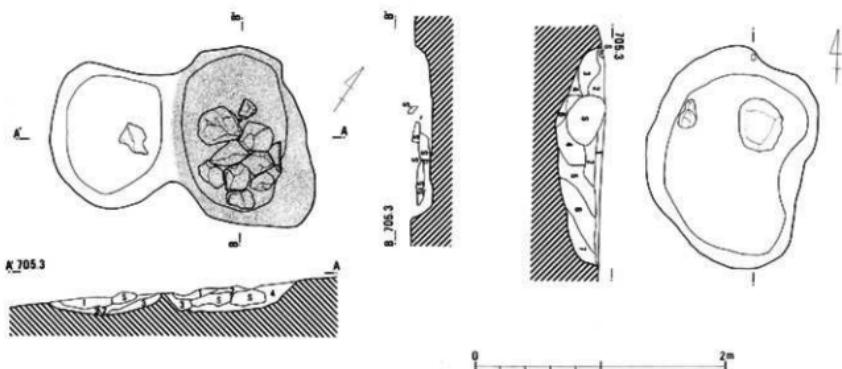
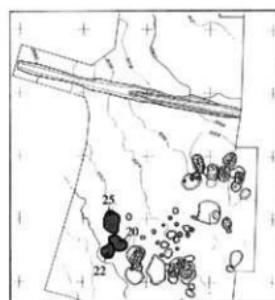
(出土遺物) 覆土上層付近から五輪塔が11点(第9図1~11)出土している。その内訳は、空風輪1点、火輪6



掘り上げ状況（第20・22号土坑）



錢出土状況



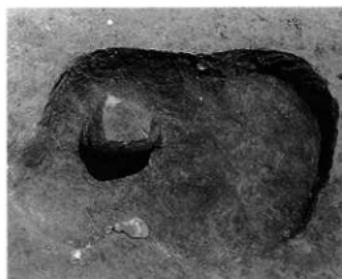
- 20上
 1-褐色陶色土層 (鉄化合物やや多く含む)
 2-粘土質・地土層
 3-褐褐色陶土層 (鉄化合物少含む)
 4-暗褐色陶色土層

- 22上
 1-褐褐色土層 (褐褐色土粒子、1cmのロームブロック多量含む)
 2-暗褐色土層 (鉄化合物少含む、5mmのロームブロック多量含む)
 3-褐褐色土層 (鉄化合物含む)

- 25上
 1-淡褐色陶色土層 (鉄化合物少含む)
 2-淡褐色陶土層 (鉄化合物少含む)
 3-暗褐色土層
 4-暗褐色陶色土層 (鉄化合物やや多く含む)
 5-黄茶褐色土層 (鉄化合物含む、2~3cm大ロームブロック少量含む)
 6-暗褐色土層 (鉄化合物微量含む)
 7-明褐色土層

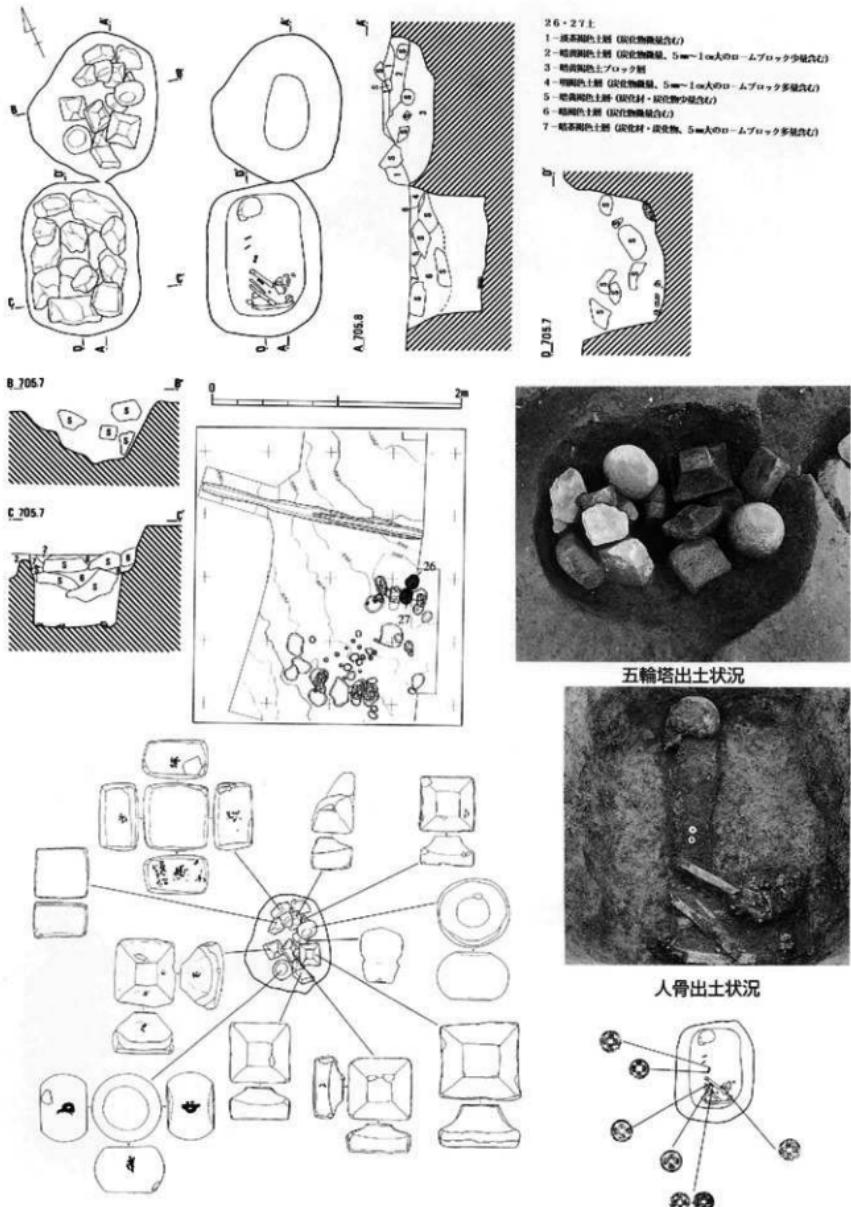


第20号土坑出土銭

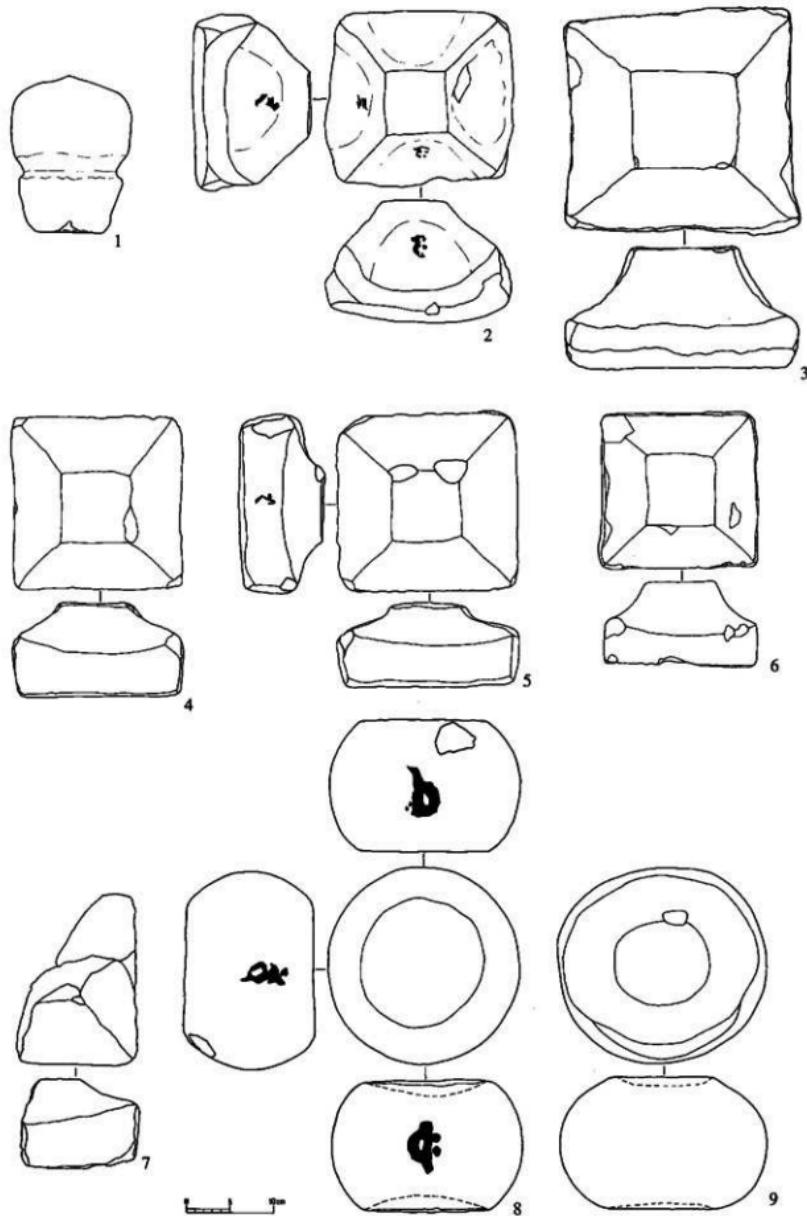


掘り上げ状況（第25号土坑）

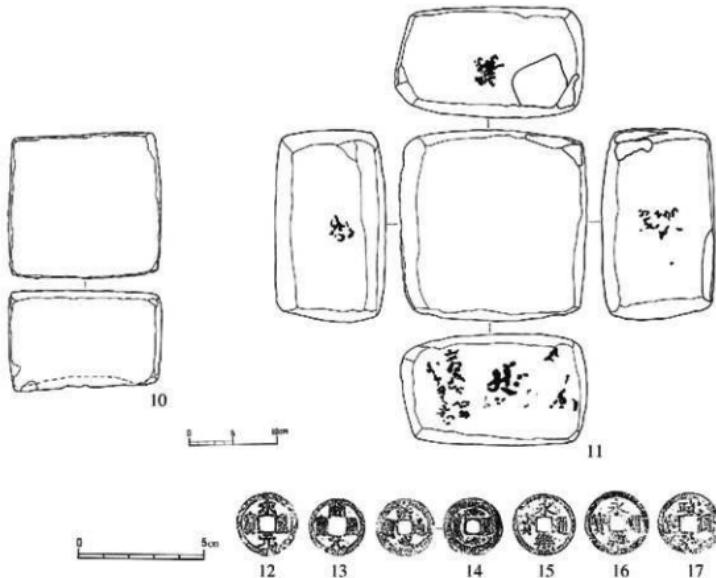
第7図 第20・22・25号土坑および出土遺物



第8図 第26・27号土坑



第9図 第26号土坑出土遺物



第10図 第26・27号土坑出土遺物（10～11 26土、12～17 27土）



墓坑群検出状況



第26～29・39号土坑検出状況

点（墨書の存在するもの2点）、水輪2点（墨書の存在するもの1点）、地輪2点（墨書の存在するもの1点）で、墨書のあるものには主に梵字が施されているが、地輪の第10図11には北方涅槃門のアグが中央に書かれ、その左上部分に「享暦」と推定される元号のほか、右側には戒名と考えられる文字が認められる。この享暦年間は1528～1531年であることから、本土坑が造立された時期は16世紀前半代の可能性が示唆される。

第27号土坑（第8・10図）

（位置）E-15グリッド。

（遺構の種類）土坑墓（配石を伴う）。

（形態・規模）隅丸長方形を呈している。土層断面を見ると第26号土坑より下がった地点に遺構確認面を見ることができるが、これは試掘調査時に掘り下げた結果このような状況で確認されたものであり、従て覆土の上層ではなく中程付近に20～40cm大の礫が遺体に蓋をするように配されていた。遺体は木棺に納められていたものと考えられ、配石の中心部分は棺と遺体が朽ちていった際に陥没状況を示している。規模は、長径120×短径90×深さ65cmを測るが、第26号土坑との位置的な関係から当初の深さは約100cm存在したものと考えられる。

（人骨の有無・出土状態）人骨は頭蓋骨と脚部がよく残っていた。出土状況としては、膝を折りたたみ正座のような状況で、北側に頭を、顔を西に向けて埋葬した北頭側臥の屈葬をとっている。

（出土遺物）六道鏡が人骨の胸部付近から5枚（第10図12～17）出土している。その内訳は、永楽通寶2枚（第10図15・16）〔初鋤年代 1408年〕、開元通寶（第10図13）〔初鋤年代 921年〕、宋通元寶（第10図12）〔初鋤年代 960年〕、政和通寶（第10図17）〔初鋤年代 1111年〕、洪武通寶（第10図14）〔初鋤年代 1368年〕が各1枚である。

第28号土坑（第11～13図）

（位置）E-15グリッド。

（遺構の種類）土坑墓（配石を伴う）。

（形態・規模）隅丸長方形を呈している。土層断面を見ると南北に存在する円形の落ち込みは、切り合い関係が認められない状況から、本土坑が造られる際に一緒に構築されたものであることが理解できよう。覆土の中程付近に40cm大の礫や多数の五輪塔によって、遺体に蓋をするように配されていた。遺体は木棺に納められていたものと考えられ、配石は棺と遺体が朽ちていった際に約20～25cm程度全体的に陥没した状況を示している。本体の規模は、長径98×短径67×深さ71cmを測るが、墓が造られた当初の段階では陥没した状況から約20～30cmのマウンドが存在した可能性が考えられ、このマウンドから坑底部までの深さは約120cm程度存在したものと推定される。本土坑は他のものに比べて、全体的にやや小型である。

（人骨の有無・出土状態）人骨は脚部が特によく残っていた。出土状況としては、膝を折りたたみ、北側に頭を、顔を東に向けて埋葬した北頭側臥の屈葬をとっている。

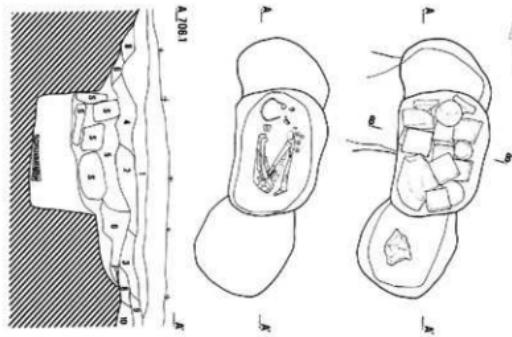
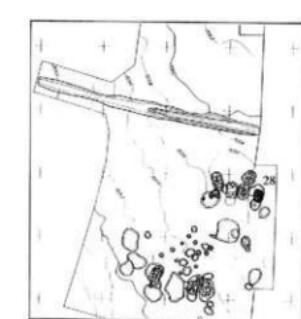
（出土遺物）六道鏡が人骨の膝付近から6枚（第12図1～6）出土している。その内訳は、開元通寶（第12図1・6）〔初鋤年代 921年〕、天祐通寶（第12図2）〔初鋤年代 1228年〕、元祐通寶（第12図4）〔初鋤年代 1086年〕、洪武通寶（第12図3）〔初鋤年代 1368年〕、光順通寶（第12図1）〔初鋤年代 1460年〕が各1枚である。覆土からは五輪塔が12点（第12・13図7～18）出土しており、その内訳は火輪3点（墨書の残るもの1点）、水輪2点（墨書の残るもの1点）、地輪7点（墨書の残るもの4点）である。

第29号土坑（第14図）

（位置）D・E-15グリッド。

（遺構の種類）火葬墓。

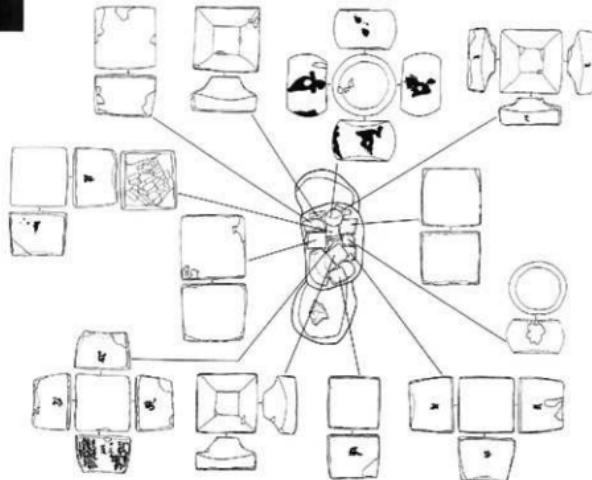
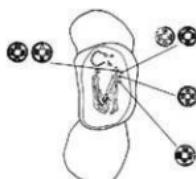
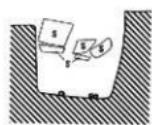
（形態・規模）隅丸長方形の落ち込むプランの南側にテラス状の広がりが、東側には煙道と考えられる溝状の落



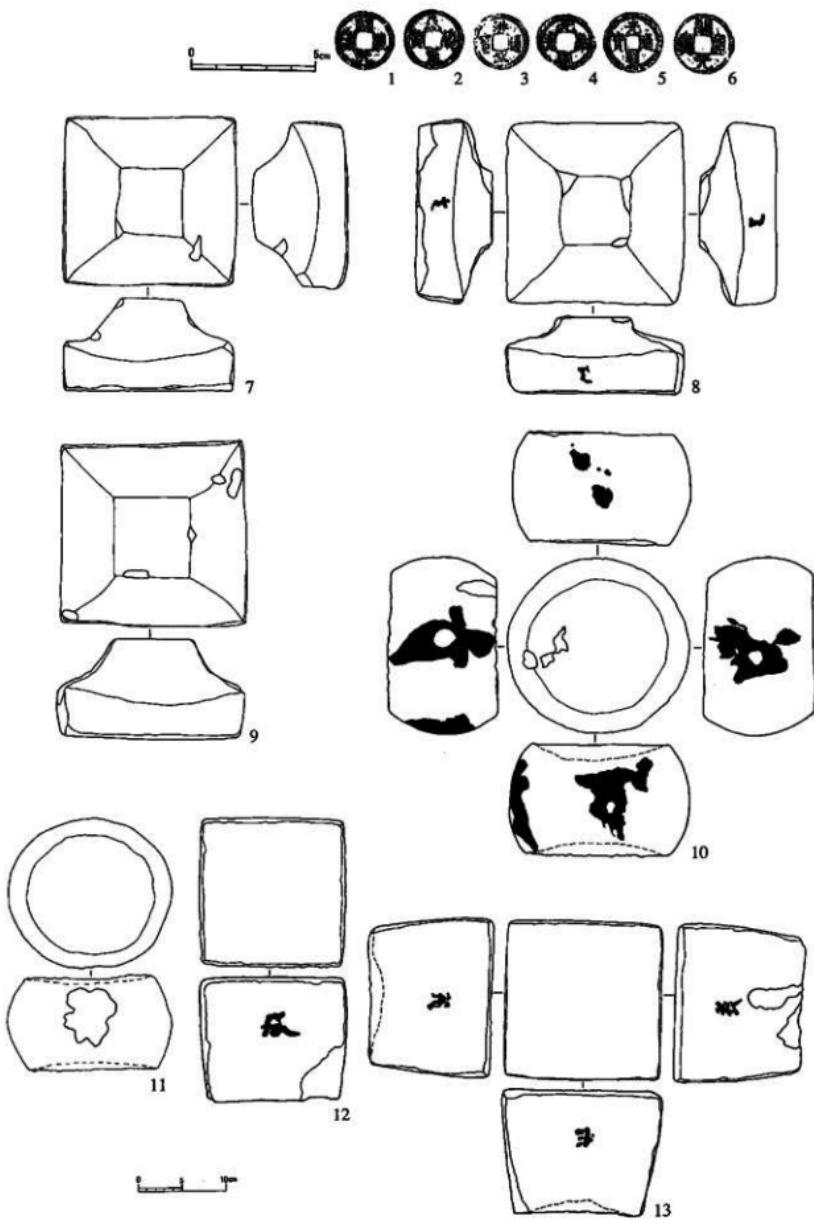
人骨出土状況

- 28号
 1-枯葉地土層 (炭化物、5~20人のロームブロック少量含む)
 2-赤茶褐色土層 (炭化物微量含む)
 3-淡黃褐色土層 (炭化物微量含む)
 4-淡黃褐色土層 (炭化物、炭灰材、3~5人のロームブロック多量含む)
 5-淡黃褐色土層 (炭化物、5人のロームブロック少量含む)
 6-淡黃褐色土層 (炭化物微量含む)
 7-淡黃褐色土層
 8-淡黃褐色土層
 9-淡褐色土層 (炭化物微量)
 10-淡褐色土層 (炭化物微量、5~10人のロームブロック多量含む)

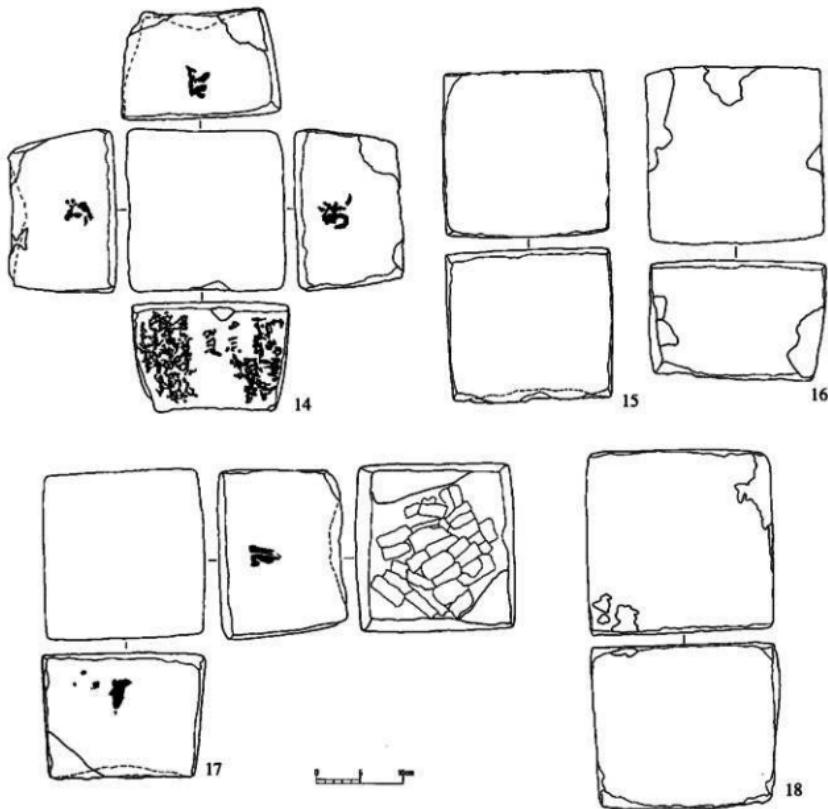
B-206.1



第11図 第28号土坑



第12図 第28号土坑出土遺物（1）



第13図 第28号土坑出土遺物（2）

ち込みが存在し全体的にはT字形を呈している。土層断面を見ると煙道が第27号土坑の上に位置していることが確認できるため、本土坑の方が新しい段階のものであることが理解できる。覆土には炭化材や焼土で満たされていたが、その合間に骨片や骨粉が認められた。落ち込む圓丸長方形のピット内には、南北の両端に20~50cm大の礫が配置されており、推測であるがこの石の上に遺体を容れた棺を置いて火葬したものと考えられる。このピットの西側には土師質土器の环が2点器と蓋となるような形で認められた状況から火葬骨を埋納した葬骨器であった可能性が考えられるが、器内はほとんど炭であった。全体の規模は、長径205×短径188×深さ25cm、圓丸長方形のピットは長径123×短径88cm、煙道部は長さ95×幅45×深さは約5cm存在しているが、前述のように試掘調査時の削平から全体的に深さが約30cm前後プラス数値で残存していたものと考えられる。

（骨の有無・出土状態）人骨は破片が主体である。出土状況としては、炭化材の中に散在するといった状況である。

（出土遺物）16世紀前半代と考えられる土質土器が2点（第14図2・3）出土しており、何れも底部には回転糸切り痕が認められ、器面の色調は二次焼成を受けたせいかやや灰色がけている。2は口径11.0cm×器高2.6cm、3は口径12.6cm×器高3.2cmを測る。この他、土質土器の内部の炭化材を洗浄したところ、銅が溶解して原状を

留めていないものが1点（第14図1）が発見された。

第31号土坑（第15・16図）

（位置）D-14グリッド。

（遺構の種類）土坑墓（配石を伴う）。

（形態・規模）不整がかった楕円形を呈している。土層断面を見ると南側に存在する楕円形の落ち込みは、切り合ひ関係が認められない状況から、本土坑に付隨するピットと考えられ、東側に張り出したテラス部分については本土坑を構築する際の足場と考えられる。覆土の中程付近には20~50cm大の礫や多数の五輪塔によって、遺体に蓋をするように配されていた。遺体は木棺に納められていたものと考えられ、配石は棺と遺体が朽ちていった際に約20cm程度全体的に陥没した状況を示し、北側の頭部付近がさらに20cm程度沈んでいる。本体の規模は、長径135×短径97×深さ76cmを測るが、南側の小ピットは長径72×短径は推定約50cmである。本土坑は他のものに比べて、全体的にやや小型である。

（人骨の有無・出土状態）人骨は頭蓋骨と脚部がよく残っていた。出土状況としては、膝を折りたたみ、北側に頭を、顔を西に向けて埋葬した北頭側臥の屈葬をとっている。

（出土遺物）六道銭と考えられるものが、配石の上部から2枚（第16図1・2）重なって出土している。この銭には炭化物が付着していた。内訳は、元豐通寶（第16図1）〔初鑄年代 1078年〕、嘉定通寶（第16図2）〔初鑄年代 1208年〕で、嘉定通寶背文には「十四」が描かれている。覆土からは五輪塔（第16図3~10）が8点出土しており、その内訳は火輪3点、水輪1点、地輪4点（墨書が残るもの1点）で、地輪に示された墨書には梵字があり、第16図9のように4面にそれぞれ梵字が施されているほかに、南方修業門を示すアーナの梵字が示された部分の右上部分に「奉」の字が読み取ることができるものもある。

第39号土坑（第17図）

（位置）D-15・16グリッド。

（遺構の種類）土坑墓（配石を伴う）。

（形態・規模）不整がかった楕円形を呈している。土層断面を見ると覆土の上層付近から中層程にかけて15~50cm大の平たい礫によって、遺体に蓋をするように配されていた。遺体は木棺に納められていたものと考えられ、配石は棺と遺体が朽ちていった際に中央付近で、約30cm程度陥没した状況を示している。本体の規模は、長径153×短径87×深さ53cmを測る。本土坑は他のものに比べて、全体的にやや大型であるが良好な遺存状態であった。

（人骨の有無・出土状態）人骨は全く残っていないかった。銭の出土位置が手のあたりと考えられるため、膝を折りたたみ、北側に頭を、顔を西に向けて埋葬した北頭側臥の屈葬をとっているものと想定される。

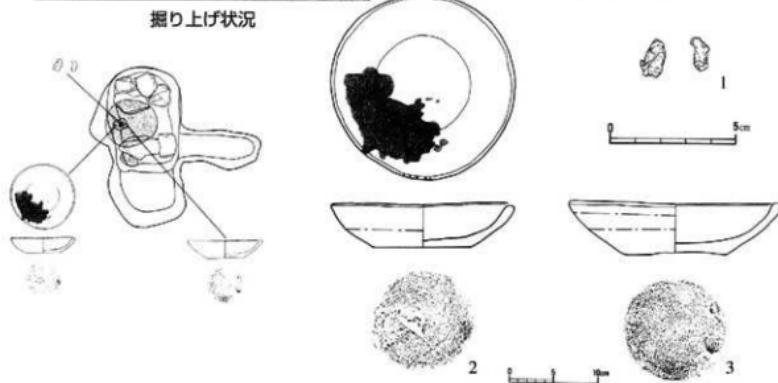
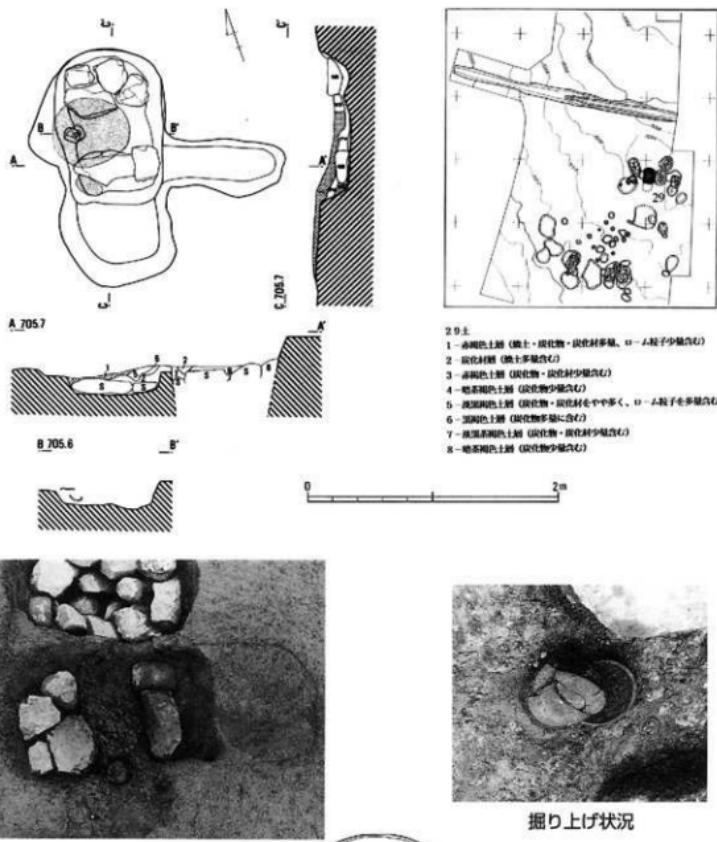
（出土遺物）六道銭と考えられるものが、坑底部から3枚（第17図1~3）重なって出土している。この銭にはこれらを包んでいたものと想定される紙と髪状の纏糸が銭に吸着した状態で認められた。銭の内訳は、天聖元寶（第17図2）〔初鑄年代 1023年〕、皇宋通寶（第17図3）〔初鑄年代 1039年〕、元豐通寶（第17図1）〔初鑄年代 1078年〕が各1枚である。

第40号土坑（第17・18図）

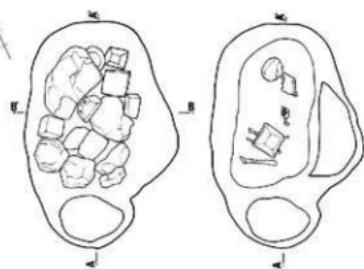
（位置）E-14・15グリッド。

（遺構の種類）土坑墓（配石を伴う）。

（形態・規模）不整がかった楕円形を呈している。南側に存在する楕円形の落ち込みは、本土坑に付隨するピットと考えられる。覆土の中程には30~60cm大の礫によって、遺体の頭部付近に蓋をするように配されていた。遺体は、覆土の状態から木棺に納められていた可能性が考えられる。本体の規模は、長径90×短径70×深さ41



第14図 第29号土坑及び出土遺物

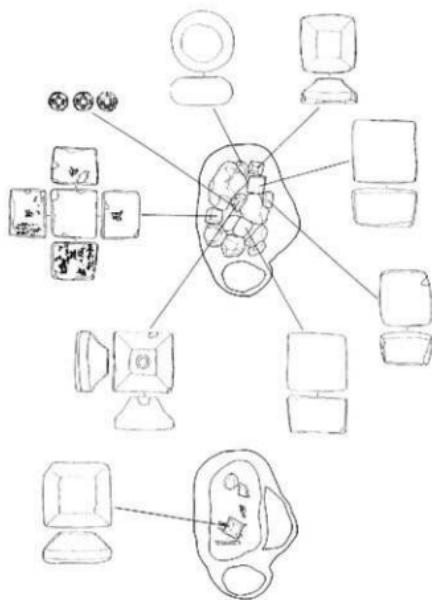


B_705.4



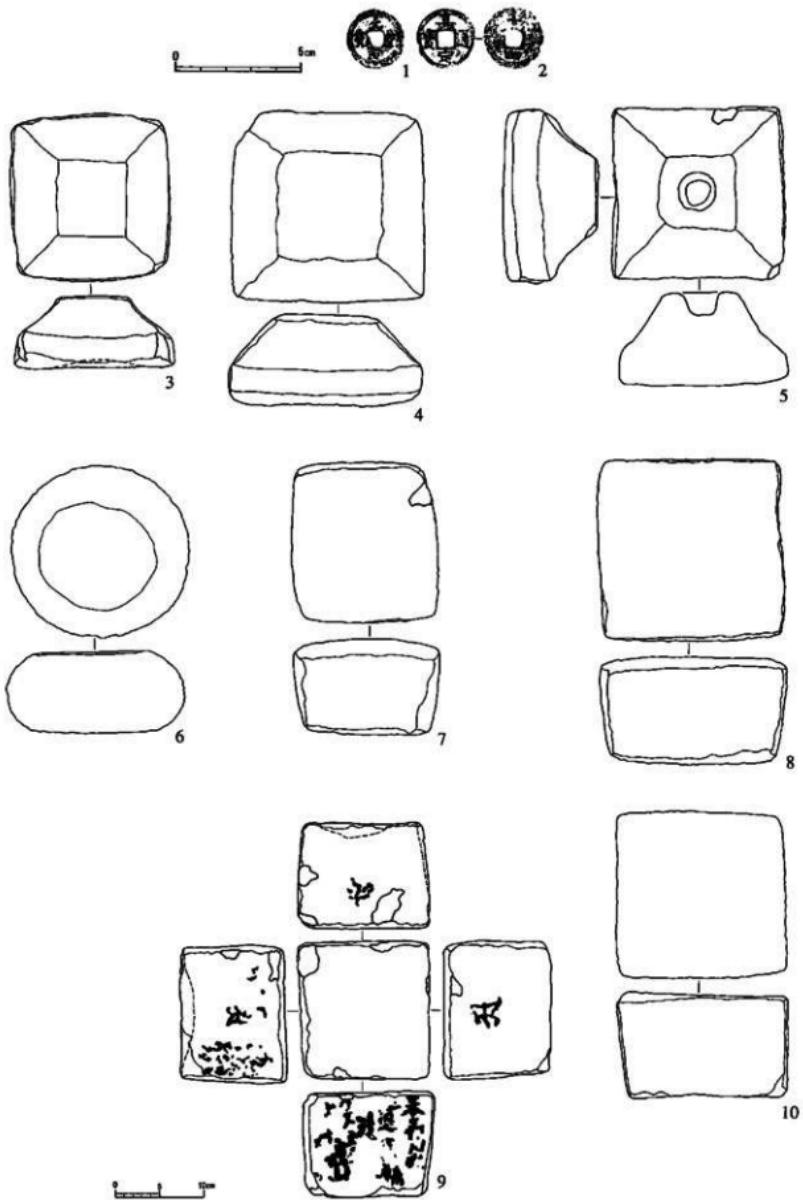
- 31号
1-黑褐色土層(炭化物、1~2cm大ロームブロック少額含む)
2-黒褐色土層(ロームブロック層(炭化物微量含む))
3-褐褐色土層(炭化物微量含む)
4-褐褐色土層(炭化物少額、1~3cm大ロームブロックや多く含む)
5-褐褐色土層(炭化物微量含む)
6-褐褐色土層(炭化物微量含む)

0 2m

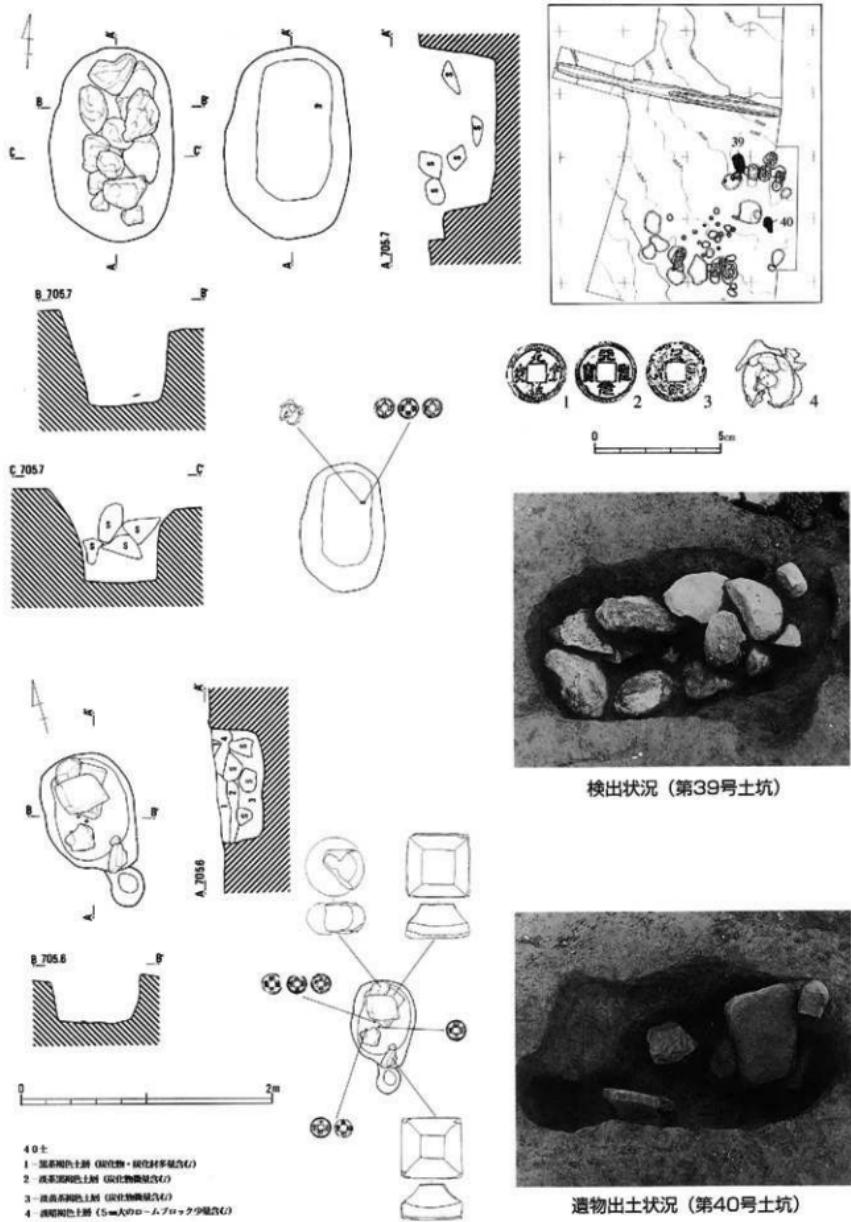
第46・46号土坑(上)
第31号土坑(下)

人骨出土状況

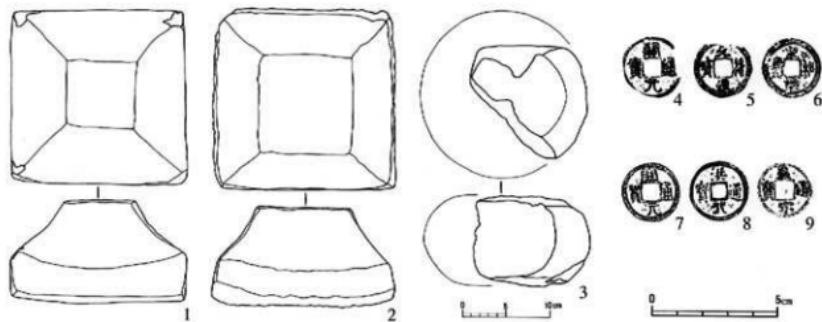
第15図 第31号土坑



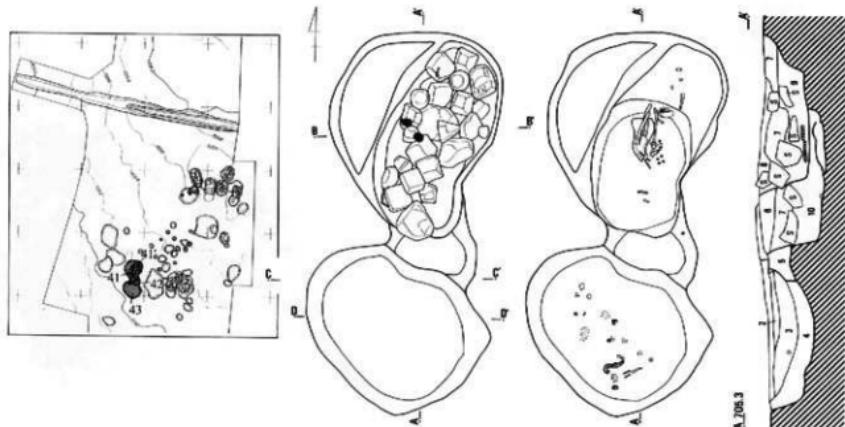
第16図 第31号土坑出土遺物



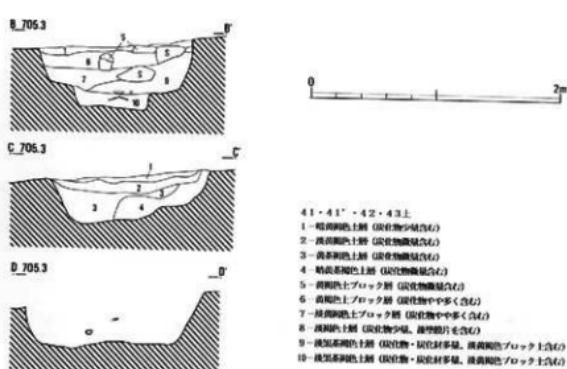
第17図 第39・40号土坑出土遺物



第18図 第40号土坑出土遺物



遺物出土状況



第19図 第41・41'・42・43号土坑

cmを測るが、南側のピットは長径70×短径は推定で約50cmである。本土坑は他のものに比べて、全体的にやや小型である。

(人骨の有無・出土状態)なし。

(出土遺物)坑底の中央付近から六道錢と考えられるものが6枚(第18図4～9)が出土している。錢の内訳は、開元通寶(第18図4・7)(初鑄年代 621年)2枚、皇宋通寶(第18図9)(初鑄年代 1039年)、至和元寶(第18図6)(初鑄年代 1054年)、元符通寶(第18図5)(初鑄年代 1098年)、洪武通寶(第18図8)(初鑄年代 1368年)が各1枚出土している。覆土からは五輪塔第18図1～3が3点出土しており、その内訳は火輪2点、水輪の破片が1点である。

第41号土坑(第19～21図)

(位置)C-14グリッドで、第41号土坑を切る。

(遺構の種類)土坑墓(配石を伴う)。

(形態・規模)隅丸長方形を呈しており、覆土の中程の地点に五輪塔を中心として、20～40cm大の礫と共に配置されているが、その大部分は本土坑より新しい第41号土坑に伴うものと考えられる。規模は、長径(120)×短径78×深さ52cmを測る。

(人骨の有無・出土状態)頭蓋骨が追葬された第41号土坑の大腿骨の下から、また下肢骨の一部が出土した。出土状況としては、膝を折りたたみ、北側に頭を、顔を西に向けて埋葬した北頭側臥の屈葬をとっているようである。

(出土遺物)覆土の配石からは五輪塔(第21図1～7)が7点出土している。その内訳は、空風輪2点、火輪1点、水輪1点(判読不明の墨書が見られる)、地輪3点(判読不明の墨書が見られる2点)である。

第41'号土坑(第19～22図)

(位置)C-14グリッドで、第41号土坑に切られ、第42号土坑を切る。

(遺構の種類)土坑墓(配石を伴う)。

(形態・規模)隅丸長方形を呈しており、覆土の中程の地点に多数の五輪塔を中心として、20～30cm大の礫と共に配置されている。規模は、長径(120)×短径90×深さ38cmを測る。西側部分にはテラス状の張り出し部分が約40cm広がっている。

(人骨の有無・出土状態)顎の一部と歯、大腿骨以下の下肢骨が出土した。出土状況としては、膝を折りたたみ、北側に頭を、顔を西に向けて埋葬した北頭側臥の屈葬をとっている。

(出土遺物)遺物は骨盤付近から、六道錢と考えられる無文錢が5枚(第21図9～13)出土したが、この内の何枚かには棺もしくは錢を納めたものと考えられる木質部分が付着していた。また配石上部からは、漆椀と考えられる塗膜片(写真)が発見された。覆土の配石からは五輪塔が11点(第21図14～17・22図18～23)出土している。その内訳は、空風輪1点、火輪3点、水輪2点(判読不明の墨書が見られるもの1点)、地輪5点(判読不明の墨書が見られるもの4点)であり、判読不明の墨書の大多数のものは、梵字と考えられる。

第42号土坑(第19・20・22図)

(位置)C-14グリッドで、北側を第41号土坑、南側を第43号土坑に切られている。

(遺構の種類)墓の可能性が強い。

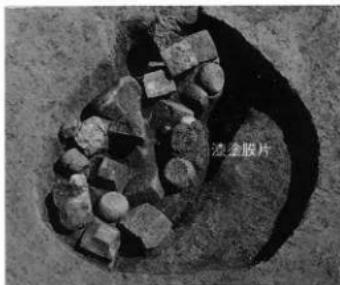
(形態・規模)楕円形を呈しているものと考えられ、立ち上がりがやや急である。規模は、長径70×短径60×深さ23cmを測る。

(人骨の有無・出土状態)人骨は無し。

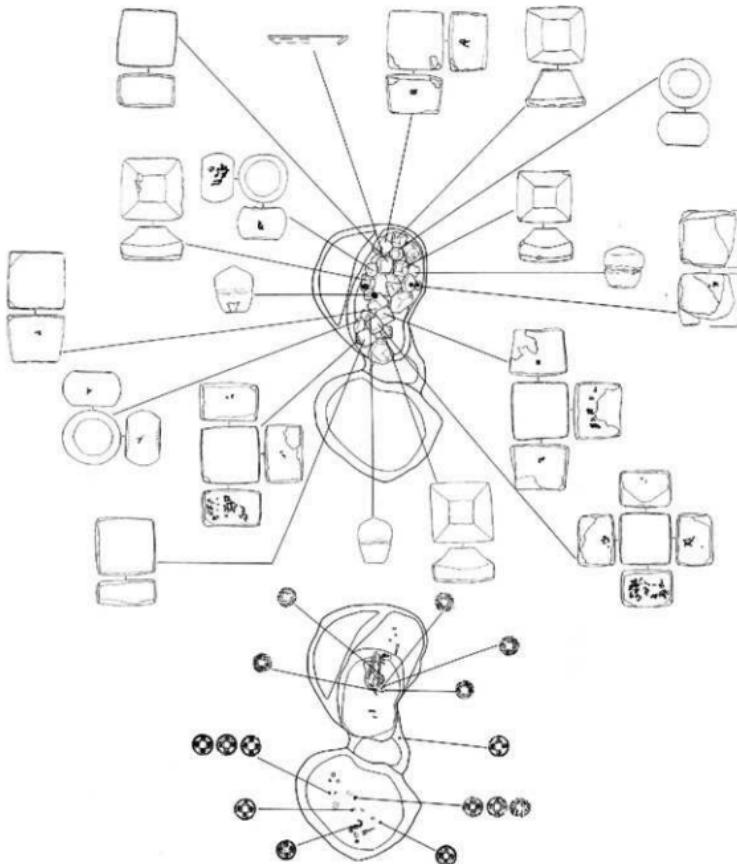
(出土遺物)本坑の大部分が別の土坑に破壊されていることもあり、遺物はほとんど認められなかつたが、覆土



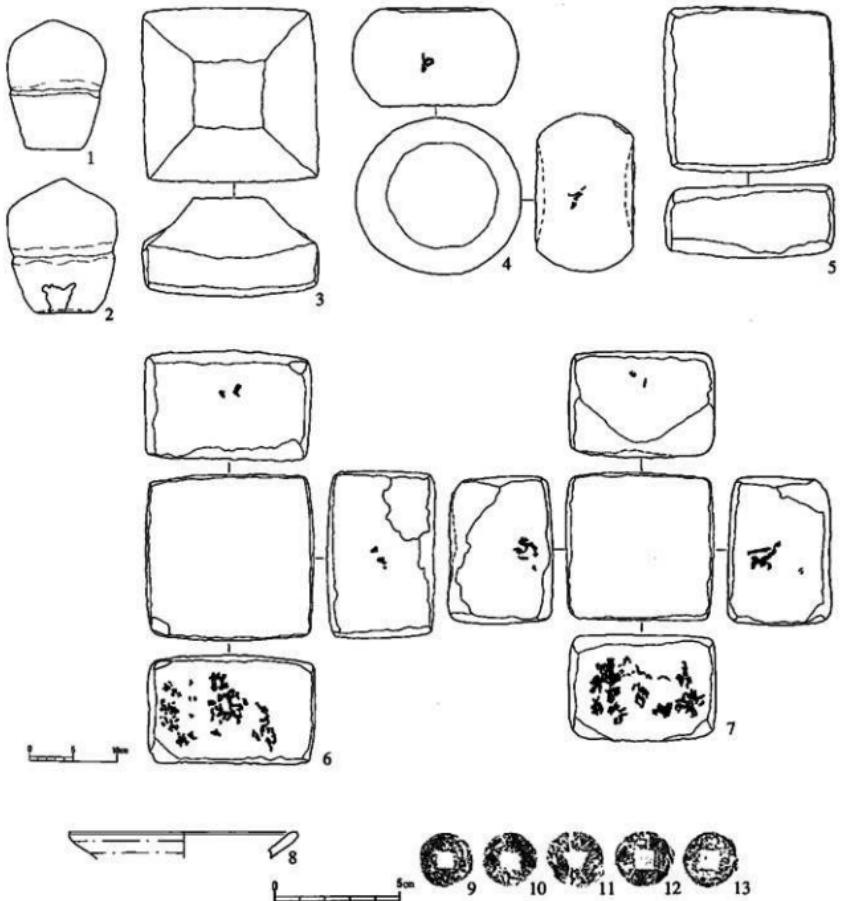
第41·41'号土坑人骨出土状况



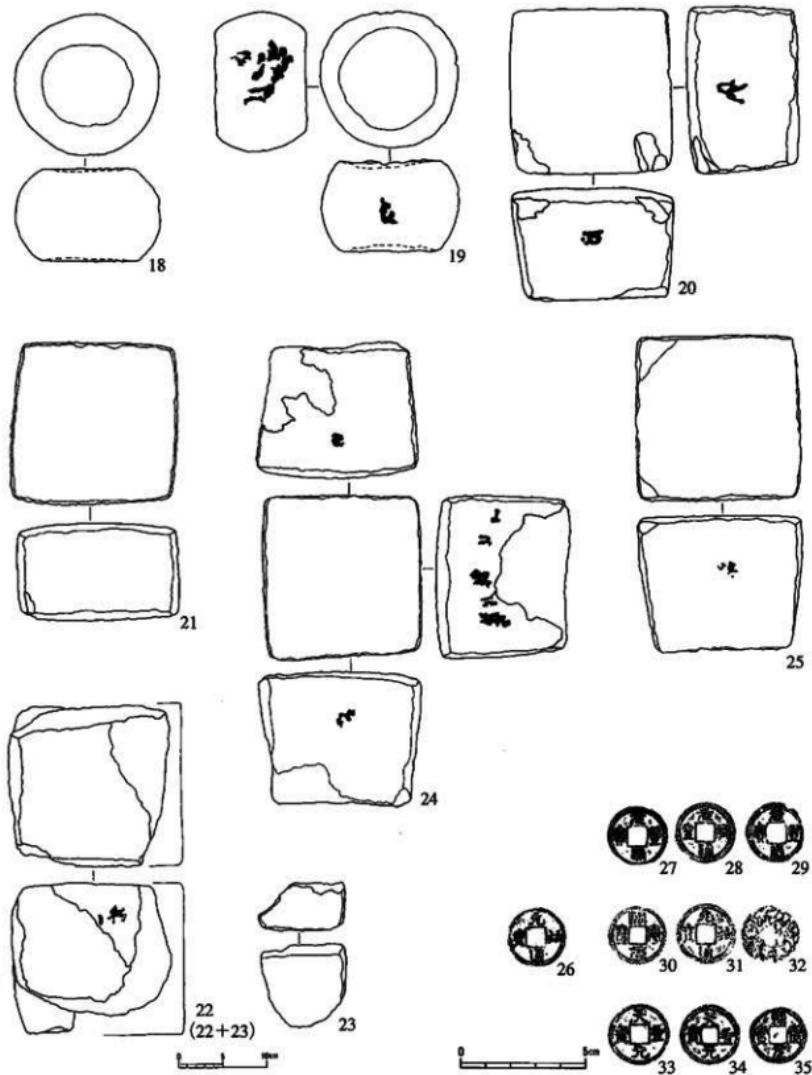
第41·41'号土坑遗物出土状况



第20図 第41·41'·42·43号土坑遗物出土状况



第21図 第41・41'号土坑遺物 (1) (1~7 41土、8~17 41'土)



第22図 第41'・42・43号土坑出土遺物 (2) (18~25 41'土、26 42土、27~35 43土)

の中層付近から六道銭の一部と考えられるものが1枚（第22図26）出土しており、錢種は元祐通寶〔初鑄年代1086年〕である。

第43号土坑（第19・20・22図）

（位置）C-14グリッドで、第42号土坑を切る。

（造構の種類）土坑墓

（形態・規模）不整橢円形を呈しており、立ち上がりが緩い。規模は、長径149×短径102×深さ55cmを測る。

（人骨の有無・出土状態）人骨は齒と脚部が若干残っていただけで遺存状態は悪い。出土状況としては、膝を折りたたみ正座のような状況で、北西側に頭を、顎を南西に向けて埋葬した北頭側臥の屈葬をとっている。

（出土遺物）合掌した手の付近と胴体付近付近から六道銭と考えられるものが6枚、胴体と骨盤と大腿骨付近から各1枚の合計9枚の銭（第22図27～35）が出土している。人骨の胴体部分から出土した3枚には紙が付着しており、おそらく副葬する際に錢を包んだものと想定される。その内訳は、前者の6枚の方では熙寧元寶1点（第22図30）〔初鑄年代 1068年〕、元豐通寶（第22図27・29）〔初鑄年代1078年〕2枚、元祐通寶（第22図28・31）〔初鑄年代 1086年〕2枚、無文銭（第22図32）1枚で、後者の3枚は天聖元寶（第22図33・34）〔初鑄年代 1023年〕が2枚と、紹興元寶（第22図35）〔初鑄年代 1131年〕が1枚である。

第44号土坑（第23図）

（位置）C-14グリッド。

（造構の種類）火葬跡。

（形態・規模）不整橢円形を呈している。土層確認面からは、炭化材、焼土が多量に分布しており、この中に少量の骨片、骨粉が散在していた。規模は、長径212×短径152×深さ22cmを測り、北側に径が長径40×短径35cmの小ピットが存在する。

（人骨の有無・出土状態）人骨は前述のように、焼けた骨片、骨粉が少量散在する程度である。

（出土遺物）六道銭の一部と考えられるものが炭化物およびタール化したものが付着して4枚（第23図1～5）出土している。その内訳は、至和通寶（第23図2）〔初鑄年代 1054年〕、元豐通寶（第23図1）〔初鑄年代1078年〕、元祐通寶（第23図3）〔初鑄年代 1086年〕、紹聖元寶（第23図4）〔初鑄年代 1094年〕が各1枚である。

第45号土坑（第24・25図）

（位置）D-14グリッドで、第46・46'号土坑を切る。

（造構の種類）不明。

（形態・規模）不整橢円形を呈している。土層断面を見ると北側に隣接する第46号土坑を切っている。規模は、長径103×短径（70）×深さ18cmを測るが、浅く小規模なためその性格は断言できないが、小規模な墓と考えられる第46'号土坑との関連性も示唆される。

（人骨の有無・出土状態）なし。

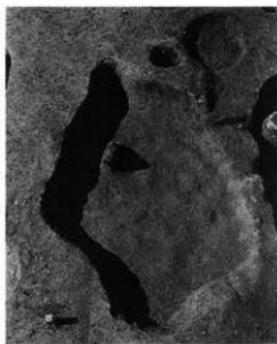
（出土遺物）なし。

第46号土坑（第24・25・27図）

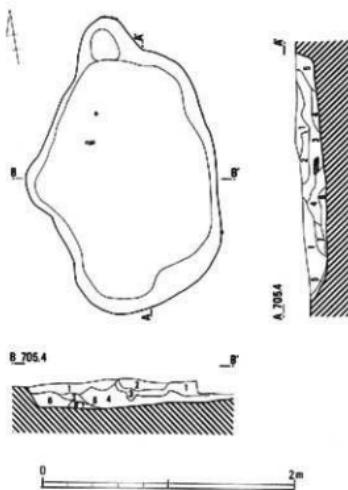
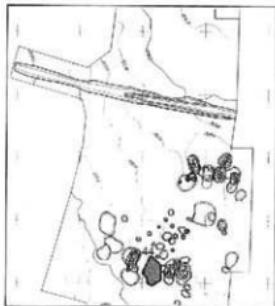
（位置）D-14グリッドで、第45・46'号土坑を切られる。

（造構の種類）土坑墓（配石を伴う）

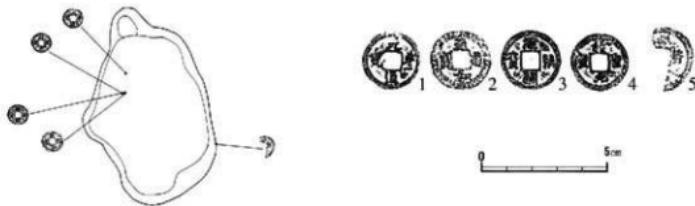
（形態・規模）橢円形のプランで、掘り込みが他のものに比べて深い。覆土の上層に配される石が、本土坑では坑底部に近い位置に存在する。土層断面を見ると平坦な層が広がることから、遺体を棺などに容れず、直葬し



遺物出土状況



- 44号
 1-8. 墓室地盤上層(地上地盤、既往物・炭化材多量含む)
 2. 墓室地盤(地上地盤内)
 3. 成熟地盤上層(地盤・炭化物・既往材多量含む)
 4. 純粹地盤ロームフロア層
 5. 純粹地盤(既往物少含む)
 6. 純粹地盤ロームフロア層(既往物多量含む)
 7. 純粹地盤ロームフロア層(既往物多量含む)
 8. 純粹地盤(既往物微量に含む)



第23図 第44号土坑及び出土遺物

た可能性を示している。覆土下層付近には20~30cm大の多数の礫で厳重に蓋をするように配されていた。全体の規模は、長径205×短径188cmで、主体部となる隅丸長方形のピットは長径95×短径85cm×深さ108cmを測り、平面的な規模は中型であるが、掘り込みは他のものより深めである。

(骨の有無・出土状態) 人骨は残りが悪く、頭蓋骨の一部と大腿骨しか残っていなかった。出土状況としては、膝を折りたたみ、北側に頭を、顔を西に向けて埋葬した北頭側臥の屈葬をとっているものと想定される。

(出土遺物) 六道銭と考えられるものが、人骨の胸部付近から6枚（第27図8～13）まとまって出土している。内訳は、皇宋通寶（第27図10・11）〔初鑄年代 1039年〕が2枚、天聖元寶（第27図12）〔初鑄年代 1023年〕元豐通寶（第27図9）〔初鑄年代 1078年〕、熙寧元寶（第27図13）〔初鑄年代 1068年〕、洪武通寶（第27図8）〔初鑄年代 1368年〕が各1枚である。覆土の配石からは下層付近から五輪塔（第27図18）が1点出土おり、これはやや大型の火輪が1点である。

45土

1. 黒系褐色土層(無土・炭化物少含)
2. 黒系褐色土層(炭化物少含)
3. 黒系褐色土層(炭化物・5mm大のロームブロック少含)
4. 黒系褐色土層(炭化物少含・5mm大のロームブロック多量含)

46・46'上

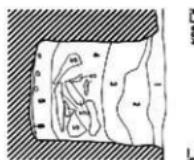
1. 黒褐色土層(炭化材・炭化物少含・3~4cm大のロームブロック多量含)
2. 黑系褐色土層(炭化物少含)
3. 黑系褐色土層(炭化物少含・2~3cm大のロームブロック多量含)
4. 黑系褐色土層(炭化材・炭化物少含や多く含む)
5. 黑系褐色土層(炭化材・炭化物少含)
6. 黑系褐色土層(遺物?)
7. 黑系褐色土層(炭化物少含)



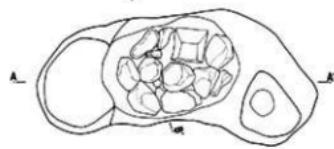
五輪塔出土状況



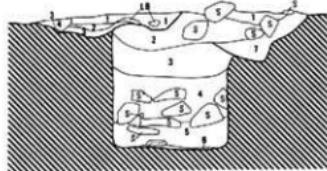
人骨出土状況



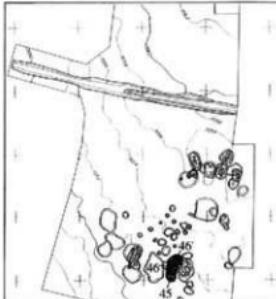
1m



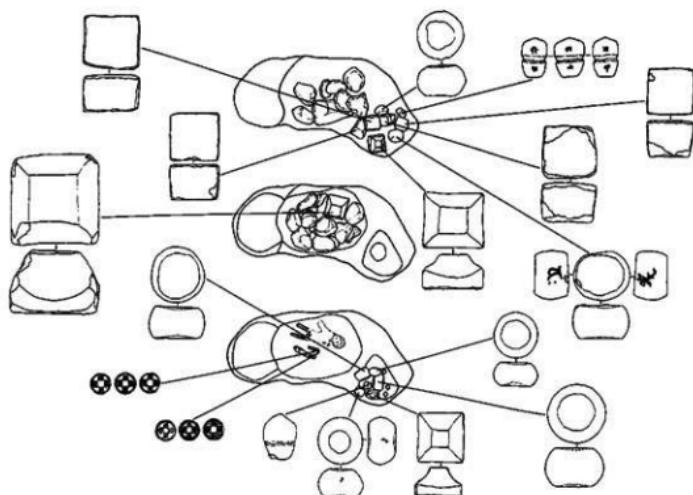
A 7054



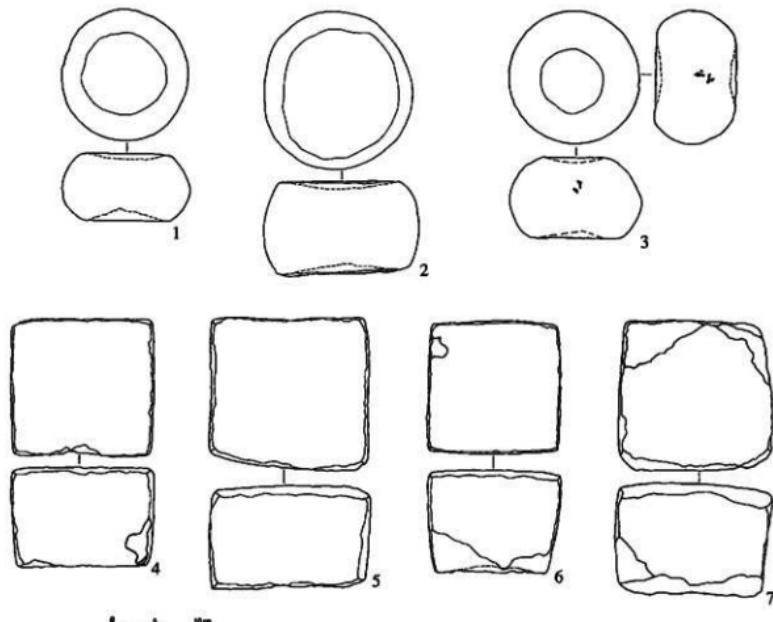
1m



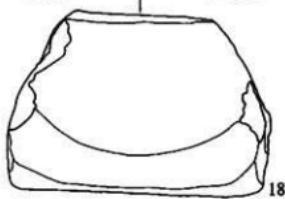
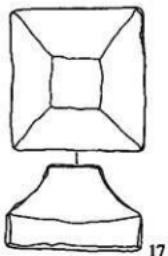
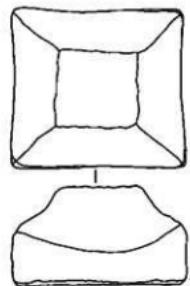
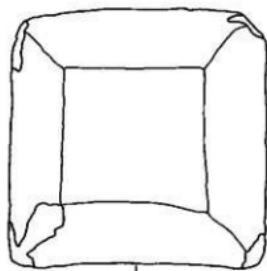
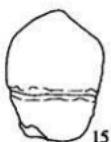
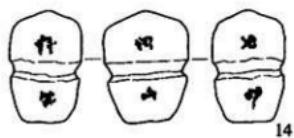
第24図 第45・46・46'号土坑



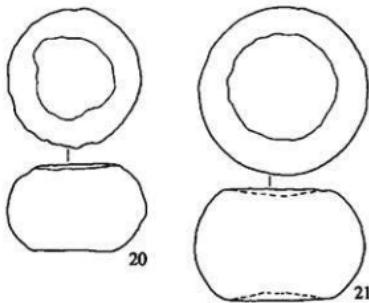
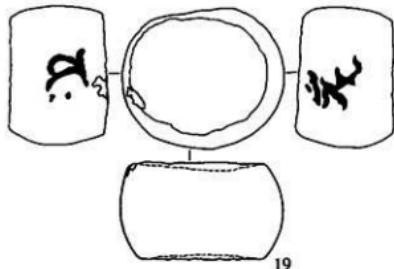
第25図 第45・46・46'号土坑遺物出土状況



第26図 第46'号土坑出土遺物



18



第27図 第46・46'号土坑出土遺物 (8~13、18 46土、14~17、19~21 46'土)

第46号土坑（第24～27図）

（位置） D・14グリッドで、第45号土坑に切られ、第46号土坑を切っている。

（遺構の種類） 土坑墓（配石を伴う）。

（形態・規模） 不整がかった楕円形を呈し、土層断面を見ると掠鉢形の緩やかな立ち上がりを示している。坑の中央付近でやや急激に落ち込んでいる。覆土の上層付近には20～30cm大の礫3点と小型の五輪塔による配石が認められる。上層の配石下には方形状に配された10～20cm大の礫があり、周囲から人骨片が出土している。本体の規模は、長径85×短径70×深さ40cmを測るが、規模が小さいことから子供の墓と考えられる。

（人骨の有無・出土状態） 人骨は残りが悪く骨片と歯が残されていたのみである。埋葬形態はよくわからない。

（出土遺物） 覆土から五輪塔が14点（第26図1～7、第27図14～17、19～21）出土しており、その内訳は空風輪2点(梵字が判読できるもの1点)、火輪2点、水輪6点(梵字が判読できるものと、判読できないものが各1点)、地輪4点である。

第58号土坑（第28図）

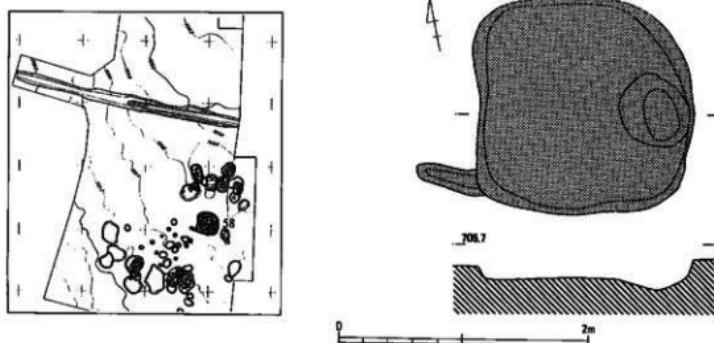
（位置） D・E-14・15グリッド。

（遺構の種類） 火葬跡か。

（形態・規模） 楕丸方形を呈している。確認面には、炭化材と焼土が散在する状況が認められた。坑の北側は擾乱を受けておりプランが曖昧である。また東側には小ピットが存在し、規模は長径60×短径55cmで、深さ15cmを測り、楕円形を呈している。北西端には溝状の落ち込みが幅20×長さ50×深さ約5cmを測り、焼土が集中する。

（人骨の有無・出土状態） なし。

（出土遺物） なし。



第28図 第58号土坑

○墓坑の特徴と出土遺物について

墓域に広がる施設としては、大別すると火葬跡、火葬墓（火葬施設と墓が一体となったもの）、土坑墓の三つがある。

火葬跡と考えられるものは第20・44・58号土坑がこれに該当するが、形態は一定ではなく不整がかったものが主体で、内部の施設としては第20号土坑では礫が坑底部に敷き詰められていたが、第44・58号土坑については特に何も認めることができなかった。

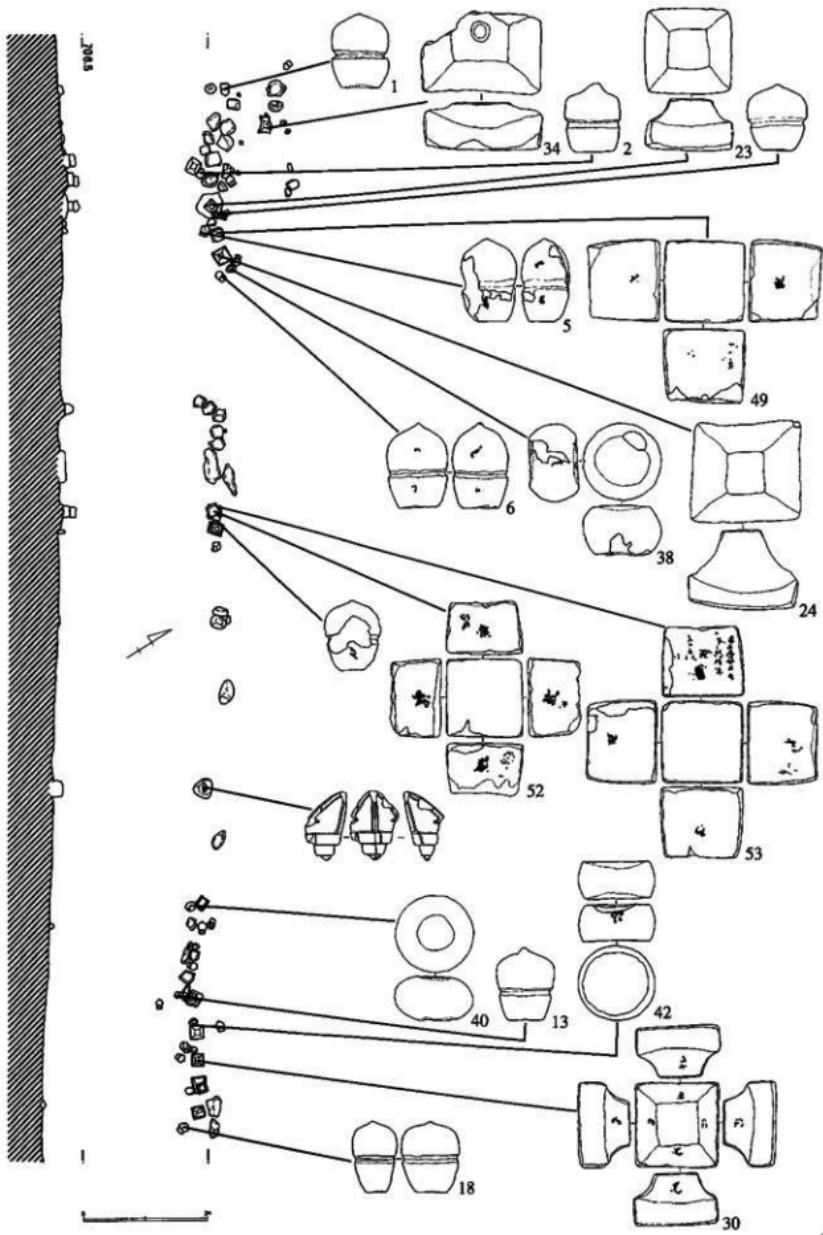
火葬墓では第29号土坑が挙げられるが、形態的には煙道を持つT字形を呈しており、極めて中世の火葬跡的な要素が窺える。内部の施設としては、前述のような土坑から張り出した煙道部分と、本体の土坑部分とに分けられ、その内部には長軸方向の両端に礫が敷かれている。このことから礫が敷かれた一段高い位置に棺を設置して火の回りを良くして火葬したことが分かり、礫等を持たない13・14世紀代の火葬施設とは若干異なった様相を呈している。出土遺物として土師質土器の壺が器と蓋状に組み合わせた状態で2面認められたことから、これを蓋骨器と判断して火葬施設と墓の2つの性格を持った火葬墓として捕らえることができる。

土坑墓としては第25・26・27・28・31・39・40・41・41'・42・43・46・46'号土坑の13基が該当し、このうち第25・26・39・42号土坑からは人骨は認められなかつたが、形態的な特徴から墓と判断した。土坑墓の形態としては、隅丸長方形・すり鉢形・不整楕円形の三形態に大別でき、大多数のものは隅丸長方形を呈しているが、すり鉢形をした第26・46'号土坑があり、どちらも掘り込みが浅いのが特徴であるが、第46'号土坑からは子供の骨が検出されており、骨の出土が認められなかつた第26号土坑についても、その形態から子供の墓の可能性が示唆される。このほか不整楕円形もしくは楕円形を呈したものに第25・42・43号土坑があるが、位置的にC-14グリッド付近に集中することから時期的な共通性が存在するのかもしれない。

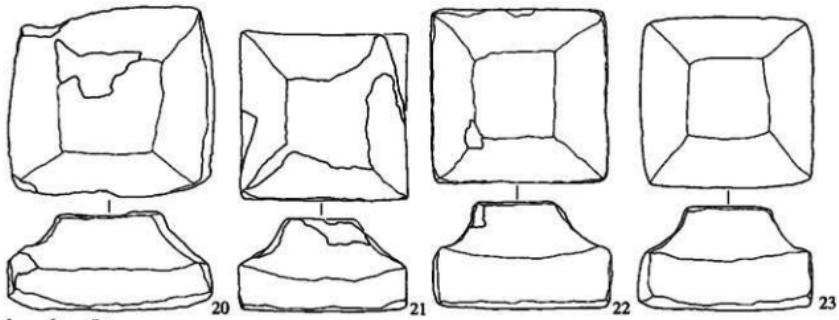
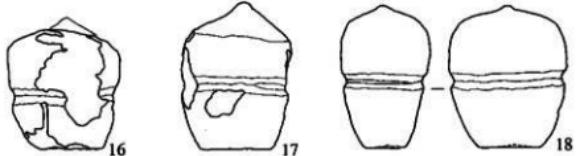
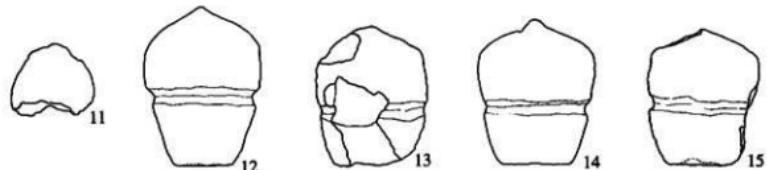
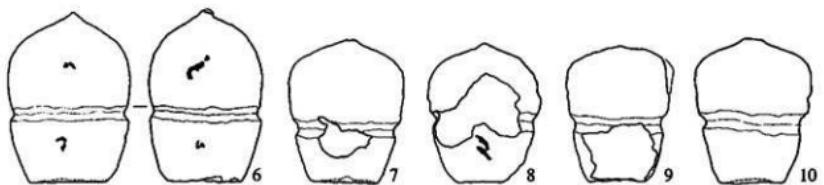
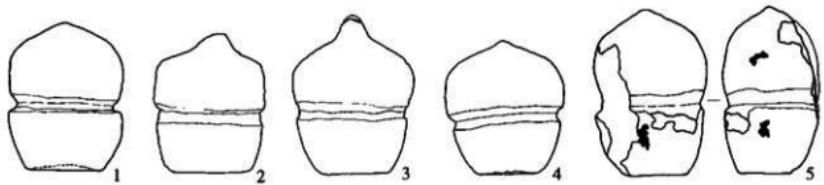
土坑墓全体を概観したときに、構造上の特徴が以下のように認められる。覆土の状況から埋葬方法に若干の違いが認められるもので、遺体の上に多数の礫を主体に配したもの〔A類〕、礫および五輪塔を主体に配したもの〔B類〕、配石が認められるが、墳墓上に五輪塔が配置されていた可能性が予想されるもの〔C類〕、礫が少數配置されたもの〔D類〕、礫類を配さないものの〔E類〕の五種類に分類することができる。A類では第27・39・46号土坑、B類は第28・31・40号土坑、C類は第26・41・41'・46'号土坑、D類は第25号土坑、E類は第42・43号土坑が該当する。新旧関係では、遺構間の切り合い関係などから、B類やC類のように五輪塔を伴う土坑より、A類といった礫を主体に配石された物の方が古い段階に位置づけられるようである。

副葬品については、火葬跡・火葬墓では、第29号土坑で土師質土器と溶解した銅製品、第20・44号土坑では銭が出土している。土坑墓では、第27・28・31・39・40・41'・42・43・46号土坑から六道錢と考えられるものが出土しており、そのほとんどは唐代から明代にかけての中国銭であるが、特筆すべきものに第28号土坑から「光順通寶」といったベトナム銭が含まれていたほか、第41号土坑からは無文銭が5枚、第43号土坑から無文銭が1枚が波来銭に混じて出土している。全体的には中世後半に多量に輸入された「洪武通寶」や「永楽通寶」を含むものの第20・27・28・40・46号土坑と、これらを含まない第29・31・39・41・42・43・44号土坑に分類することができ、これらの造営時期に若干の時間差が存在することを意味しているのかも知れない。また、これら六道錢を包んでいたものとして第39号土坑では、タール化した漆紙状のものが、第43号土坑では紙と燃糸が存在している。銭以外では、第41号土坑の覆土上層の五輪塔の間から漆椀の塗膜片が出土している。以上のような状況であり、生活道具類をほとんど含まない点など中世後半の15世紀以降17世紀以前の特徴が良く窺える。

覆土から出土した五輪塔で特筆すべきものとしては、第10図11の第26号土坑出土の地輪部分に紀年銘である「享禄」と考えられる文字が墨書きされたものがあったほか、第16図9の第31号土坑出土の地輪部分には、4面に梵字が施されていたのと同時に、南方修業門部分に「奉」の字が読み取れるものがあった。特に紀年銘の存在は、墓の造る時期の実年代を把握するのに重要な資料となるものである。

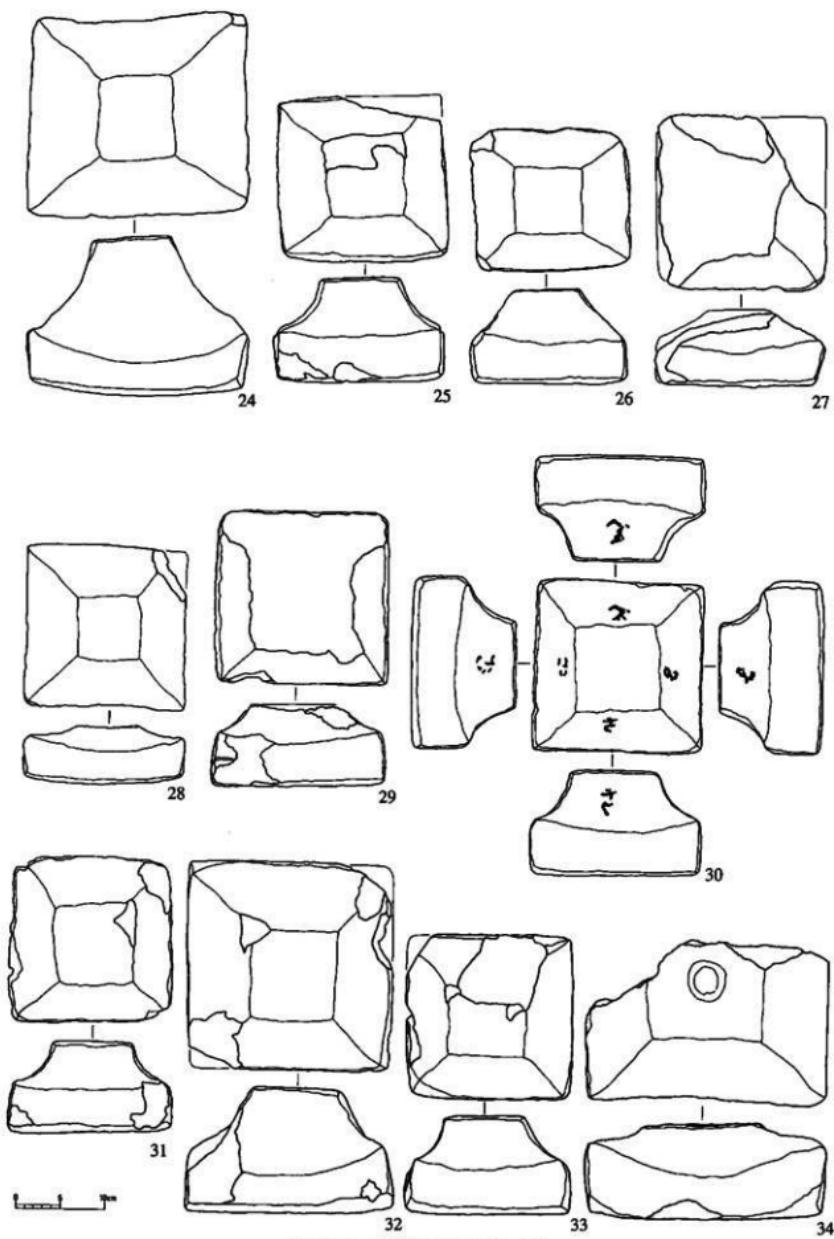


第29図 五輪塔集中区遺物分布

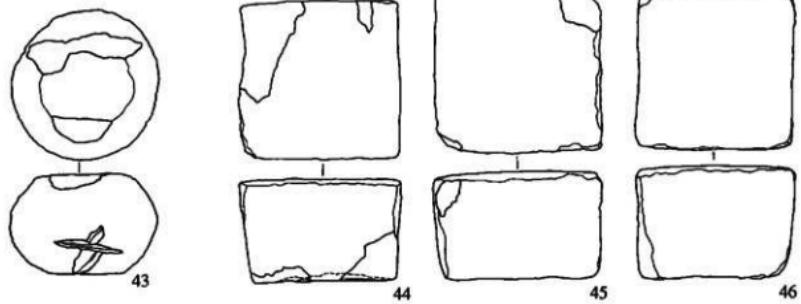
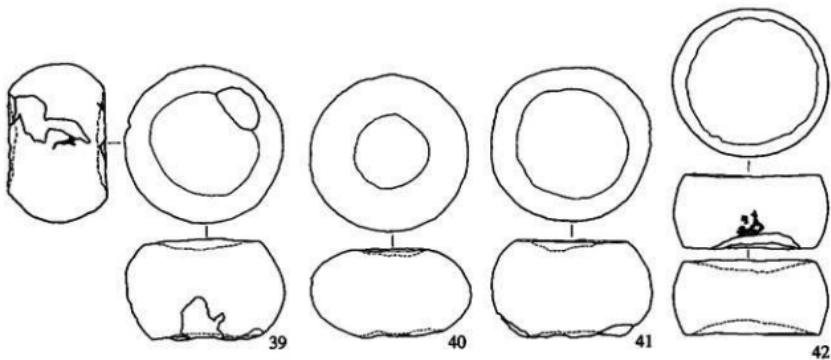
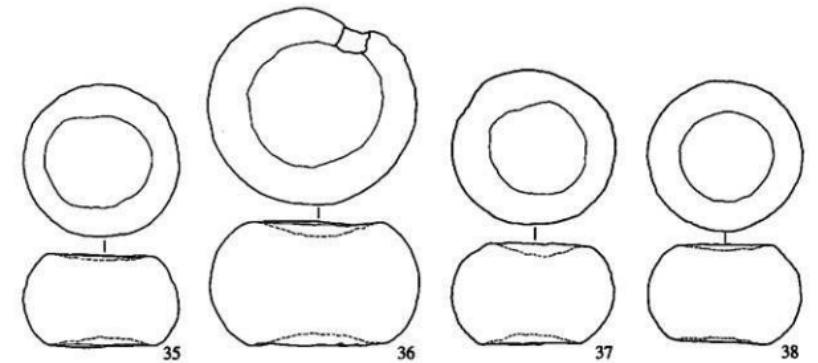


— 1 cm —

第30図 五輪塔集中区遺物 (1)

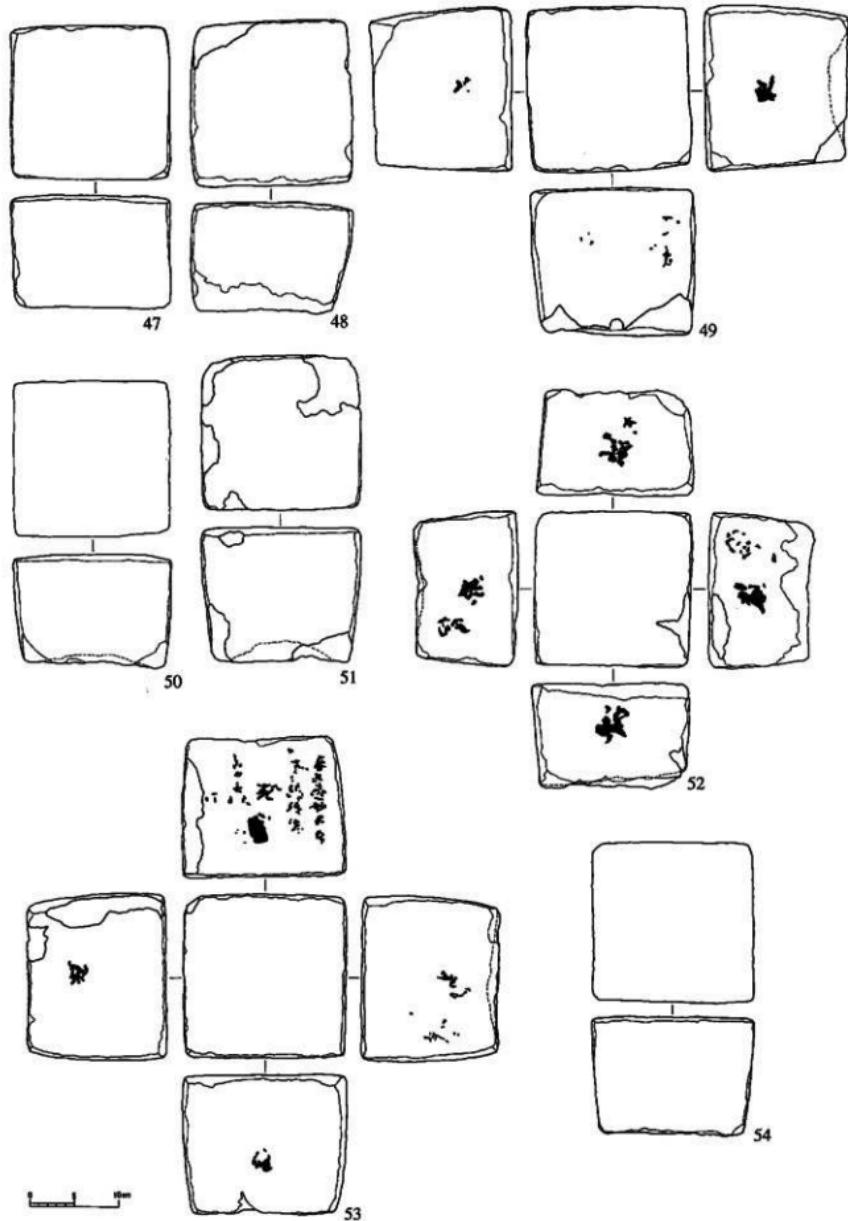


第31図 五輪塔集中区遺物 (2)

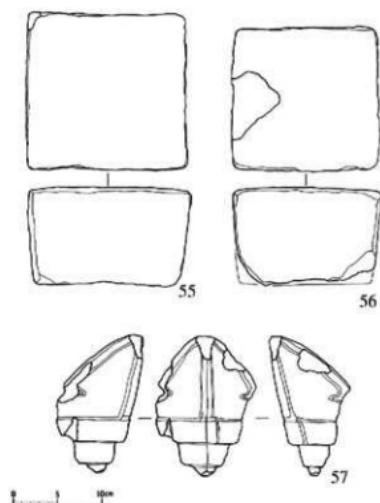


1 1 10mm

第32図 五輪塔集中区遺物 (3)



第33図 五輪塔集中区遺物 (4)



第34図 五輪塔集中区遺物（5）

第5節 五輪塔集中区

ここでは、地表面上の地境部分に存在した五輪塔について述べるものであるが、第1号溝の北側約1m付近には沿ってほぼ並んでいることが明らかとなった。その分布は、E-16・17グリッド付近から南東方向に向かって存在していた。その分布状況を示した第一図を見ると五輪塔の組合せや配列の仕方に規則性を認めることができず、また摩滅しているものが多い点などから、耕作途上などで地中から掘り起こされたりして、出土したものを地境に並べて整理をしたものと考えられる。この集中区の南側には、墓坑群が存在することからこれらに付随するものと想定され、五輪塔の分布からはこの墓坑群がさらに東側に広がる可能性を示唆させるものである。

確認した五輪塔などの石造物（第30～34図、第3表）は総点数57点である。この内訳は空風輪が19点で、このうち判読不明の墨書が認められるものが3点、欠損しているものが4点である。火輪は15点で、このうち判読不明の墨書が認められるものが1点で、欠損しているものが6点である。水輪は9点で、このうち判読不明の墨書が認められるものが2点である。地輪は13点で、このうち判読不明の墨書が認められるものが2点で、判読可能な墨書が見られるものが1点、欠損しているものが1点である。全体として、地表面にでていたこともあり欠損品の割合が11点（21%）と多いことに気づかれるが、風雨に曝されているにもかかわらず9点（17%）もの墨書が認められる資料が存在することに驚かされた。このうち地輪（第33図53）では、4面に墨書が存在し南方修業門のアーチの梵字が中央に書かれている部分には、判読可能な文字ではその右側に「妙」が、左側には紀年銘である「永正」が認められるが、銘の下の数字が「三」のようにも見えるが、その下に書かれている干支ははっきりとしていないが、「戌」と思われるものが認められることから永正11（1514）年の可能性が示唆される。永正年間は1504～1520年の間であり、16世紀前半代の所産と考えられるものである。

このほか、第34図57に示したような宝篋印塔の笠の端部の残欠も1点であるが、五輪塔以外のものも出土例として興味深い資料である。



五輪塔集中区遺物検出状況

第6節 溝

溝と呼べるもののはA～D-17、C～E-16グリッドに位置している第1号溝のみであり、そのほかのものは次節で触れる畝状の遺構である。本遺構については第4節でその性格について触れたが、C・D・E-14・15、D・E-16グリッドに分布する墓坑群に付随する墓域の区画溝の可能性が強い。その根拠としては、まず覆土の状況が墓と類似する点が挙げられる。また墓坑群から出土した五輪塔と同様に梵字や戒名、紀年銘などと考えられるものが墨書きで残されたものが多く認められるといった点などから、墓坑が営まれた時期ないし、墓域が消滅した段階に極めて近い年代に造られた可能性が高いことを示しているものと考えられるからである。

規模は、幅が約60～100cm、掘り込まれた深さは約70cmを測る。部分的に、耕作に関連した擾乱東側の溝底部では、一段下がった落ち込みが存在し、約50cm程度の間隔で鉛と考えられる掘削痕が認められる。断面部分を見ると、掘削方向は東側の地形的に高い位置から低い西側に向かって掘り下げていることがわかる。

出土した遺物は、16世紀代と考えられる土師質土器（第44図12）のほか、五輪塔（第37～41図、第3表）が65点である。この内訳は空風輪が26点で、このうち墨書きが認められるものが4点、欠損しているものが6点であり、風輪下にホゾのあるもの（第37図26）が1点である。火輪は12点で、このうち墨書きが認められるものが1点、欠損しているものが5点である。水輪12点で、このうち墨書きが認められるものが5点、欠損しているものが2点である。地輪は15点で、墨書きが認められるものが2点、欠損しているものが2点であるが、第40図52の東方発心門側を示すアの梵字が示された部分には判読することはできないが、戒名や紀年銘などについては不明である。全体としては、欠損品の割合が15点（26%）と集中区より多いことに気づかされるが、この欠損品の多さは溝内に意図的に廃棄されたことを示している可能性が示唆される。また墨書きが存在するものは12点（21%）であり、残り具合は地表面上のものよりも多く確認することができた。

第7節 畝状遺構

調査区の北側平坦面および南側の緩傾斜面に認められた。北側平坦面に位置するものは掘り込みが深く直線的な在り方を示しているのに対し、南側緩傾斜面のものは掘り込みが浅く不整形であり、全く異なった様相を示している。

第1号畝状遺構（第42図）

（位置）B・C-7・8グリッドで、西側部分は調査区外に位置している。

（形態・規模）3本の落ち込みが認められる。規模は南側の落ち込みが幅140～180cm、深さ5～10cmを測り、底部には長径15～50cmの大いなビットが4カ所認められた。東側部分の一部が重機による擾乱が認められる。中間のものは幅95～140cm、深さ3～20cmを測り、南東側部分の一部が重機による擾乱が認められる。北側のものは幅75～115cm、深さ2～10cmを測り、他の2本より短めである。

（時期）掘り込みの状況から近代以降の所産と考えられる。

（出土遺物）なし。

第2号畝状遺構（第43図）

（位置）C-18～24、D-22～24グリッドで、北側部分は調査区外に位置している。

（形態・規模）北側端部では東西に並列した4本の落ち込みが認められ、東側から2本目に付随するものと考えられる落ち込みの続きが南側部分では断続した状態で存在し、部分的に擾乱が認められる。規模は東側の落ち込みから幅40～85cm、深さ25～40cmを測り南側に向かうにつれて浅くなっている。底部には長径15～50cmの大いなビットが4カ所認められた。東側部分の一部が重機等による擾乱が認められる。中間のものは幅95～140cm、深さ3～20cmを測り、南東側部分の一部が重機による擾乱が認められる。北側のものは幅75～115cm、深さ2～10cmを測り、他の2本より短めである。



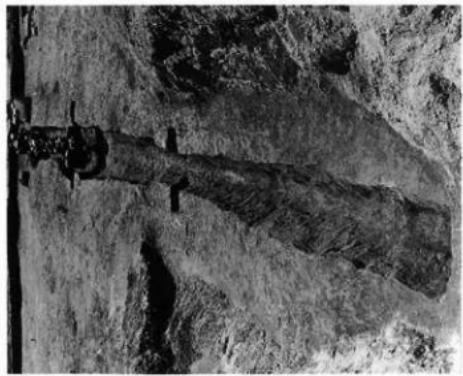
第1号沟 完掘状况



第1号沟 遗物出土状况



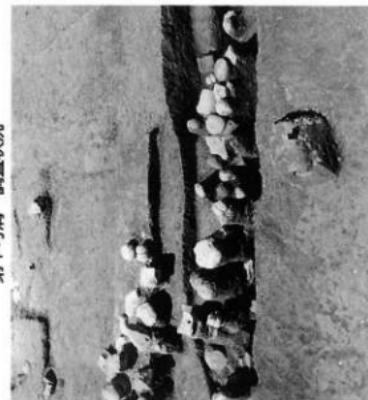
第1号沟 遗物出土状况



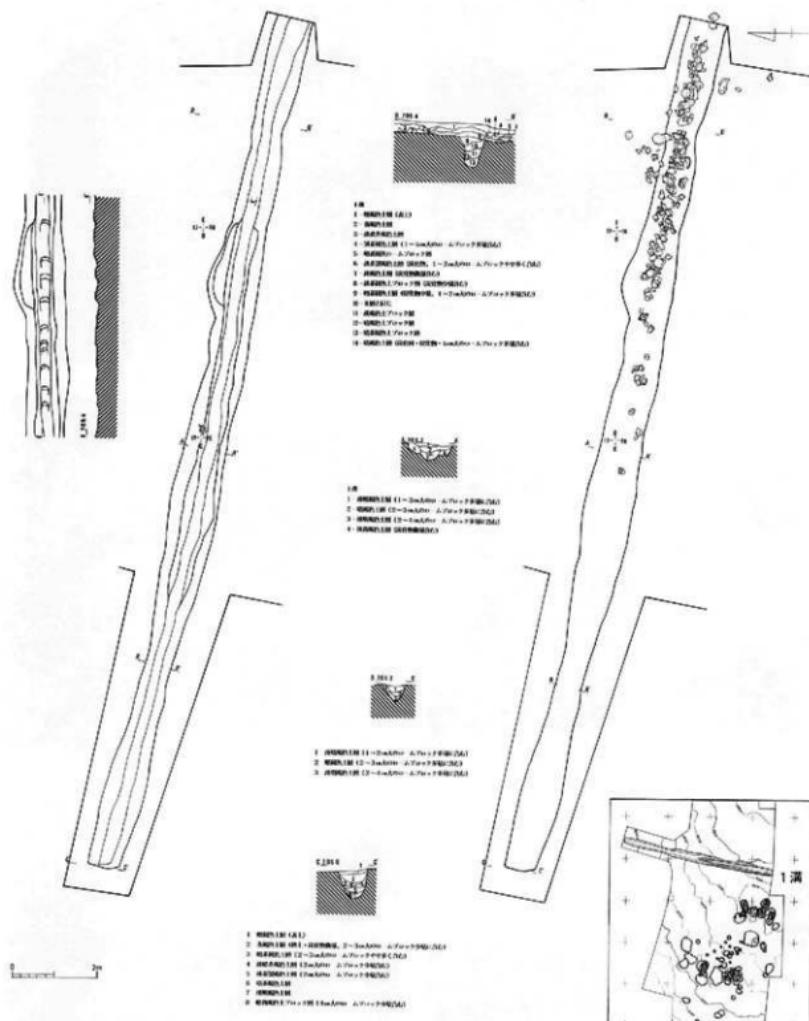
第1号沟 完掘状况



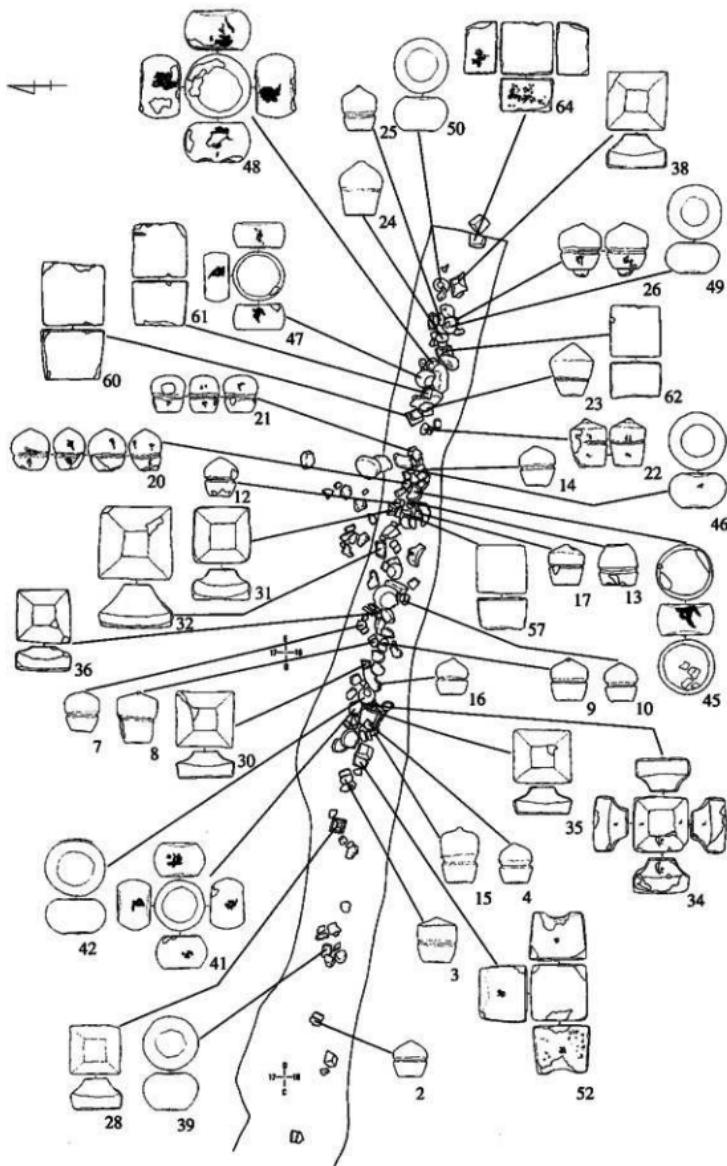
第1号沟 调查状况



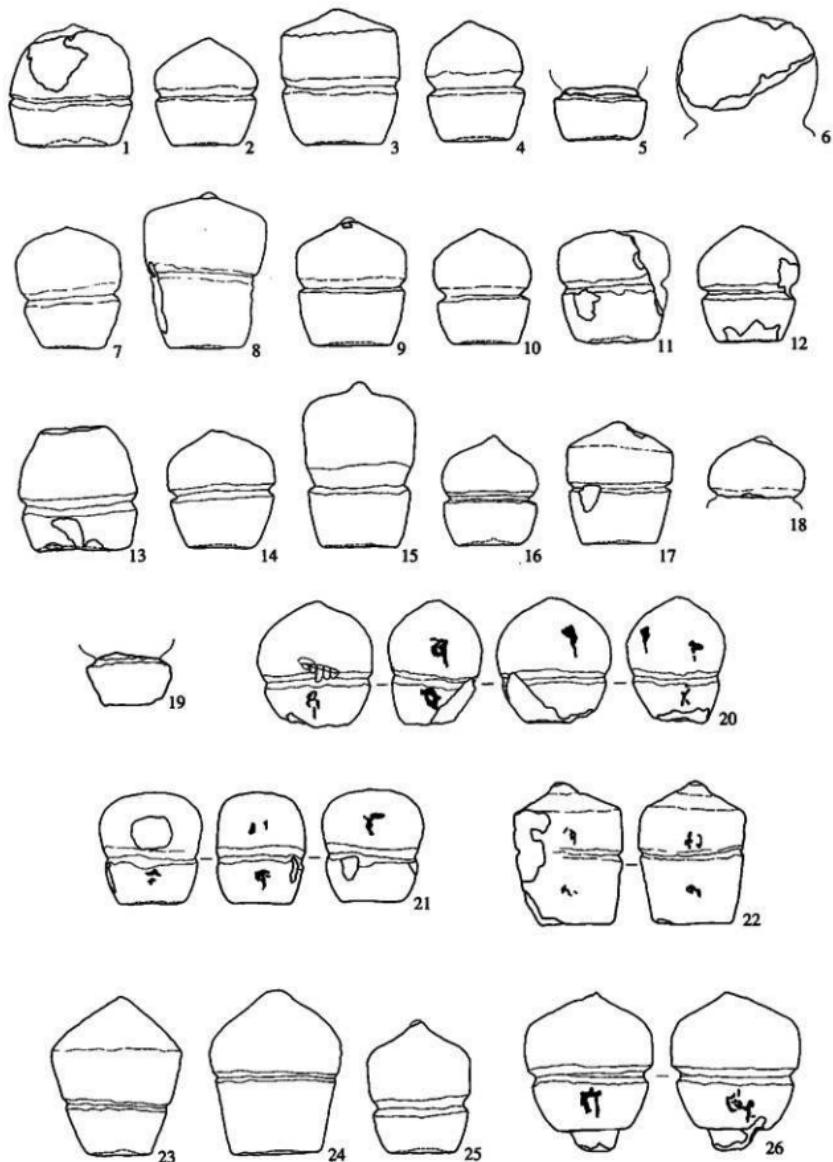
第1号沟 遗物出土状况



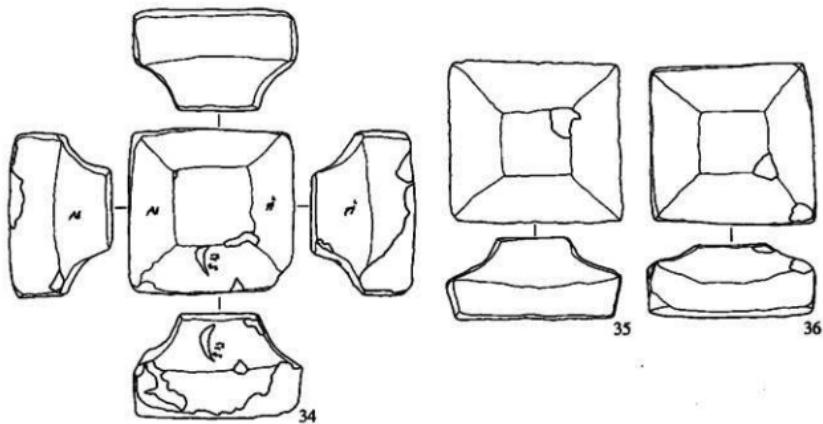
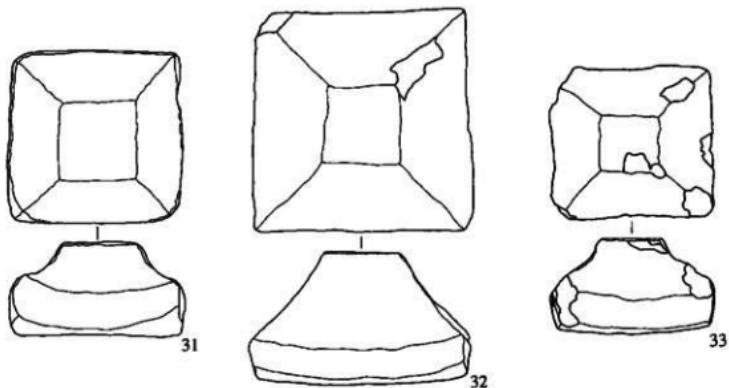
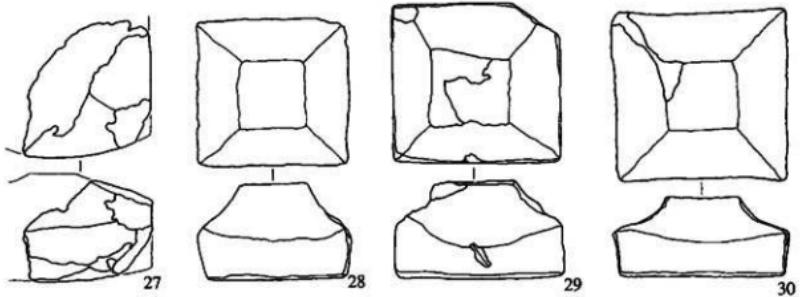
第35図 第1号溝



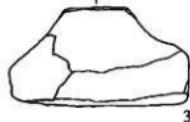
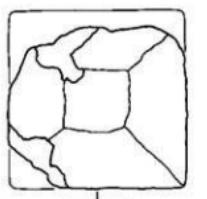
第36図 第1号溝遺物出土分布図



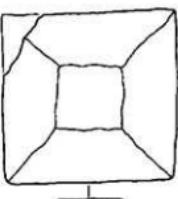
第37図 第1号満出土五輪塔（1）



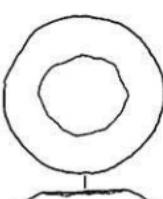
第38図 第1号溝出土五輪塔(2)



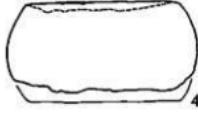
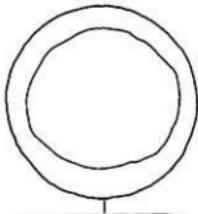
37



38



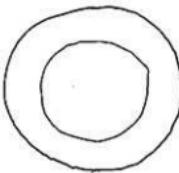
39



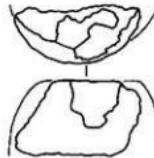
40



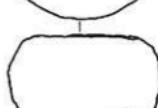
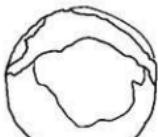
41



42



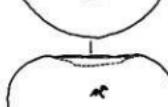
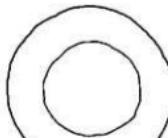
43



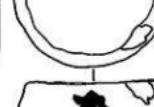
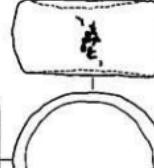
44



45



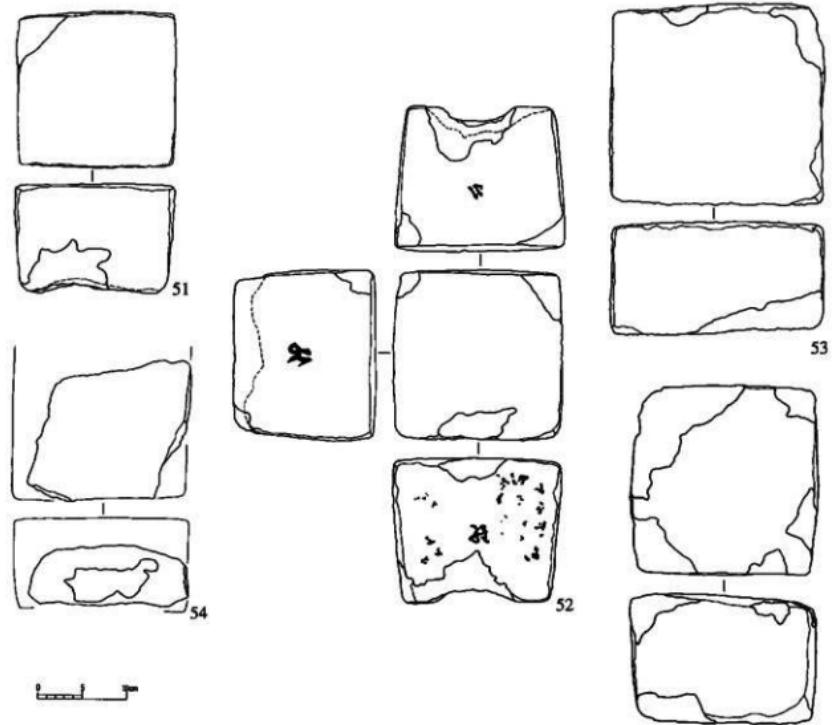
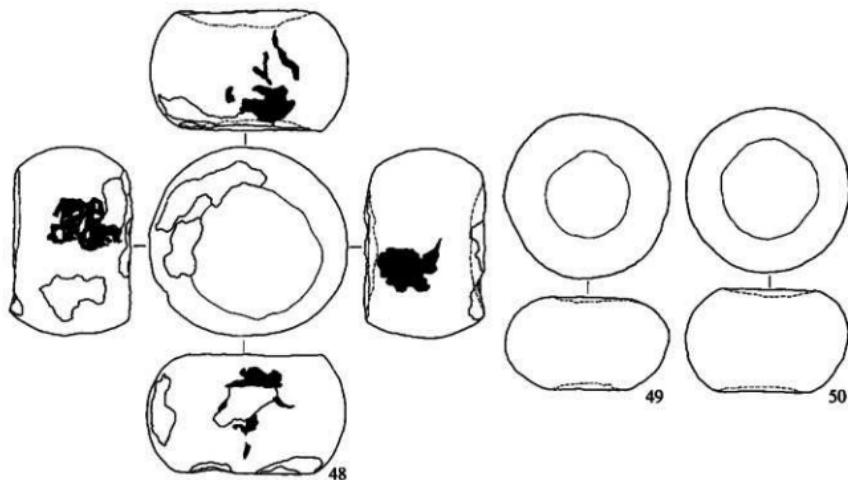
46



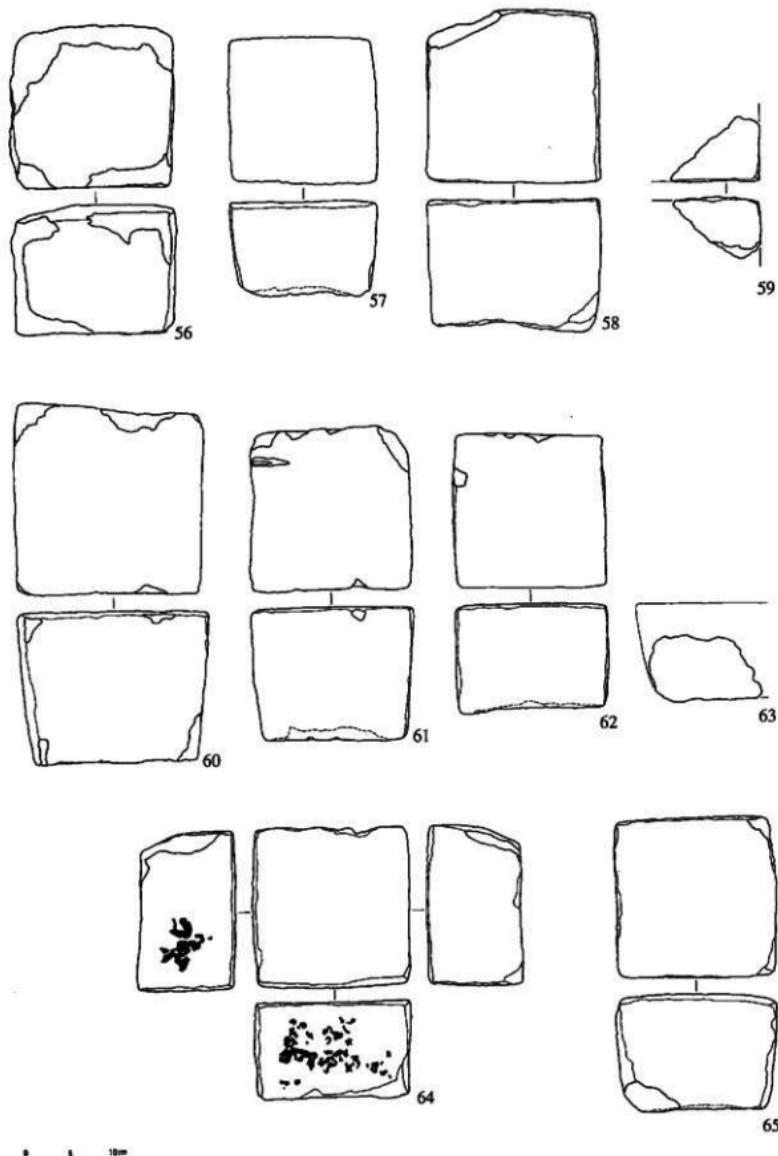
47



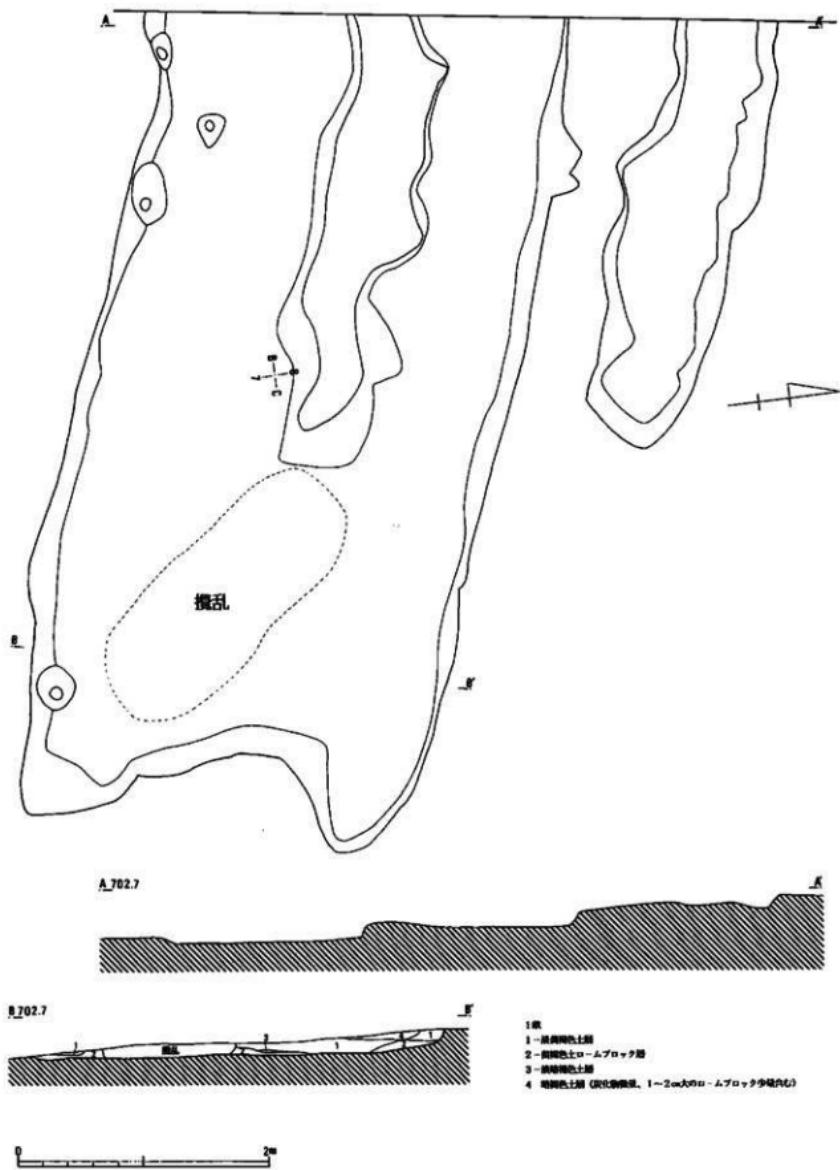
第39図 第1号溝出土五輪塔（3）



第40図 第1号溝出土五輪塔 (4)

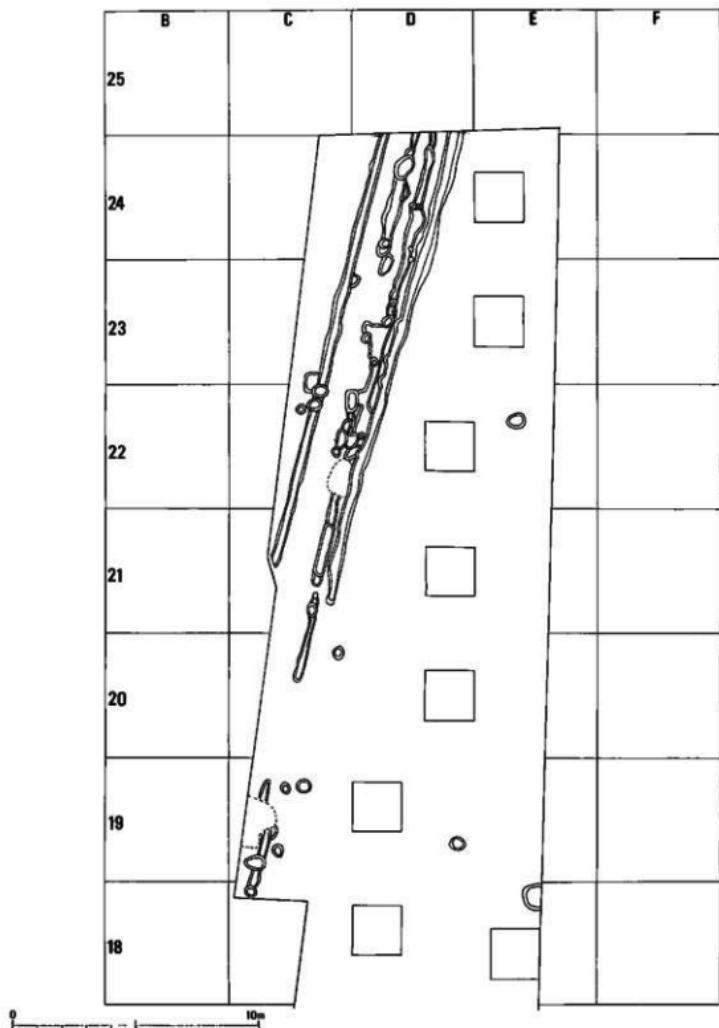


第41図 第1号溝出土五輪塔（5）



第42図 第1号歛状造構

2 番
 1 - 深褐色土層
 2 - 淡褐色土層
 3 - 黄褐色土層
 4 - 褐色土層
 5 - 棕褐色土層
 6 - 深褐色
 7 - 淡褐色
 8 - 黄褐色
 9 - 褐色
 10 - 棕褐色
 11 - 深褐色ロームブロック層



第43図 第2号古状遺構

(時期) 堀り込みの状況から近世以降の所産と考えられる。

(出土遺物) 溝内から内耳土器のほうろく（第44図8）の破片が出土している。

第8節 包含層出土遺物（第44・45図）

(縄文時代の遺物)

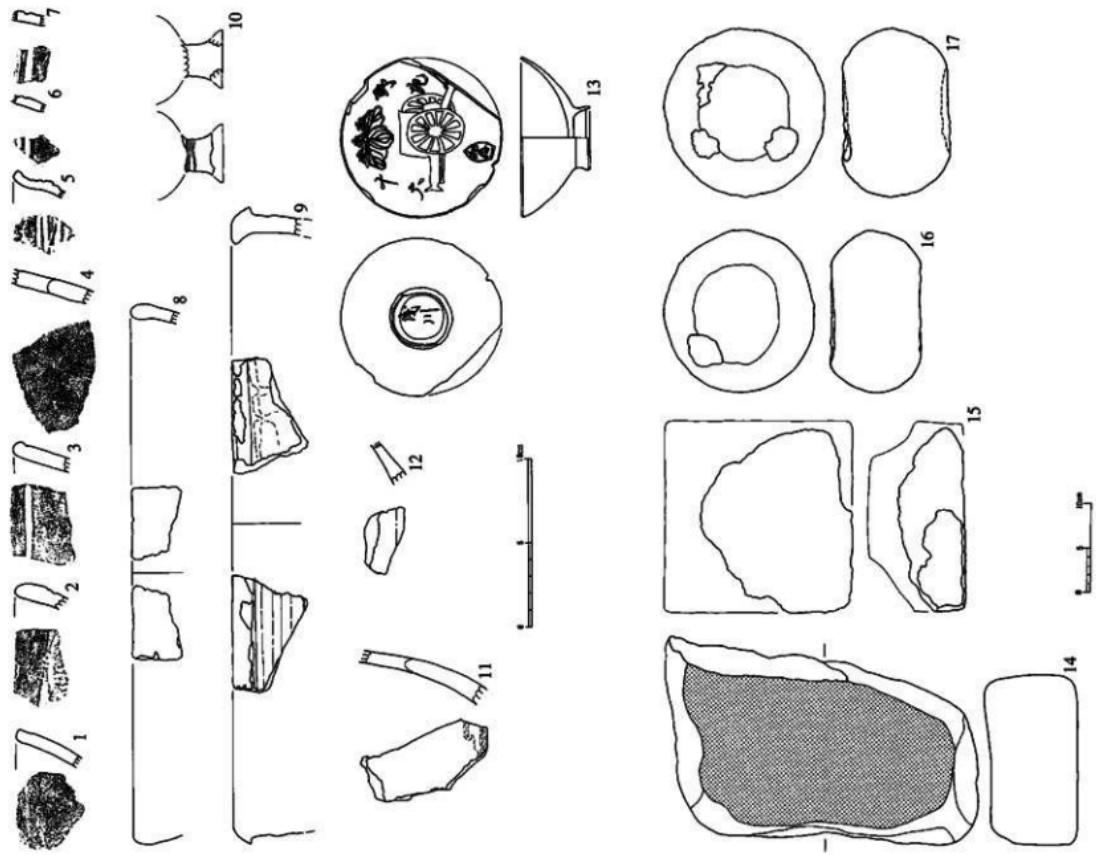
土器では、第44図1・4がB-17グリッド、2がC-23グリッド、3がD-16グリッドの出土もので、これらは中期後半の曾利Ⅲ～Ⅳ式であり、2・3は口唇下に沈線が施されている。5はD-15グリッド出土のもので、器面に浮線網状文が施されており、晚期後半の氷2式に比定される。

石器では、第44図14がD-18グリッドから出土した一面に擦痕が見られる台石で一部欠失しており、石材は安山岩製で最大長35.5cm、最大幅24.0cm、最大厚10.6cmを測る。第45図2はD-16グリッドから出土した分銅形に近い形態を持つ打製石斧であり、基部の上端が欠失しており、石材は頁岩製で最大長9.4cm、最大幅7.0cm、最大厚1.9cmを測る。第45図3はE-16グリッドから出土した短冊形の打製石斧で、基部の上端と刃部が欠失しており、石材は安山岩製で最大長9.4cm、最大幅5.7cm、最大厚2.3cmを測る。第45図4はE-14グリッドから出土した剥片で、石材は頁岩製で最大長6.2cm、最大幅4.2cm、最大厚0.5cmを測る。第45図6はE-16グリッドから出土した砥石で三面に擦り面が認められ、石材は安山岩製で最大長13.7cm、最大幅5.9cm、最大厚4.5cmを測る。第45図7はやや小型の磨石兼敲石で、最大長6.9cm、最大幅6.3cm、最大厚5.7cmを測る。第45図8はE-16グリッドから出土した小剝離のあり剥片で、石材は黒曜石製で最大長4.50cm、最大幅1.45cm、最大厚0.62cmを測る。

(中・近世の遺物)

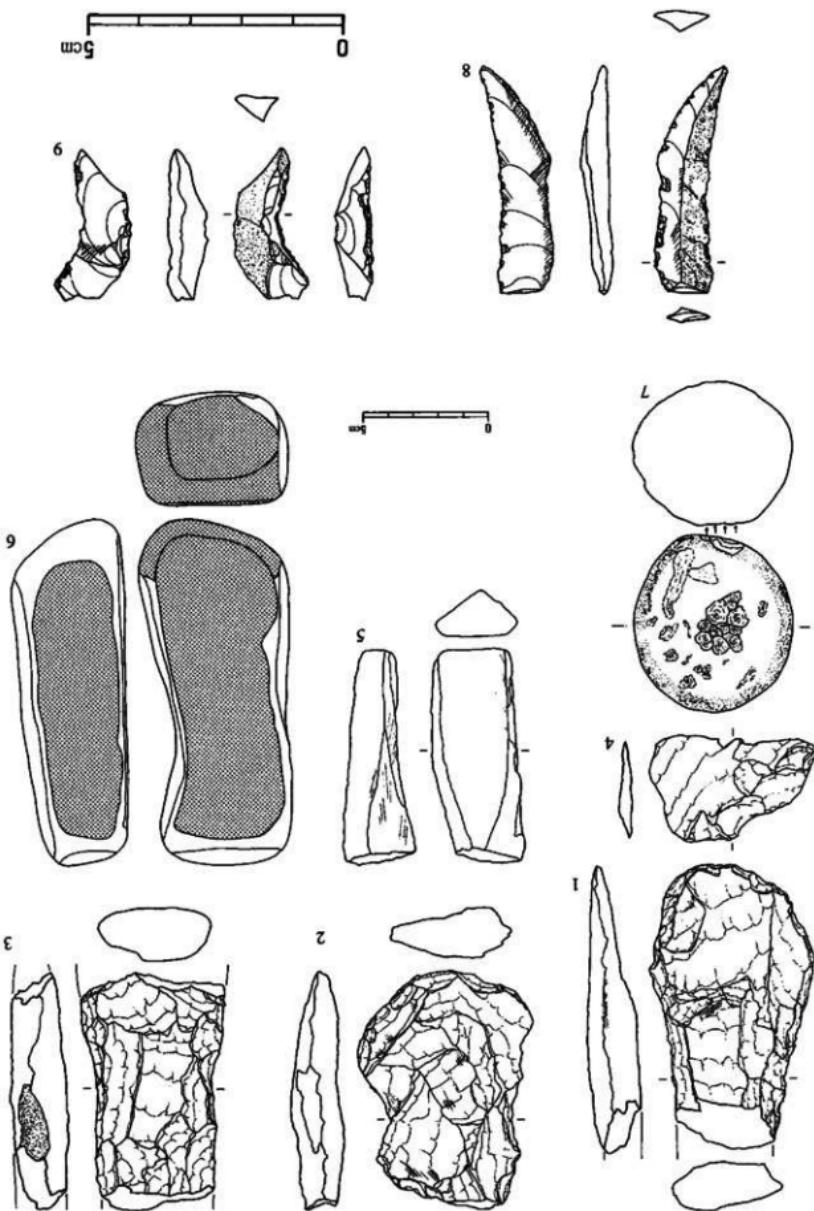
第44図に示したものがそれである。9はB-10グリッドから出土した陶製の壺で、黒色の鉄釉が全面に施され、表面には青白色がかった釉が認められる。10は表面採集であるが、近世以降と考えられる仏飯具の脚部である。11はE-15グリッドから出土した陶製の壺で、表面には黒色と赤みを帯びた鉄釉が施されている。12はE-15グリッドから出土したもので、第29号土坑から出土したものと同時期と考えられる土師質土器の胴下半部である。13は表面採集であり、太平洋戦争期に凱旋記念などで配られた有田焼と考えられる白磁の壺で、内面には桐紋と大窓の絵柄が描かれ、その下には砲弾形のモチーフの中に「紀念」の文字、絵柄の両端には「野砲」「十六」とあり、底部裏には「浅川」の文字が施されている。15・16・17は五輪塔であり、15は約半分近くが欠失した火輪で第1号溝の近くのD-16グリッドから出土したもので、16がD-14グリッド、17がD-16グリッドから出土した水輪であり、これらはすべて凝灰岩製である。





第44圖 出土器・石器・五輪塔

第45圖 出土石器



第3表 石造物一覧表

() は欠損部分の現存値

固有番号	遺跡名	取り上げ番号	現存値							備考
			1	2	3	4	5	6	7	
先祖	26 土	9	14.0	10.6	11.9	7.5	11.5	6.3	17.8	3.3
	21~14 41 ^土	5	13.1	11.2	11.6	7.2	8.6	4.9	13.2	1.7
	27~1 41 ^土	16	11.2	10.2	10.1	6.2	8.5	6.2	14.7	1.6
	21~2 41 ^土	17	12.5	11.8	11.5	7.0	9.5	5.7	15.3	2.5
	27~14 46 ^土	10	8.8	8.0	9.1	4.5	7.3	5.9	12.6	1.1
	27~15 46 ^土	20	11.1	9.5	9.5	5.2	9.2	5.1	14.7	1.5
	27~2 26 ^土	3	7.6	(18.6)	2.6	—	—	—	—	—
	27~3 26 ^土	7	12.5	26.5	25.0	3.2	13.7	2.8	—	5.4 ラク・ツの遺物有り
	27~4 26 ^土	8	8.0	(19.0)	18.0	4.5	10.9	6.5	—	8.1 ノミの歯、玄関に施設有り
	27~7 26 ^土	11~12	(5.0)	(13.0)	(12.5)	(5.0)	(10.8)	(5.6)	2.3 断片 3片	4.9
水	27~8 26 ^土	14	8.5	(18.6)	19.0	4.1	9.7	4.5	—	5.6 断片ラクの歯有り
	27~6 26 ^土	15	7.5	(17.3)	17.2	(3.2)	9.8	4.5	—	3.5
	27~7 26 ^土	5	(7.9)	(18.6)	18.7	3.2	11.0	5.3	—	4.2
	27~8 26 ^土	11	8.0	(20.2)	19.6	3.8	9.7	5.3	—	4.2 断片判明不明の歯有り
	27~9 26 ^土	15	8.0	15.0	20.0	3.7	11.5	5.0	—	5.5
	27~3 31 ^土	6	8.0	15.4	15.5	3.0	7.5	2.4	—	3.1 ノミ歯有り
	27~5 31 ^土	9	8.0	19.0	18.5	3.1	10.5	3.5	—	3.7 遺伝 4.0 遺傳 2.5 の歯穴有り
	27~4 31 ^土	19	12.0	21.0	21.0	3.0	10.3	3.5	—	6.5
	27~1 40 ^土	1	8.0	19.5	18.5	3.5	11.6	4.5	—	5.0 ノミ歯有り
	27~2 40 ^土	4	10.5	19.4	20.1	3.5	11.2	3.0	—	6.0
棚	27~3 41 ^土	25	8.0	19.0	18.7	3.7	11.3	4.5	—	4.9
	27~15 41 ^土	1	9.0	17.5	16.5	1.7	12.0	2.0	—	4.2 ノミ歯有り
	27~16 41 ^土	1	7.4	(13.0)	13.0	3.3	15.8	5.0	—	4.2
	27~17 41 ^土	15	8.0	18.0	18.0	3.5	12.5	5.0	—	4.5
	27~18 46 ^土	24	15.5	(24.6)	27.2	4.0	18.8	(5.6)	—	19.1
	27~16 46 ^土	7	9.5	15.5	19.1	3.3	11.1	5.1	—	4.5
	27~17 46 ^土	22	5.0	14.8	14.5	2.6	9.3	3.7	—	2.8
	27~8 26 ^土	2	14.4	14.5	22.3	14.9	—	—	—	9.3 パク・パン・バー歯有り、面部に 1~7 の歯み有り
	27~9 26 ^土	6	10.0	11.5	23.8	15.0	—	—	—	9.5
	27~11 28 ^土	7	14.7	14.5	18.8	10.6	—	—	—	4.2 頬側に 0.8 の歯み有り
木	27~10 28 ^土	10	16.1	16.1	20.8	12.7	—	—	—	5.7 上顎に 1.6 の歯み有り、アク・アン・アーハの歯有り
	27~6 31 ^土	11	16.0	16.0	20.4	9.2	—	—	—	3.9 ノミ歯有り
	27~3 41 ^土	3	(11.0)	(11.0)	(18.0)	(10.3)	—	—	—	1.2 断片
	27~4 41 ^土	10	(10.0)	(9.0)	(14.0)	(9.0)	—	—	—	—
	27~1~4 41 ^土	16	12.7	12.7	18.8	11.1	—	—	—	4.3 2箇所に判明不明の歯有り
	27~19 41 ^土	3	10.0	10.3	16.0	10.5	—	—	—	3.5
	27~18 41 ^土	21	11.2	11.6	16.0	10.5	—	—	—	2箇所に判明不明の歯有り
	27~20 40 ^土	8	16.2	13.8	18.4	10.8	—	—	—	3.9 パク・バーの歯有り
	27~20 40 ^土	12	8.4	9.5	15.8	9.7	—	—	—	2.4
	27~21 40 ^土	17	12.0	12.0	17.0	10.5	—	—	—	5.5
地	27~22 40 ^土	15	8.0	9.5	15.0	9.5	—	—	—	2.7 頬側に 1.4 の歯み有り
	27~1~2 40 ^土	18	9.0	9.5	14.5	7.2	—	—	—	2.5 判断不明の歯有り
	27~2~3 40 ^土	19	14.4	(12.2)	18.0	10.5	—	—	—	3.5
	27~3 40 ^土	21	7.0	8.2	15.0	9.2	—	—	—	2.5 判断不明の歯有り
	27~10~16 28 ^土	4	(16.0)	10.5	15.5	(18.5)	—	—	—	4.8
	27~10~11 28 ^土	9.5	—	—	—	—	—	—	—	—
	27~12~18 28 ^土	2	18.0	13.0	15.8	14.0	—	—	—	6.0 ノミ歯有り、アーハの歯有り
	27~13~18 28 ^土	4	15.0	15.0	17.8	14.1	—	—	—	5.7 アク・アン・アーハ(アーハ)の歯有り
	27~14~28 28 ^土	6	17.5	12.4	16.0	12.5	—	—	—	5.7 アク・アン・アーハ(アーハ)の歯有り
	27~15~28 28 ^土	8	16.5	15.5	(18.0)	(17.0)	—	—	—	6.6 判断不明の歯有り 2 箇所、ノミ歯有り
棚	27~16~28 28 ^土	9	18.2	(15.3)	17.5	(12.5)	—	—	—	6.6 判断不明の歯有り
	27~17~28 28 ^土	13	19.3	12.5	(19.0)	16.7	—	—	—	8.8
	27~18~28 28 ^土	14	21.0	21.0	20.0	19.0	—	—	—	11.5
	27~7 31 ^土	2	14.8	8.5	16.5	13.1	—	—	—	5.1
	27~8 31 ^土	3	19.5	12.3	19.4	17.5	—	—	—	8.7
	27~9 31 ^土	5	13.5	12.0	14.5	10.5	—	—	—	3.9 4箇所にアク・アン・アーハ歯有り、南に書の字と文字、西にも文字有り
	27~10 31 ^土	15	12.0	12.0	12.0	12.0	—	—	—	5.5
	27~5 41 ^土	12	17.5	7.5	17.7	17.2	—	—	—	5.5 判断不明の歯有り
	27~6 41 ^土	14	16.0	11.2	18.0	17.7	—	—	—	5.5 判断不明の歯有りノミ歯有り
	27~7 41 ^土	19	15.3	11.2	15.5	14.8	—	—	—	5.4 アン・アーハの歯有り
宝	27~20 41 ^土	2	18.0	12.0	12.0	15.0	—	—	—	7.4 判断不明の歯有り
	27~21 41 ^土	7	17.5	11.2	18.3	17.8	—	—	—	6.4 ノミ歯有り
	27~22 41 ^土	10~11	—	—	—	—	—	—	—	—
	27~23 41 ^土	20	17.8	13.7	17.8	16.0	—	—	—	5.4 判断不明の歯有り
	27~24 41 ^土	23	17.0	17.0	17.0	17.0	—	—	—	8.3 3箇所に歯有り
	27~25 41 ^土	26	17.0	17.0	17.0	17.0	—	—	—	9.5 1箇所に判断不明の歯有り
	27~4 46 ^土	5	15.6	11.0	15.0	12.5	—	—	—	4.5
	27~5 46 ^土	6	18.0	10.5	15.7	14.5	—	—	—	4.3 ノミ歯有り
	27~6~8 46 ^土	9	14.5	11.0	14.6	12.4	—	—	—	3.6
	27~7~7 46 ^土	11	17.5	11.0	16.2	(12.0)	—	—	—	4.8
観	27~1 1 游	1	(13.2)	13.1	15.5	10.2	(8.2)	(4.6)	(13.0)	2.2
	27~2 1 游	2	11.5	10.4	11.3	7.8	6.8	5.5	12.1	1.2
	27~3 1 游	6	13.6	12.0	12.7	8.7	9.6	5.6	16.2	2.7
	27~4 1 游	9	11.3	9.2	11.1	7.8	8.2	5.5	13.5	1.4
	27~5 1 游	11	13.0	12.0	12.0	8.0	8.5	5.5	13.5	1.4
	27~6 1 游	16	15.0	—	—	—	(10.6)	—	—	0.5 高さ 20cm 有り、全て欠損
	27~7 1 游	23	12.0	9.6	10.6	6.5	7.8	5.8	13.7	1.4
	27~8 1 游	22	13.8	11.8	(10.1)	8.8	9.2	7.8	17.1	2.4
	27~9 1 游	29	12.6	11.2	11.9	8.9	7.9	5.1	14.0	1.6
	27~10 1 游	24	11.3	8.7	10.8	7.4	7.7	5.1	12.8	1.4
観	27~11 1 游	28	10.0	7.5	11.0	8.0	6.6	5.8	12.2	1.5 1/4 欠損
	27~12 1 游	35	11.0	11.0	11.0	7.7	8.7	5.8	13.0	1.4
	27~13 1 游	33	11.0	11.0	11.0	7.7	8.7	4.8	13.0	1.4
	27~14 1 游	35	15.1	15.4	15.2	7.2	8.5	4.5	14.5	2.2
	27~15 1 游	36	18.0	15.3	11.6	8.5	12.6	6.8	16.6	2.2
	27~16 1 游	41	11.1	9.1	10.5	7.7	7.7	4.5	12.2	1.3
	27~17 1 游	43	12.1	10.0	11.3	8.4	7.8	5.8	13.0	1.5
	27~18 1 游	49	10.8	8.8	—	—	6.2	—	—	0.4 安が半分、残がなし
	27~19 1 游	46	—	(7.9)	9.5	(5.0)	—	4.4	—	0.2 風が半分、残がなし
	27~20 1 游	47	13.0	11.6	11.6	(8.0)	9.1	4.5	13.6	2.1 8箇所に判明不明の歯有り
観	27~21 1 游	46	12.0	10.5	12.0	7.5	7.4	4.6	12.2	1.8 4箇所に判明不明の歯有り
	27~22 1 游	49	12.4	11.4	11.5	8.5	8.5	5.8	15.7	2.2 4箇所に判明不明の歯有り
	27~23 1 游	116	14.7	11.0	10.5	7.2	12.4	5.5	16.0	2.1
	27~24 1 游	119	14.9	13.2	13.4	10.2	10.0	8.6	18.6	2.0
	27~25 1 游	121	11.9	9.9	10.0	7.5	10.5	4.3	14.8	2.0

火 焰	27 - 29	1 滴	1.2 2.2	14.5	12.4	13.1	7.6	10.1	8.0	16.1	3.2	底部に底面 S.6 頂面 S.6 の突起部 2 頭所有り
	28 - 27	1 滴	5	1.5	(1.5)	(10.5)	(10.5)	(11.5)	12.2	1.2	4.5	3/2 欠損
	28 - 28	1 滴	5	7.3	15.5	15.1	4.5	10.7	5.2		4.5	
水 焰	28 - 29	1 滴	12	9.2	18.0	18.0	2.6	10.7	5.6		2.9	
	28 - 30	1 滴	20	7.9	18.7	18.0	3.5	9.0	4.5		4.7	黒色實山根
	28 - 31	1 滴	30	9.0	17.7	(13.3)	4.3	10.0	4.2		4.0	
	28 - 32	1 滴	36	9.1	23.9	25.7	3.2	14.7	3.3		7.9	
	28 - 33	1 滴	37	8.7	(14.2)	(18.1)	3.2	10.7	(3.2)		3.2	
	28 - 34	1 滴	39	8.7	18.7	18.6	4.5	11.3	5.0		3.0	判読不明の凹面 3 頭所有り
	28 - 35	1 滴	40	7.5	17.5	17.2	3.5	8.2	4.8		4.1	
	28 - 36	1 滴	42	7.9	16.4	(10.9)	3.5	8.0	4.0		3.1	
	28 - 37	1 滴	46	7.1	(15.0)	(14.0)	3.7	10.8	14.0		4.7	1/2 欠損
	28 - 38	1 滴	124	7.8	18.1	19.1	3.6	12.0	5.5		4.4	頭先が 1 頭欠損
木 焰	29 - 39	1 滴	4	10.0	9.3	18.6	12.8				5.0	黑色實山根
	29 - 40	1 滴	10	17.5	—	22.0	(9.8)				5.4	6/3 欠損
	29 - 41	1 滴	13	12.0	12.0	17.5	11.3				3.5	バク・バン・バー・バの混合有り
	29 - 42	1 滴	14	12.3	10.0	20.5	11.8				5.2	黑色實山根 ノミ頭有り
	29 - 43	1 滴	17	11.5	17.5	17.5	(8.8)				0.6	1/4 割り 全て欠損
	29 - 44	1 滴	18	18.5	(11.7)	17.4	10.5				3.1	
	29 - 45	1 滴	34	16.1	15.5	19.1	9.9				4.0	上・下に 1.5 の組み有り 底面にノミ頭有り バーの混合有り
	29 - 46	1 滴	82	11.2	9.4	18.5	11.7				5.4	上・1.3 の組み有り 1 頭所頭有り
	40 - 47	1 滴	116	14.7	14.6	17.7	8.6				3.0	3 頭所に判読不明の混合有り
	40 - 48	1 滴	117	(15.0)	16.5	22.5	18.5				8.2	4 頭所に判読不明の混合有り ノミ頭有り
地 焰	40 - 49	1 滴	120	9.1	8.3	18.3	10.4				4.3	
	40 - 50	1 滴	125	11.0	11.0	18.4	11.4				4.4	
	40 - 51	1 滴	7	18.0	11.5	17.4	16.5				5.2	
	40 - 52	1 滴	8	18.5	18.5	18.5	15.2				5.2	
	40 - 53	1 滴	15	1.5	1.5	1.5	23.5				0.9	
	40 - 54	1 滴	18	(14.0)	(6.6)	(15.0)	(10.9)				1.7	1/4 割り 全て欠損
	40 - 55	1 滴	25	20.2	13.5	20.5	19.2				9.6	
	41 - 29	1 滴	29	18.0	14.7	18.0	17.5				8.5	
	41 - 37	1 滴	44	16.8	10.2	15.5	14.3				4.0	
	41 - 58	1 滴	50	19.6	18.7	19.1	14.3				9.0	
空 焰	41 - 59	1 滴	51	—	(2.8)	(5.7)	—	—	5.5	0.2	側片	
	41 - 60	1 滴	113	21.2	17.0	21.0	(18.5)				9.9	
	41 - 61	1 滴	118	18.5	14.9	18.4	15.8				5.5	
	41 - 62	1 滴	119	17.0	12.1	17.0	17.0				4.7	
	41 - 63	1 滴	125	17.5	17.5	17.5	(9.7)				5.5	側片
	41 - 64	1 滴	126	17.5	10.9	17.5	17.6				4.6	2 面に判読不明の混合有り
	41 - 65	1 滴	127	17.8	13.3	17.5	16.5				7.5	
	30 - 1	集中	84	18.2	11.1	13.0	8.5	10.3	6.5	16.8	2.8	
	30 - 2	集中	88	12.8	11.4	12.0	9.1	10.1	5.9	16.0	2.2	
	30 - 3	集中	84	15.9	12.2	12.5	7.8	11.4	6.5	17.9	3.2	
風 焰	30 - 4	集中	87	15.7	11.7	12.1	6.5	10.5	5.1	15.4	2.6	宮山根
	30 - 5	集中	88	12.9	12.5	12.5	(7.6)	12.0	7.0	16.0	2.5	1 頭先不規則 3 面所に判読不明の混合有り
	30 - 6	集中	73	12.2	12.2	12.2	12.2	12.4	7.0	17.0	2.5	4 頭所に判読不明の混合有り
	30 - 7	集中	75	15.2	12.9	11.1	7.8	11.2	5.1	16.5	2.6	
	30 - 8	集中	82	15.0	11.1	11.3	5.5	10.9	6.5	16.1	1.8	頭先が 1 頭欠損 密瘤有り
	30 - 9	集中	89	11.0	8.7	10.1	8.2	9.7	6.2	15.2	1.5	空・馬・8/2 欠損
	30 - 10	集中	93	13.3	10.7	10.9	7.8	10.5	6.3	16.8	2.4	
	30 - 11	集中	91	—	(1.9)	(7.8)	—	(7.2)	—	0.2	側片	
	30 - 12	集中	93	13.5	11.2	11.6	6.1	11.0	7.1	18.1	3.0	
	30 - 13	集中	97	12.8	11.8	11.8	(6.2)	9.9	5.8	15.7	1.8	
火 焰	30 - 14	集中	98	12.2	11.7	11.7	7.7	10.8	5.8	16.8	2.8	
	30 - 15	集中	95	12.8	11.1	11.1	7.2	10.5	5.0	15.2	2.5	
	30 - 16	集中	102	15.8	11.5	11.6	(5.0)	9.0	5.0	15.0	2.0	
	30 - 17	集中	104	13.0	12.6	12.6	8.3	10.5	6.5	17.0	2.0	
	30 - 18	集中	110	13.5	12.4	12.8	7.0	9.3	7.0	16.2	2.7	
	30 - 19	集中	111	13.2	11.7	12.4	(7.6)	9.1	5.0	14.1	2.0	
	30 - 20	集中	97	12.0	19.0	19.5	3.8	11.2	4.0		5.5	斜先が 1 頭欠損
	30 - 21	集中	65	8.6	8.6	18.7	3.1	10.7	4.5		3.6	斜下・上端が欠損
	30 - 22	集中	66	9.1	19.3	19.0	8.0	12.2	5.5		5.5	
	30 - 23	集中	65	10.1	17.1	17.1	8.0	12.2	5.5		5.7	
水 焰	30 - 24	集中	71	8.0	24.5	25.0	4.0	10.0	5.5		5.1	/ノミ頭有り
	30 - 25	集中	77	9.0	18.5	(15.0)	4.8	12.0	5.3		4.6	斜先が 1 頭欠損
	30 - 26	集中	83	7.5	(5.8)	15.1	3.5	10.8	4.0		3.7	
	30 - 27	集中	84	(4.8)	(15.2)	(15.0)	2.8	8.5	3.8		2.7	斜先上端が欠損
	30 - 28	集中	86	7.0	17.5	16.0	3.1	6.5	4.2		3.0	斜先が 1 頭欠損
	30 - 29	集中	100	11.6	18.1	18.5	4.1	8.1	5.0		4.3	
	30 - 30	集中	106	9.8	18.5	18.5	4.2	12.3	5.5		5.7	4 頭所に判読不明の混合有り
	30 - 31	集中	108	8.5	(14.9)	(11.5)	4.0	10.6	(2.2)		4.1	
	30 - 32	集中	109	10.0	17.0	17.0	4.6	11.0	5.5		5.5	斜先が 1 頭欠損
	30 - 33	集中	109	8.2	18.5	18.5	4.3	11.7	5.5		3.5	
地 焰	30 - 34	集中	27	17.2	2.5	(26.4)	(2.0)	10.5	4.8		6.5	1/2 大頭 白斑 4.1 深さ 3.0 のホフ穴有り
	30 - 35	集中	63	19.2	12.0	17.8	10.5				2.6	
	30 - 36	集中	61	15.0	15.0	23.8	14.1				7.8	上下に 1.3 の組み有り ノミ頭有り
	30 - 37	集中	72	11.0	11.1	18.5	11.2				9.5	上下に 1.3 の組み有り ノミ頭有り
	30 - 38	集中	74	12.5	11.5	17.8	11.4				3.8	判読不明の組み有り
	30 - 39	集中	84	10.6	11.2	17.5	11.5				3.5	
	30 - 40	集中	88	8.2	8.5	18.2	10.0				3.7	
	30 - 41	集中	92	11.0	11.0	17.5	10.5				3.7	
	30 - 42	集中	101	14.5	15.0	17.6	8.5				2.6	上下に 1.3 の組み有り 1 頭所に密瘤有り
	30 - 43	集中	26	10.8	(5.8)	15.8	11.4				3.3	宮山根
水 焰	30 - 44	集中	66	18.2	11.9	18.7	16.2				5.1	1 頭欠損有り
	30 - 45	集中	88	18.5	12.2	18.5	16.8				6.3	
	30 - 46	集中	89	17.5	12.8	17.6	13.5				6.4	
	30 - 47	集中	62	17.5	12.9	17.3	16.0				6.4	
	30 - 48	集中	66	18.0	12.8	18.0	15.0				6.4	
	30 - 49	集中	70	18.0	18.0	18.0	16.0				6.4	
	30 - 50	集中	73	17.0	17.0	17.0	15.0				6.4	判読不明の組み有り
	30 - 51	集中	79	16.7	15.2	17.8	15.3				6.5	
	30 - 52	集中	80	17.5	12.1	17.1	14.0				5.6	4 頭所に判読不明の組み有り
	30 - 53	集中	81	16.5	16.4	16.2	16.3				6.7	4 頭所に密瘤有り 宮山根に「妙」の文字有り 条正
地 焰	30 - 54	集中	65	18.0	13.7	18.0	15.5				6.7	
	30 - 55	集中	67	18.0	11.1	17.5	15.7				6.1	
	30 - 56	集中	93	16.0	11.0	16.0	13.5				4.4	
	30 - 57	集中	66	26.0	8.0	—					0.5	宮山根
	30 - 58	集中	D - 1	14.5	(1.0)	(1.4)	(7.5)	(3.6)			2.1	側片 全て欠損
地 焰	41 - 1	グリード	D - 1	14.5	(1.0)	(1.4)	(7.5)	(3.6)			2.1	
	41 - 16	グリード	D - 14	11.5	18.6	18.6	10.8				3.6	
地 焰	44 - 17	F	D - 16	10.8	10.3	19.0	12.3				4.8	

第IV章 成果とまとめ

○五輪塔の規格性と時期について

五輪塔については、以下に述べるような分類ができた。(「土」は土坑、「集」五輪塔集中区、「溝」第1号溝)
空風輪（形態の差異によって6群に大別することができた）

A群：空風輪の大きさがほぼ均等なもので、宝珠形を呈しているもの（溝2・4など）。

B群：空輪が風輪より大きく、空輪の側面に丸みを持つものを一括したが、これらは更に4種類に分けられる。

1類は空輪部が風輪より大きく、その頂部がやや潰れ、側面がやや丸みをおびているもの（28土-1・41土-2など）

2類は1類と同じ特徴を持つが、風輪下部に舌部を持つもの。

3類は空輪の上部がやや潰れるが、頂部が凸っており、側面がやや丸みを持つもの（集3・集14など）。

4類は空輪の上部が潰れ、平面部より側面部の厚さが薄いもの（46土-14・集18など）。

C群：全体的に丸みをおび、砲弾形をしているもの（46土-15・集6など）。

D群：空輪の上部が潰れ、頂部が平坦なもの（溝21など）。

E群：側面部が直線的で方形がになっているものを一括したが、これらは2種類に分けられる。

1類は空輪上部に稜線が見られないもの（溝8・溝15など）。

2類は空輪上部に稜線が見られるもの（溝3・溝17など）。

F群：全体的に直線的で、空輪が風輪に比べて大きいもの（溝23）。

火輪（形態の差異によって6群に大別ができた）

A群：器高が低く、屋根の反りが強いもの（26土-5・集28など）

B群：器高が低く、屋根の側面が直線的なもの（31土-4など）

C群：軒が薄いものを一括したが、これらは更に4種類に分けられる。

1類は屋根の反りが強いもの（26土-3・9）。

2類は屋根の反りが弱いもの（40土-1・41土-3）。

3類は屋根の反りが強く、頂部にホゾ穴が存在するもの（31土-5など）。

D群：屋根の反りが強く、屋根上部の面が狭いものの（集24・46'-17など）。

E群：軒が厚いものを一括したが、これらは2種類に分けられる。

1類は屋根の反りが強いもの（集22・23など）。

2類は屋根の反りが弱いもの（26土-4・41土-16など）。

F群：全体的に丸みがあり、屋根の反りが強いもの（46土-2・46土-18など）。

G群：屋根の反りが弱く、台形のもの（41土-15）

水輪（形態の差異によって5群に大別ができた）

A群：上面と下面の幅と、中央部の横幅の差があまり無いものを一括したが、これらは2種類に分けられる。

1類は器高が低く平たいもの（集42・47など）。

2類は器高が高いもの（28土-11・46土-2など）。

B群：上面と下面の幅に対して横幅があり、高さが無くやや潰れたような形のもの（31土-6・46土-1など）

C群：高さがあり、側面のカーブが緩いもの（26土-8・28土-10など）。

D群：高さがあり、側面のカーブがきついもの（26土-9・46土-20など）。

E群：高さがあり、最大幅が中心部よりやや上方にあるもの（溝-39・46）

地輪（形態の差異によって2群に大別ができた）

I群：側面が方形を呈しているもの。横幅と高さの比によって、4種類に分けることができた。

A類は横幅/高さの比が1.7以上で、横幅に対して高さが非常に低いもの（26土-11・41土-5など）。

B類は横幅/高さの比が1.5～1.6で、横幅に対して高さが低いもの（26土-10・41土-6など）。

C類は横幅／高さの比が1.3～1.4のもの（41土-6・集47など）。

D類は横幅／高さの比が1.0～1.1で、ほぼ正方形のもの（28土-15・18など）。

II群：上底より下底の幅が狭く、側面が逆台形を呈しているもの。横幅と高さの比によって、4種類に分けることができた。

A類は横幅／高さの比が1.6～1.8で、横幅に対して高さが低いもの（31土-7・8など）。

B類は横幅／高さの比が1.4～1.5で、横幅に対して高さがやや低いもの（28土-14・16など）。

C類は横幅／高さの比が1.3以下で、横幅と高さの比があまり無いもの（28土-12・13など）。

從来の研究成果から、空風輪のB群は16世紀中葉といった時期に属することが明らかにされている。横森赤台（東下）遺跡では、地輪に記された紀年銘からII群C類が16世紀前葉段階に、またI群A類が16世紀中葉段階に属していることがわかっているが、I群C類・D類といったものは14世紀代から見受けられる形態であり、併出した造構の状態から15世紀代への位置付けが可能かもしれない。詳細な造構別に見た時期的な問題と形態別の組合せについては、紙面の都合上また別の機会に述べることとし、ここでは五輪塔の形態的な分類から16世紀段階を中心とした位置づけが可能となったことについてだけ触れておく。

○山梨県における中近世の墓制について

中近世における地下式坑、土坑墓（墓と確認できたもの）、寺跡に伴った五輪塔群などの調査例は60数例あるが、これを地域的な分布で見た場合その約70%が横森赤台（東下）遺跡も存在する北巨摩地域に片寄って認められる点がとても興味深いものである。時期的な分布では、古くは鎌倉時代末期の14世紀代から増加し始め、室町・戦国時代の15・16世紀にピークを迎える。江戸初期の17世紀代に減少傾向が見られ、18世紀以降再び増加の兆しが見えてくる。中世に位置づけられる墓は全体の75%にのぼり、圧倒的な差がみられる。しかしこの発見された墓の増減関係から果たして各時代、時代における世相を繁栄したものとしては受け取れるかというと、墓制の変遷過程や墓を造る人々の階層の変化などもあることからこれをもってそうだとは言えないが、14・15世紀代では武士などの権力者層を中心に火葬墓の普及と、地下式坑が造られ始め、15世紀後半から16世紀には土葬の流行に伴って造墓がやや容易になったことから階層的にはかなり広がりをもって営まれるようになつたようであるが、それでも富裕層に限定され、更に手間のかかる火葬墓も支配者層に限って造られていたようである。これは戦国時代に突入し世の中が乱れ始め、心の寄り所として、宗教への依存度が増していく状況が理解できる。17世紀以降は檀家制の施行とともに、世帯単位の小規模墓群が造られるようになり、造墓階層が庶民にまで普及するようになる。このような時代背景の中で、中世の段階では階層が限定されることから北巨摩地域のこの在り方は、開発系領主層の繁栄振りをそのまま反映しているものとして受け取れるのではないだろうか。

ここに報告した横森赤台（東下）遺跡からは、中世末期の墓坑群を中心とした造構が認められ、土坑墓・火葬跡・火葬墓に付随して約200点におよぶ五輪塔類と8体分の人骨を検出することができた。山梨県内では、60数箇所におよぶ中近世墓の調査がされており、近年では集石墓や火葬跡などが出土した明野村の深山田遺跡や多量の五輪塔と集石墓などが認められる韮崎市石之坪遺跡などの調査例に見られるように、室町時代の14～15世紀代に築かれた墓の実態が明らかになりつつある。本遺跡の調査結果も該期の墓制研究に大いに貢献するものと考えている。

横森赤台（東下）遺跡は室町時代末期から戦国時代にかけて営まれた開発系領主層の墓坑群と考えられ、從来該期の墓坑では単独で発見されるケースが多かったが、本遺跡では火葬跡・火葬墓・土坑墓を伴った集団墓であり、他に例が認められず興味深いものである。また、16世紀代の火葬跡・火葬墓の発見は、15世紀後半から激減傾向にある火葬の実態と異にする状況から、支配者層に残っていたこうした事例が、本地域で残っていたことに開発系領主層の支配者階層の位置づけを考える上で興味深いものである。石材については、安山岩と凝灰岩であるが、後者の比率が高く、甲府方面に認められる石材を多様化しており、15世紀末～16世紀代におけるローカル石材の普及といった特徴と合致している。土坑墓群には北枕西向の土葬が多く、中世墓制の浄土信仰の一端が窺える。副葬品を持たない特徴からは、15世紀の墓の変遷期の様相と合っており、錢の副葬という点では地獄信仰の一端を窺い知ることも出来る。

第V章 おわりに

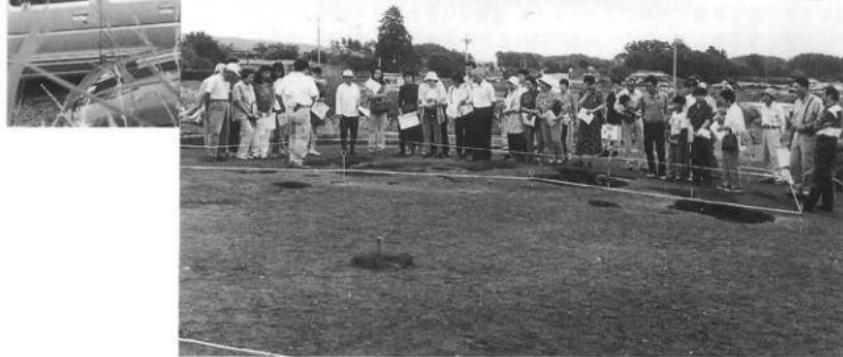
今回の発掘調査では、縄文時代中期と晩期の生活の痕跡が認められましたが、家の跡は無いため、これらの遺構の状態からここに住み生活していた状況を示しているものではなく、破損した道具類の存在から別の定住場所からこの付近に来て食料などを採集した場所であったものと考えられます。戦国時代では環状に広がった墓坑群の分布状況から、墓の無い中心部が広場として機能していたことが想像できます。また一ヵ所に集中して存在することから、一族の集団墓地として機能していた可能性が考えられ、お墓の方向は基本的に八ヶ岳がある北側に向いていますが、それぞれ共通するものとしないものが3~4とおりあるため、これは埋葬された時期差を示しているものと考えられます。発見された五輪塔からは、紀年銘および梵字などが墨書きによって施されたものは192点中44点で、全体の23%の上っており、他にも類例が認められることから陰刻されないものは、当時墨書きされていた可能性が考えられ、今後同時期の遺跡を調査する際には注意が必要と思われます。

今回の調査で発見できなかった火葬骨の埋葬施設の存在もまた示唆される点や、お墓の存在の仕方から、墓域は調査した場所より更に東側部分にも墓が存在し、広がる可能性を示しています。よって周辺部分の今後の開発行為に際して調査が必要であることを触れ、改めてここで注意を促すことにします。紙面の都合上考察が希薄となってしまったことをここでお詫びすると共に、今後別の機会をもって発表にかえさせていただきたいと思っております。

末筆ではありますが、お墓といった精神文化、自分たちの先祖に関わる遺跡であることから、直接発掘調査に従事された方々には大かれ少なかれ抵抗感があったものと思われますが、そのような事情の中で最後まで調査にご協力頂いたことに心からお礼を申し上げると共に、関係諸機関の方々には多大なるご協力・ご指導を賜ったことを厚くお礼申し上げる次第であります。



▲現地説明会の様子



附録1 横森赤台(東下)遺跡出土炭化材の樹種同定

バレオ・ラボ 植田弥生

1. はじめに

当遺跡から出土した中世（15～16世紀頃、戦国時代）の墓に関連した火葬跡から出土した炭化材の樹種同定結果を報告する。試料は、第20号土坑・第29号土坑・第44号土坑・第46号土坑から出土したもので、比較的多くの炭化材が取り上げられた。火葬に関連して使用された材がどのような樹種であったのかは、今まで調査例が少なく、あっても試料点数が少ないので断片的な情報しか得られていない。従って、火葬跡の複数の遺構から量的にも多くの炭化材を対象に樹種同定を行うことは、燃料材を中心とする樹種選択性を明らかにする上で重要である。当遺跡からは、燃料材としてもよく知られたクリが多産したが、その他にカキノキ属が目立ったこと、またやや標高の高い山地の温帯林の代表的構成種であるハシバミ属やマツ属単維管束亞属などが検出された。この結果は、当遺跡が標高700m前後の台地に位置している立地環境と深く関連していると思われる。

なお、第29号土坑から出土した炭化材の放射性炭素年代測定が行われた。この炭化材は比較的大きなクリ材の破片複数を使用して行われている（別報）。

2. 炭化材樹種同定の方法

試料は各遺構ごとにビニール袋に一括して取り上げられていた。炭化材の形状は破片がほとんどであったが細い丸材も少し含まれていた。状況のよさそうな大きな破片だけを同定の対象にすると同定結果が偏る恐れがあるので、微細な破片以外は炭化材の大小に関わらず同定するようにした。先ず炭化材の横断面（木口）を手で割り実体顕微鏡で分類群のおおよその目安をつける。アカガシ亞属・コナラ節・クヌギ節・クリは横断面の管孔配列が特徴的であり、実体顕微鏡下の観察で同定可能であるが、それ以外の分類群については3方向の破断面（横断面・接線断面・放射断面）を走査電子顕微鏡で観察し同定を決定する。またコナラ節やクヌギ節などでも、年輪幅の狭いむか目や逆に年輪幅の広い試料などは実体顕微鏡下では誤同定の恐れがあり、このような試料についても走査電子顕微鏡で確認する。走査電子顕微鏡用の試料は、3断面を5mm角以下の大さに整え、直徑1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、その周囲に導電性ペーストを塗る。試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子機製 JSM-T100型）で観察と写真撮影を行った。

同定した残りの炭化材は、分類群ごとにまとめ各遺構のビニール袋におさめ、山梨県埋蔵文化財センターに保管されている。

3. 結果

4つの土坑からは、針葉樹のマツ属単維管束亞属と落葉広葉樹のハシバミ属・クリ・フサザクラ・リョウブ・ツツジ科・カキノキ属・トネリコ属の合計8分類群が検出された（表1）。量的にはクリが最も多く、どの遺構からも多数が出土し、破片の大きさも大小様々であった。クリ以外の樹種は、遺構ごとで出土に偏りが見られ（表2）、直徑2cm前後の細い枝材や小さな破片であった。第20号土坑からは、マツ属単維管束亞属とハシバミ属の細い枝材が検出された。第29号土坑からは、ツツジ科、フサザクラ・リョウブ・ツツジ科・トネリコ属が1～2片検出された。近隣する第44号土坑と第46号土坑からは、カキノキ属がそれぞれ4片と10片ずつ検出された。

以下に、同定の根拠とした材構造の観察結果を記載する。

(1) マツ属単維管束亞属 *Pinus subgen. Haploxylon* 図版1 1a-1c. (第20号土坑)

垂直・水平樹脂道がある針葉樹材。分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁は平滑で肥厚が見られない。

細胞壁は全般に薄く、放射組織の細胞高は低く、放射組織の上下端にある放射仮道管は1層であることが多い。マツ属單維管束亞属は枝からマツ葉に入る維管束が1本である分類群で日本産では五葉松類がこれに対応する。北海道と本州中北部の高山帯に生育するハイマツ、本州中部と四国の山地に生育するチョウセンゴヨウ、北海道南部以南の山地に生育するゴヨウマツ（ヒメコマツ）などがある。

(2) ハシバミ属 *Corylus* カバノキ科 図版1 2a.-2c. (第20号土坑)

小型の丸い管孔がおもに2~数個が放射方向に複合しややうねりながら分布し、年輪の初めは接線状に密に配列している散孔材。放射組織の集合部分で管孔が分布していない部分も、次の年輪部に入ると道管が分布している。道管の壁孔は交互状に密在し、穿孔は横棒の数が15本前後の階段穿孔、かすかならせん肥厚が見られる。放射組織はほぼ同性単列、たまに一部が2細胞幅になる。中心部の髓は円形である。

ハシバミ属は落葉性の低木または高木で、北海道以南の温帯の日当たりの良い山地の林縁に生育し、ハシバミとツノハシバミがある。

(3) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図版1 3a.-3c. (第46号土坑)

年輪の始めに中型~大型の管孔が密に分布し徐々に径を減じてゆき、晩材では非常に小型の管孔が火炎状に配列し、柔組織が接線状に配列する環孔材である。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性、道管との壁孔は孔口が大きく交互状である。

北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。

(4) フサザクラ *Euptelea Polyanandra* Sieb. et Zucc. フサザクラ科 図版2 4a.-4c. (第29号土坑)

ほぼ単独で非常に小型の管孔が多数散在し、年輪始めの管孔はやや大きく年輪界では径を減じる散孔材。道管の壁孔は対列から階段状、穿孔は階段状で横棒の数は非常に多い。放射組織は異性、1~6細胞幅、多列部は平伏細胞と方形細胞が混在し上下端や縁に直立細胞があり、細胞高は高い。放射組織と道管との壁孔は階段状である。

フサザクラは本州以南の暖帯上部から温帯の溪谷や崩壊地に生育する落葉高木である。材はやや重硬であるが質はあまり良くなく、径もそれほど太くならない。

(5) リョウブ *Clithra barbinervis* Sieb. et Zucc. 図版2 5a.-5c. (第29号土坑)

やや小型の管孔がおもに単独で散在する散孔材。管孔は疎らで年輪の中央部に多く、年輪始めと年輪界では管孔の径はやや小さい。道管の壁孔は交互状、穿孔は階段状の多い階段穿孔である。放射組織は異性、直立細胞からなる単列と5細胞幅の紡錘形のものが多く、多細胞幅の上下端の単列部は方形細胞と直立細胞からなる。

北海道南部の暖帯から温帯下部の山中に普通の落葉高木である。

(6) ツツジ科 *Ericaceae* ツツジ科 図版2 6a.-6c. (第29号土坑)

極めて小型で多角形の管孔が均等に配列している散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は横棒数が15本前後の階段穿孔である。放射組織は直立細胞からなる単列と3細胞幅の紡錘形であり、直立細胞の接線断面は紡錘形であるのが特徴的である。

ツツジ科は常緑または落葉の低木または小高木である。日当たりの良い岩地や酸性土壌に多く生育する。ホツツジ属、ツツジ属、アセビ属、ネジキ属、スノキ属など多数の属種がある。

(7) カキノキ属 *Diospyros* カキノキ科 図版3 7a.-7c. (第46号土坑)

厚壁で円形の小型管孔が、単独または2~4個が放射方向に複合し、やや疎らで均一に散在し、年輪界は見分けにくい散孔材。道管を囲む周囲柔組織が頗著で、接線状・散在状の軸方向柔組織も多い。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一である。放射組織は異性、主に2細胞幅で細胞高は10細胞前後であり明瞭な層階状に配列し、道管との壁孔は交互状に密在する。

カキノキ属は常緑または落葉の高木または低木である。伊豆半島以西の暖地に生育するトキワガキ、各地で栽培されているカキノキ、中国から柿渋を取るために渡来して栽培されたといわれているマメガキなどがある。

(8) トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科 図版2 8a.-8c. (第29号土坑)

中型の管孔が1～3層配列し、単独または主に2個が複合した小型で厚壁の管孔が散在する環孔材。周囲状柔組織が顕著である。道管の壁孔は交互状、穿孔は單一、チロースがある。放射組織は同性、1～2細胞幅である。

トネリコ属はおもに温帯に生育する落葉高木で沢沿いや適湿地を好み、シオジ・ヤチダモ・トネリコ・アオダモなど約9種ある。

4.まとめ

当遺跡の結果から、クリ材が火葬の燃料材や葬送儀礼の道具類に多く使用されていたであろうことが明らかになった。そしてクリ以外の樹種も、少数で量的にも少ないが使用されており、遺構ごとにそれらの樹種の出土傾向は異なるという特徴が見られた。つまり、材構造からは種を特定できないので推測ではあるが、第20号土坑からは中間温帯林から冷温帯林に多く生育するマツ属単維管束亞属とハシバミ属が検出され、第29号土坑からは暖温帯から温帯に多く生育するツツジ科・リョウブ・フサザクラ・トネリコ属が出土し、近隣する第44号土坑と第46号土坑からは栽培種の多いカキノキ属が検出された。クリ以外の樹種が遺構ごとに異なる理由は不明であるが、今後に資料が増えるに従いその理由が見えてくることが期待される。

中世の火葬墓関連の炭化材を詳しく調査した資料に、静岡県磐田市の一の谷中世墳墓群遺跡の報告がある(松谷、1993)。ここでは、当遺跡と同様に複数の遺構から採取した炭化材が調査された。その結果は、針葉樹のヒノキ属と二葉松が多く、そのほかにカシ、シイ、クリ、コナラ属、ケヤキ、エノキ、ネムノキ、サカキなどの広葉樹とタケ類やススキの茎が出土した。針葉樹が多い一の谷の樹種の結果は、クリが最も多かった当遺跡の結果とは異なりそのほかの樹種も異なるものであった。しかし、松谷(1993)が指摘しているように樹種の出土傾向は、同じ遺構で複数の樹種が見出され、遺構ごとにまとまりがある点で、当遺跡も同様であった。出土樹種の相違は、一の谷中世墳墓群遺跡は標高28～35mの台地上に立地するのに対し、当遺跡はそれより高い標高約705m前後であるため、標高による植生の違いが考えられ、従って、火葬跡の炭化材樹種はその地域の当時の植生を反映しているようである。

引用文献

松谷純子、1993、一の谷中世墳墓群遺跡出土炭化材の樹種、一の谷中世墳墓群遺跡、505-514、磐田市教育委員会

表1 横森赤台(東下)遺跡火葬跡出土炭化材の樹種同定結果

遺構	樹種	数量	用途	形状	備考
第20号土坑	クリ	多数	推定直径6cm以下の破片	多數	
第20号土坑	マツ属単維管束亞属	1	直径1.7cm、樹皮付き		
第20号土坑	ハシバミ属	1	直径1.5cm		
第29号土坑	クリ	多数	推定直径10cm以下の破片	多數	14C測定
第29号土坑	フサザクラ	2	直径1.5cmで8年輪、直径1.8cmで18年輪		
第29号土坑	リョウブ	2	直径1.2cmで9年輪、直径2.5cm		
第29号土坑	ツツジ科	1	直径1.5cm		
第29号土坑	トネリコ属	2	直径2.0cmで10年輪、直径1.5cm		
第44号土坑	クリ	多数	推定直径6cm以下の破片	多數	
第44号土坑	カキノキ属	3	推定直径6cm以下の破片		
第46号土坑	クリ	多数	推定直径6cm以下の破片	多數	
第46号土坑	カキノキ属	10	横断面1cm以下の破片		

表2 横森赤台(東下)遺跡火葬跡の各遺構別出土炭化材樹種

	第20号土坑	第29号土坑	第44号土坑	第46号土坑
マツ属単維管束亜属	1			
ハシバミ属	1			
クリ	多数	多数	多数	多数
フサザクラ		2		
リョウブ		2		
ツツジ科		1		
カキノキ属			4	10
トネリコ属		2		

附録2 横森赤台(東下)遺跡 第29号土坑出土炭化材の放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ 山形秀樹

1. 放射性炭素年代測定について

試料は、アルカリ・酸処理を施して不純物を除去し、リチウムと混合して反応管内に入れ、真空ポンプで引きながら800°Cまで加熱して炭化リチウム（カーバイド）を生成後、加水分解によりアセチレンを生成した。

測定は、約一ヶ月放置した後、精製したアセチレンを比例計数管（400cc）を用いて、 β -線を計数した。その結果は下記に示す。

なお、年代値の算出には ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5570年を使用した。また、付記した年代誤差は、計数値の標準偏差 σ に基づいて算出し、標準偏差（One sigma）に相当する年代である。試料の β -線計数率と自然計数率との差が 2σ 以下の時は、 3σ に相当する年代を下限の年代値として表示し、試料の β -線計数率と現在の標準炭素（Modern standard carbon）の計数率との差が 2σ 以下の時は、Modernと表示し、 ^{14}C (Sample) / ^{14}C (Modern) の値を付記する。曆年代の補正は、CALIB3.0 (Stuiver and Reimer, 1993 : IBM-PC用 : Reference (Stuiver and Pearson, 1993)) を使用した。なお、曆年代および曆年代誤差が複数ある時は、曆年代補正曲線と ^{14}C 年代または ^{14}C 年代誤差との交点が複数存在するからである。

2. 放射性炭素年代測定結果

No.	試料	^{14}C 年代値 yrs BP	補正曆年代
PLD-419	炭化材 (第29号土坑)	380±70yrs BP (AD1,570年)	交点 AD1,480年 1SIGMA AD1,440 TO1,640

引用文献

Stuiver, M. and Reimer, P.J. (1993) Extended ^{14}C database and revised CALIB3.0 ^{14}C Age Calibration Program.

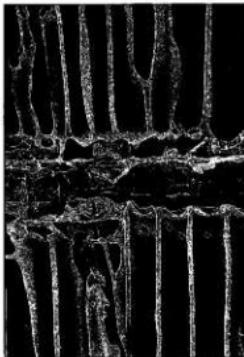
図版1 横森赤台(東下)遺跡の火葬跡炭化材の樹種



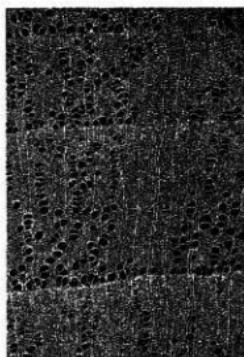
1a. マツ属 単維管束亞属 (横断面)
第20号土坑 bar : 0.5mm



1b. 同 (接線断面) bar : 0.1mm



1c. 同 (放射断面) bar : 0.1mm



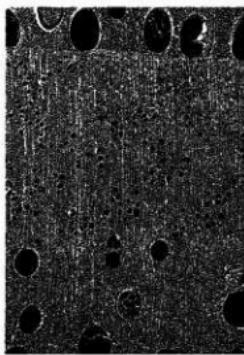
2a. ハシバミ属 (横断面)
第20号土坑 bar : 0.5mm



2b. 同 (接線断面) bar : 0.1mm



2c. 同 (放射断面) bar : 0.1mm



3a. クリ (横断面)
第46号土坑 bar : 0.5mm

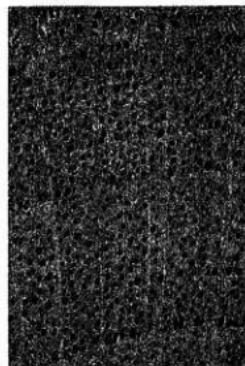


3b. 同 (接線断面) bar : 0.1mm



3c. 同 (放射断面) bar : 0.1mm

図版2 横森赤台(東下)遺跡の火葬跡炭化材の樹種



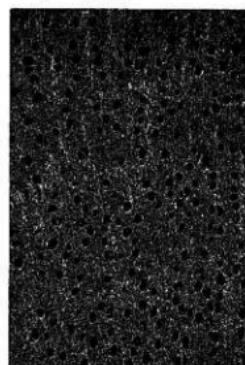
4a. フザクラ (横断面)
第29号土坑 bar : 0.5mm



4b. 同 (接線断面) bar : 0.1mm



4c. 同 (放射断面) bar : 0.1mm



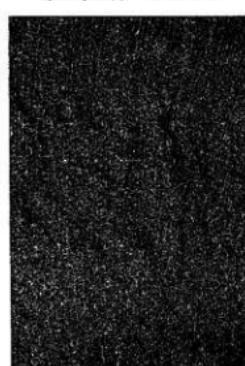
5a. リョウブ (横断面)
第29号土坑 bar : 0.5mm



5b. 同 (接線断面) bar : 0.1mm



5c. 同 (放射断面) bar : 0.1mm



6a. ツツジ科 (横断面)
第29号土坑 bar : 0.5mm

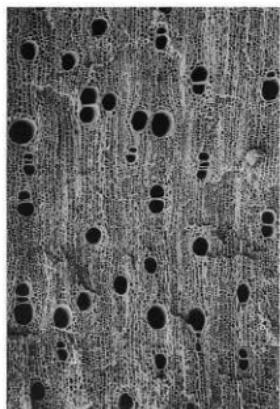


6b. 同 (接線断面) bar : 0.1mm



6c. 同 (放射断面) bar : 0.1mm

図版3 横森赤台(東下)遺跡の火葬跡炭化材の樹種



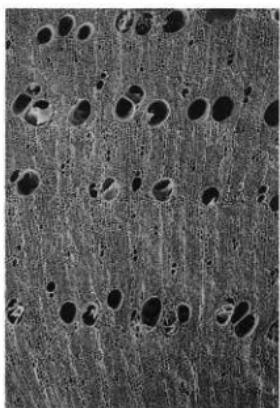
7a. カキノキ属 (横断面)
第46号土坑 bar : 1mm



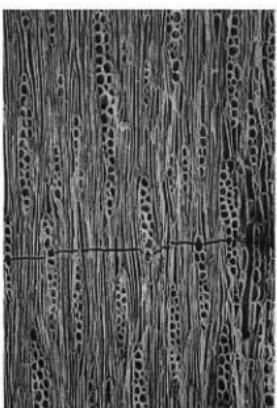
7b. 同 (接線断面) bar : 0.1mm



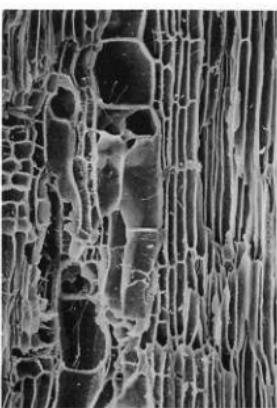
7c. 同 (放射断面) bar : 0.1mm



8a. トネリコ属 (横断面)
第29号土坑 bar : 1mm



8b. 同 (接線断面) bar : 0.5mm



8c. 同 (放射断面) bar : 0.1mm

附編3 横森赤台(東下)遺跡出土人骨

国立科学博物館人類研究部 梶ヶ山真里・馬場悠男

1. はじめに

横森赤台(東下)遺跡は、山梨県北巨摩郡高根町に所在する遺跡であり、平成10年に山梨県埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われた。調査の結果、縄文時代から近世の造構、そして中世の火葬墓や火葬跡などが発掘調査された。人骨は、10基の土坑墓あるいは火葬墓(跡)から出土した。保存状態は不良であり、特に火葬墓から出土した人骨については断片的である。

以下、造構番号順に人骨について記載する。なお、本文中の計測値の単位はミリメートル、示数はパーセントである。

2. 出土人骨

第27号土坑(♂:壮年後半~熟年)

右側を下にした側臥屈葬位で埋葬されている。保存状態は不良である。頭蓋の一部、歯、四肢骨片、椎骨片(環椎・軸椎)が同定できるだけである。脆い部分(左顎面と前頭部)に補強剤がかけられているため、歯の咬耗状態や人骨の形態的な特徴が観察できなかったのが残念である。

頭蓋は、左顎面の一部および前頭骨、そして側頭骨から後頭骨および頭蓋底にかけての部分が残っている。骨質は極めて脆く、骨表面の傷みが激しい。縫合は、冠状縫合では開いている。他の縫合は破損しているので不明である。走向は単純である。側頭骨の乳様突起は良く大きく強壯である。外耳孔は大きな橢円形を呈している。乳突上稜はよく発達している。外後頭隆起は下方に突出している。大後頭孔は大きく橢円形である。頭蓋骨は明らかに男性的な特徴を示している。

歯は、永久歯が9本残っている。保存状態は以下の通りである。

45
7600021123

臼歯の咬耗程度は象牙質が平面状に露出しており、プロカのⅢに相当する。その他の歯の咬耗程度は補強剤が塗付されているため確認することができない。

四肢骨では、左右大腿骨骨体20センチ程、右脛骨、右腓骨が断片的に残っている。右大腿骨は、骨体中央部が残っている。骨体は太く(右:体矢状径29/体横径27)、粗線の隆起も明瞭で、男性としても強壮である。右大腿骨骨体上部は扁平である。右の骨頭は大きく、頑丈である。さらに、右大腿骨の下端の前面から内側面の一部が断片的に残っているが、内側頭には著しい骨増殖があり、原形を保っていない。これらの変化は関節炎によるものと考えられるが、下関節面はなめらかに残っている部分があることから、関節面の咬耗による関節炎ではなく、外傷性の関節炎の可能性が高い。

当土坑墓から出土した人骨は、性別は頭蓋の頑丈さや四肢骨の太さから男性と思われ、年齢は壮年後半~熟年と推定される。

第28号土坑(♂:青年)

仰臥屈曲位で埋葬されている。保存状態は悪く、頭蓋骨片、椎骨、下肢骨が不完全に残っている。また、骨表面の風化による傷みが著しい。

頭蓋は、頭頂骨の一部と左右錐体が残っている以外は、ほとんどが骨粉となっている。縫合は確認できる部分に関しては癒合していない。錐体は比較的大きい。側頭骨の乳様突起は、破損している。残っている歯はすべて永久歯で、以下の歯式の通りである。

	3	4	5	6	7	8			
7	6	5	4	3	2	4	5	6	7

歯の咬耗程度はよくわからない。なぜなら補強剤を使用しているため頬が噛み合わさたまま固まっており、遊離している歯の咬合面にも泥が付着し、ほとんどの歯の表面が観察できないからである。しかし、側面からみると歯冠は完全に残っており、エナメル質がわずかにすり減った程度と推定される。

右上腕骨片、左右大腿骨片、そして左右脛骨片が残っている。右上腕骨骨体の太さは中程度（骨体最小径17／最大径21）で、筋付着部の発達はよくない。右大腿骨は、部分的に破損しているが、最大長は約42cmである。この大腿骨による推定身長は、藤井法で158cmである。骨頭には骨端軟骨の癒合線が認められる。骨体後面の粗線は骨表面の風化のため確認できないが、いわゆる「付柱」を形成しているようではない。骨体は男性としては細く、女性としては太い（骨体中央矢状径23.5／骨体中央横径25）。骨体上部後面の歯筋粗面は明瞭で、深く窪んでおり、若い個体の特徴をしめしている。脛骨は断片的である。脛骨上端にも癒合線が認められる。

当土坑より出土した人骨の年齢は、大腿骨の骨端線残存や歯の咬耗状態から20才前の青年と思われる。性別は確定できないが、男性の可能性が高い。すなわち、大腿骨は男性平均より長いが細く、筋肉付着部は発達していない。これらの特徴は、この個体が若いことによる可能性が高い。

第29号土坑（性別不明：成人）

焼けた上腕骨端の一部、尺骨片、手の基節骨、その他骨片が数点残っている。尺骨片の骨間線は良く発達している。基節骨は熱を受けているにも関わらず比較的大きいことから、この個体は男性の可能性が高い。年齢は不明である。

第31号土坑（♂：壮年前半）

出土画面から判断する限り、右側を下にした側臥屈葬と思われる。骨質は非常にもろく、風化している。頭蓋、椎骨（環椎・軸椎）、下肢骨が検出された。

頭蓋は、頭頂骨から後頭骨にかけてが残っている。しかし、骨表面の傷みが著しい。前頭骨が大きく破損しているため、脳頭蓋全形は不明である。矢状縫合や人字縫合の走向は複雑である。縫合の閉鎖状態は、部分的に癒合している程度である。右側頭骨の側頭線は破損しているため不明であるが、乳突上稜は明瞭に隆起している。側頭骨の乳突起は基部が大きく、全体によく発達している。外耳孔は大きな楕円形である。上下の頸骨は部分的に残っている。下頸骨は、左下頸枝の一部分が破損している。右下頸枝幅（33）は男性として平均的な大きさであるが、骨表面の風化が激しく、咬筋窩の状態など観察できない。永久歯の保存状態は次の通りである。

6	5	4	8	○は歯が死後脱落、歯槽開放
7	6	X	○	×は歯が生前に脱落、歯槽閉鎖

歯の咬耗は、エナメル質が磨り減り、象牙質がわずかに露出している程度である。

下肢骨は、左右大腿骨と左脛骨片が残っている。左大腿骨骨体は太く（体中央矢状径約28／体中央横径約27）、後面粗線の隆起も明瞭である。筋肉の良好な発達が伺える。しかし、骨表面の風化による傷みのため詳細は観察できない。左脛骨と思われる骨体片は、骨端部分が破損し、骨表面の痛みが著しい。骨表面には小孔が多数認められ、粗造である。部分的には骨肥厚もあることから、風化によるものだけではなく、骨梅毒などの病的なものかもしれない。

当墓坑から出土した人骨は、頭蓋の形態や四肢骨から男性のものと思われる。年齢は、歯の咬耗程度から壮年前半と思われる。

第41・41'号土坑（性別不明：壮年半ば）

右側を下にした側臥屈葬位で出土している。

保存状態は不良で、頭蓋と左右鎖骨片、右上腕骨、右大腿骨、左右脛骨が断片的に残っているだけである。しかも、人骨の大部分は粉末状になり、その外形を保っているだけである。

頭蓋では、右側頭骨と細かな頭蓋骨片および歯が残っているだけである。頭蓋の骨表面はもうく、原形をとどめていない。右側頭骨の乳様突起はやや小さいが、付け根は大きい。永久歯の保存状態は以下の通りである。

7

上顎第2大臼歯の咬耗は、象牙質が部分的に露出している程度である。プロカのIIに相当する。したがって、この個体の年齢は壮年半ばと思われる。

その他の骨では、鎖骨は左右とも残っている。骨体は細く華奢である（中央矢状径10／中央垂直径10）。右上腕骨体上部が残っているが、三角筋粗面付近は破損している。骨体はやや細い。骨頭は中程度の大きさである。右大腿骨骨体は上部が12センチ程度残っている。骨体の太さはやや細い（体矢状径21／体横径25）。骨体の後面粗線の隆起は弱い。右脛骨は骨体下半部が15センチ程度残っている。骨体は扁平脛骨である（扁平示数57.1：骨体横径16／骨体最大径28）が、土圧の影響が大きいと思われる。

この墓から出土した人骨の性別については、四肢骨の特徴から判断すると女性（第41号土坑）、側頭骨の乳様突起から判断すると男性（第41号土坑）の可能性を考えられるが確定できない。年齢については、歯の咬耗状態から壮年半ばと思われる。

第43号土坑（性別不明：壮年前半）

画面から判断する限り、右側を下にして膝を曲げ、北東に頭を向けた側臥屈葬で埋葬されたようである。骨の保存状態は不良で、左右大腿骨片と歯がかろうじて判別できるほど残っているが、ほとんどが粉末状になっている。歯の保存状態は次の歯式の通りである。

7	6	5	4	3	2	3
4	3	2			3	4

歯の咬耗程度は、エナメル質がすり減っているものがほとんどであるが、象牙質が露出している歯もあることから、プロカのIIに相当する。年齢は壮年前半と推定される。左右の大脛骨片については、風化による傷みが激しく、補強剤による泥の固着があり詳細はわからない。

第44号土坑（性別不明：年齢不明）

火葬骨片が数点残っているだけである。骨片には、亀裂や収縮があり、白く灰化している。そのため、晒した状態ではなく、軟部が付いた状態で、高温（900度以上）で焼かれたと思われる。頭蓋と思われる破片にのこる縫合の癒合状態は、内板および外板において癒合がかなり進んでいる。年齢は、壮年半ば以上と思われる。性別の同定は保存部位がわざかなためできない。これらの人骨は、ここで火葬し、大部分は取り上げられた残りのものと思われ、被葬者についての詳細は不明である。

第46・46'号土坑（♂：壮年後半、5才幼児）

2体分の人骨が出土している。出土状況図から埋葬状態を判断することはできない

まず、46号土坑には、成人の個体が埋葬されている。頭蓋は、前頭骨から後頭骨部分にかけての頭蓋冠が残っている。前頭部は土圧のため大きく歪んでいる。頭蓋の最大長は計測できないが、最大幅（136）は江戸時代の人骨と比較すると平均的である。縫合の走向はやや複雑である。癒合状態は、頭蓋の内板では完全に消失し、外板では部分的に消失している箇所が認められる。眉間や眉弓の隆起は破損しているので、確認できない。側頭骨の乳様突起は大きく、乳突上稜の隆起も明瞭に認められる。外耳孔も大きく、梢円形である。また、内板において静脈溝の压痕が明瞭であることから、年齢が進んでいたと思われる。この頭蓋にともなう永久歯の保

存状態は以下の歯式の通りである。

6	1
8 7 × 5 4 3	3 5 6

咬耗は、象牙質が露出しているので、プロカのⅡもしくはⅢに相当する。カリエスはない。

四肢骨では、左右大腿骨と右脛骨片が不完全であるが残っている。骨体部分の保存状態が悪く、計測はできない。右大腿骨は骨体の後面が破損し、左大腿骨は下端部分が破損している。左大腿骨骨体太さは太く（骨体矢状径27/骨体横径30）、後面の粗線が良く発達し、筋肉の発達がうかがえる。左脛骨は骨体下半部が残っている。骨表面には、風化による腐食ばかりではなく、骨肥厚や細かな小孔による慢性の炎症反応によると思われる痕跡がある。

46号土坑には、成人の骨のほかに幼児の歯が残っている。

6	1 2	6
		6

乳歯と永久歯の萌出状態から4～5才と思われる。

第46・46'号土坑から出土した人骨は2体分である。すなわち、年齢が壮年後半の男性の個体と、年齢4～5才の幼児が埋葬されている。幼児の歯がよく検出されたため、紛れ込みの可能性は低い。さらに、成人男性の個体は梅毒に罹患していたようである。

3.まとめ

横森赤台(東下)遺跡から出土した人骨は、10基の墓（火葬跡も含む）から幼児骨を含む合計10体分出土した。保存状態の良好なものがなく、完全な全身骨格は残っていない。性別の判断できる埋葬人骨は、すべてが男性であった。火葬骨においては、骨の大部分は取り上げられ、今回検出された人骨は断片的で、性別や年齢の同定が不可能であった。

以上のことから、横森赤台(東下)遺跡に埋葬された被葬者について推測するならば、出土人骨の全てが男性で（一体は女性か）、人骨とともに五輪塔や自然石が検出されている。さらに、火葬の痕跡があることから、本遺跡出土人骨は、土坑墓に埋葬するのが一般的な一般庶民ではなく、僧侶や武士などという階層であった可能性は充分に伺える。しかし、人骨からはその階層はもちろん被葬者の特定もできない。複数の人骨が出土した場合、人骨の計測値や歯冠計測値から集団間の類縁関係や人骨間の血縁関係を割り出す手法がある。しかし、今回出土の人骨や歯は保存状態が極めて不良で、計測に耐えるだけの資料が少ない。そのため、類縁関係や血縁関係を割り出すことは困難である。全体的に保存状況が不良で、計測できたものが少なかったが、古墳時代人以降の人骨として特に形態的に矛盾は認められない。

特に、第27号土坑から出土した人骨は、外傷性の関節炎と思われる痕跡が認められる。また、第31号・第46号土坑出土の脛骨骨表面は、粗造で細かい孔が多数みとめられる。これらが梅毒に罹患していた可能性もあるが、保存状態が悪く、断片的であるため詳しくはわからない。江戸時代において御府内では梅毒が蔓延していたようであるが、江戸時代以前の甲斐地方において梅毒が広がっていたことを示すことになり特筆すべき点である。

文 献

鈴木尚・遠藤万里・北条暉幸・木村賛 1967. 「増上寺御内将軍墓とその遺品・遺体」



横森赤台(東下)遺跡出土人骨

- 1) 第28号土坑出土人骨：右大腿骨
- 2) 第28号土坑出土人骨：左大腿骨
- 3) 第28号土坑出土人骨：右髋骨・右胫骨
- 4) 第31号土坑出土人骨：頭蓋側面
- 5) 第31号土坑出土人骨：頭蓋底面
- 6) 第31号土坑出土人骨：下頸骨
- 7) 第31号土坑出土人骨：左脛骨
- 8) 第31号土坑出土人骨：右大腿骨前面、後面
- 9) 第31号土坑出土人骨：左大腿骨前面、後面
- 10) 第27号土坑出土人骨：頭蓋後面
- 11) 第27号土坑出土人骨：頭蓋上面
- 12) 第27号土坑出土人骨：頭蓋底面
- 13) 第27号土坑出土人骨：右大腿骨
- 14) 第27号土坑出土人骨：左大腿骨
- 15) 第27号土坑出土人骨：左脛骨
- 16) 第27号土坑出土人骨：左腓骨
- 17) 第27号土坑出土人骨：上腕骨片
- 18) 第41号土坑出土人骨：頭蓋側面
- 19) 第41号土坑出土人骨：左大腿骨片
- 20) 第41号土坑出土人骨：右大腿骨片
- 21) 第46号土坑出土人骨：右脛骨・右腓骨片
- 22) 第46号土坑出土人骨：右大腿骨
- 23) 第46号土坑出土人骨：左大腿骨前面、後面

附編4 横森赤台(東下)遺跡出土人骨の炭素・窒素安定同位体比による食性復元

国立環境研究所化学環境部 米田 穣

1. はじめに

遺跡から出土する人骨試料は、その形態学的情報からその個体の背景となる系統関係に関する情報を与えてくれる。しかし、骨形態に生業活動など日常の行動に関する痕跡がとどめられる事は必ずしも多くない。そのため、その種の情報は道具や食べ物の痕跡で構成される考古学遺物から復元する必要がある。しかし、近年、人骨試料には形態以外にもさまざまな情報が含有されていることが明らかになり、例えば生前の生活様式を研究するのに応用されている(赤澤ら 1993、赤澤・南川 1989、米田ら 1996等)。本研究では遺跡から出土した人骨試料から比較的保存されやすいタンパク質、コラーゲンを抽出して、その炭素および窒素の安定同位体比を測定した。

コラーゲンの安定同位体比は、発掘された個体が生前に摂取したタンパク質と強く相關するため、タンパク質が異なるとコラーゲンの同位体比も異なることが知られている。日本における代表的な食料資源は、大きく分けると①C₃植物、②C₄植物、③陸獣、④海産物の4種類に分類することができる。C₃植物とC₄植物というものは光合成における代謝経路に基づく植物の分類であり、日本列島では大部分の植物がC₃植物であり、コメ、ムギ、ソバなどの栽培植物を含んでいる。C₄植物は乾燥に適応したタイプの植物であり、本邦における食料資源では、アワ、ヒエ、キビといった雑穀がそれに分類される。これらの雑穀は民俗学的研究から日本の基層文化の一端を担う重要な農作物であるとの指摘もあり、特に山間部では主食的な作物であったといわれることも少なくない(佐々木 1971等)。今回は、雑穀の利用の可能性が考えられる内陸部中世人骨を分析する機会を得たので、その炭素・窒素安定同位体比に基づく食性復元の結果を報告する。

2. 資料と方法

本研究では、横森赤台(東下)遺跡から出土した人骨資料7個体を分析に供した。分析試料は比較的保存状態の良好な長管骨骨体部を中心に採取した(表1)。表面に固定材が塗布されていた場合はアセトン等の有機溶媒中で超音波洗浄して、これを完全に除去した。約1gを分析用に分取し、0.2mol/lの水酸化ナトリウム溶液に12時間浸けて、フミン酸などの土壤有機物を除去し、凍結粉碎した。これを1mol/lの塩酸と反応させて、ハイドロキシアバタイトを溶解する。残存した分画の大部分はコラーゲンからなるが、土壤有機物が残存する可能性がある。そこでコラーゲンが比較的低温で熱変性を起こし水に可溶になる性質を利用して、さらに精製をする。これをゼラチン化と言う。本試料に対しては、90℃の純水10ml中で約12時間のゼラチン化を実施し、遠心分離後に得られた上澄みを凍結乾燥して、ゼラチン・コラーゲンを得た。

上記の方法で抽出されたゼラチン・コラーゲンから約0.5mgを分取して、炭素・窒素安定同位体比分析に供した。同位体比測定は元素分析計・高精度安定同位体比質量分析システムを使用した。これは元素分析計(Carlo Erba NA1500)を用いて試料を燃焼し、二酸化炭素および窒素に精製、分離して炭素および窒素含有量を測定する。さらにFinnigan Conflo IIインターフェースを介して、精製された気体を毛細管で接続された高精度安定同位体比質量分析器Finnigan MAT 252のイオン源へと逐次導入して炭素および窒素同位体比を測定する。測定精度は、測定用標準物質(working standard)として再処理した試薬コラーゲン(COLLAGEN Insoluble Type 1, Sigma Chemical)をサンプル測定間に適宜挿入することで評価した。典型的な測定における1標準偏差は炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)で0.1%以下、窒素同位体比($\delta^{15}\text{N}$)では0.3%以下である。

ここで簡単に同位体比の単位である δ (デルタ)値について簡単に説明する。天然の物質では同位体比の変動は非常に小さいので、通常は標準物質との偏差を千分率で表記した δ 値で示される。炭素では標準物質に

PeeDee層出土のペレムナイトの化石（PDB）が用いられる $\delta^{13}\text{C}$ 値は次式で定義される。

$$\delta^{13}\text{C} = \left(\frac{(\text{C}^{13}/\text{C}^{12})_{\text{sample}}}{(\text{C}^{13}/\text{C}^{12})_{\text{PDB}}} - 1 \right) \times 1000$$

同様に窒素の場合は大気窒素（AIR）を標準物質として、 $15\text{N}/14\text{N}$ 比の変動を表す。

3. 結果と考察

表1に各個体における、分析部位、有機物含有量、コラーゲンにおける炭素および窒素含有量、元素数によるC/N比を示す。植物依存体に由来する土壤有機物と比較した場合、コラーゲンは窒素含有量が多いことが特徴である。そのため、C/N比を指標として2.9~3.6の範囲では土壤有機物の影響がほとんど無いと考えられている。今回分析した人骨資料では、残念ながらC/N比が高くなる傾向があり、古食性の復元に使える分析結果は横森一3と横森一6の2個体のみである。標準的なC/N比を示した2個体と他の個体における $\delta^{13}\text{C}$ 値と $\delta^{15}\text{N}$ 値を比較すると、窒素同位体は重く炭素同位体比は軽くなる傾向があるようである。またC/N比が異常な結果を示すコラーゲンは炭素、窒素とともに含有率が減少しており、とくに窒素では窒素含有率と $\delta^{15}\text{N}$ 値に負の相関が認められる。これらの情報を総合すると、当遺跡におけるコラーゲンでは重たい窒素を含むアミノ酸が失われる傾向があると考えられる。

C/N比から続成作用の影響が少ないと考えられた2個体（横森一3、横森一6）に関して、コラーゲンの炭素・窒素安定同位体比から、彼らが摂取したタンパク質の炭素・窒素安定同位体比を復元することができる。すなわち、動物実験等からコラーゲンには食物中のタンパク質より炭素では+4.5%、窒素では+3.5%のシフトで ^{13}C および ^{15}N が濃縮することが知られている。反対にコラーゲンの同位体比からこれらの値を差し引いてやることによって、生前に摂取されたタンパク質の平均的な同位体比を復元することができる。これらの復元値からタンパク質源を推定するために代表的な食料資源の同位体値と比較する（図1）。図1は復元されたタンパク質源が C_3 植物およびそれを摂取する草食動物に近い値を示すことを示している。比較のために、山梨県大月市に立地する江戸時代後期の安楽寺東遺跡と、長野県諏訪郡から出土した江戸時代前期人骨から復元した食性における同位体比を示した。山梨県出土人骨で比較すると、中世の横森赤台人骨と江戸時代後期に属する安楽寺東遺跡では、同位体から見ると顕著な相違は認められない。一方、同じく内陸に生活していた長野県の江戸時代前期人では5個体のうち4個体は窒素が高い値を示しており、1個体は山梨県出土人骨と近似した値を示すことが明らかになった。長野県江戸時代人における高い窒素安定同位体比は、大型魚類等比較的栄養段階の高い海産物摂取の影響であると考えられる。一方、山梨県出土の中世および江戸時代人骨では海産物消費が若干あったものと考えられるが、日常的な摂取ではなかったようである。この相違が地域差、時代差か、あるいは個体の社会的な属性のいずれによる相違に起因するのかは、今後の分析を進めていく上で興味深い点である。横森赤台出土人骨から復元された食性における炭素・窒素同位体比の値は C_3 植物と栄養段階の低い海産物の間に分布する傾向がある。したがって、タンパク質の大部分は C_3 植物から摂取されたものと推定される。 C_3 植物にはコメやムギが含まれるが、残念ながら同位体に関する情報だけではその分別は困難である。一方、アワ、ヒエ、キビなどの雑穀は C_4 植物に属するが、今回分析した個体に関しては C_4 植物を中心とした食性を有した個体は認められなかった。

4. 結 語

本研究では、山梨県高根町から出土した中世人骨試料より残存するタンパク質、コラーゲンを抽出し、その炭素・窒素安定同位体比から当時の食生活の様子を推定することをこころみた。残念ながら分析した7個体のうち5個体でコラーゲンの劣化が著しく、食性の復元ができたのは2個体のみであった。その結果、当地域における食料のうちタンパク質は C_3 植物に由来するものが多いと推定された。また海産物については若干の影響

が認められるがその影響は小さく、C₄植物である雑穀が日常食で占める割合は小さかったと推定された。

長野県から出土した江戸時代前期の人骨では、それ以前の時期に認められなかった海産物摂取の影響が同位体比に記録されていたのに対し（米田ら 1996）、今回分析した横森赤台（東下）遺跡出土の中世後期人骨では、長野県出土人骨より植物性タンパク質に強く依存した傾向が認められる。長野県出土人骨でも1個体は、横森赤台遺跡人骨と近似する同位体比を示していることから、日本列島内陸部における生業活動の地域差などを検討する必要があると考えられる。今後、時代間の変化や地域差、あるいは社会階級による相違などを検討しながら分析データを増やし、文献資料とのすり合わせを行っていきたい。

また今回分析した試料は中世後期と比較的最近の試料であるにもかかわらず、コラーゲンの保存状態が悪いことが明らかになった。日本列島のとくに内陸部では、今回のように試料の劣化がすすみやすい環境が多いと考えられる。今後の研究をすすめるうえで、アミノ酸における同位体比測定など分析手法のさらなる開発、検討の必要性が明らかになった。

謝 辞

試料採取に際しては国立科学博物館・梶ヶ山真里氏に便宜を賜った。関口弘喜博士は放射性炭素測定に際して尽力いただいた。岡部陽子氏、水野郁子氏には実験作業で御助力いただいた。また、国立環境研究所の柴田康行室長、森田昌敏統括研究官、国際日本文化研究センターの赤澤 咸教授には研究全般にわたって指導を賜った。記して謝意を表します。本研究の一部は文部省科学研究費補助金・特定領域研究「日本人・日本文化」（代表者・尾本恵市日文研教授）によってなされた。

参考文献

- 赤澤 咸・米田 稔・吉田邦夫（1993）北村縄文人骨の同位体食性分析。長野県埋蔵文化財センター編「北村遺跡」、445-468.
- 赤澤 咸・南川雅男（1989）炭素・窒素安定同位体に基づく古代人の食生活の復元。「新しい分析法は考古学になにをもたらしたか」、132-143. クバブロ.
- 佐々木高明（1971）「稻作以前」。日本放送協会。
- 米田 稔・吉田邦夫・吉永 淳・森田昌敏・赤澤 咸（1996）長野県出土人骨試料における炭素・窒素安定同位体比および微量元素量に基づく古食性の復元。第四紀研究 35 (4) ,293-303.

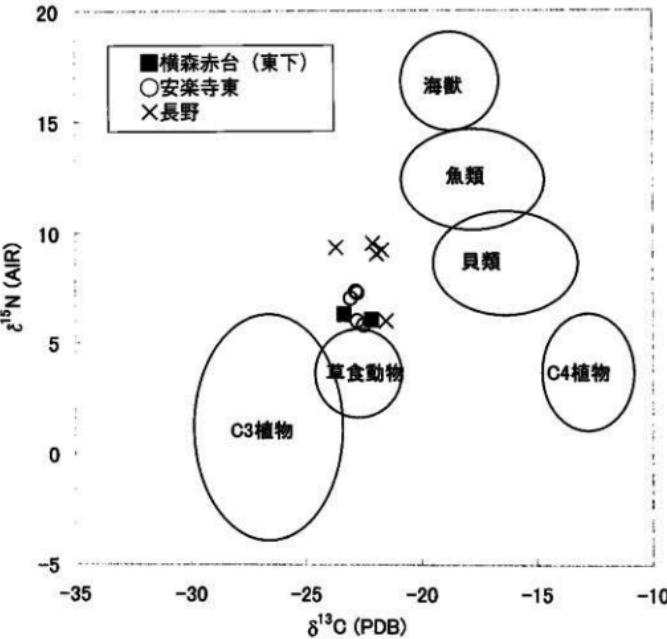


図1 横森赤台(東下)遺跡出土人骨から復元された食性における炭素・窒素同位体比

分析番号	出土地点	分析部位	有機物含有率	炭素含有率	窒素含有率	C/N比	$\delta^{13}\text{C}$ (PDB)	$\delta^{15}\text{N}$ (AIR)
横森-1	第27号土坑	(長管骨片)	4.8%	42.5%	11.2%	4.4	-19.2‰	11.9‰
横森-2	第28号土坑	上腕骨	3.1%	38.8%	11.7%	3.9	-19.1‰	10.0‰
横森-3	第31号土坑	腓骨	6.9%	44.3%	14.3%	3.6	-18.8‰	9.8‰
横森-4	第41号土坑	肋骨	3.3%	42.5%	12.7%	3.9	-18.8‰	10.5‰
横森-5	第41号土坑	尺骨・肋骨	12.6%	44.5%	15.6%	3.3	-17.7‰	9.5‰
横森-6	第43号土坑	(長管骨片)	1.2%	41.1%	11.1%	4.3	-18.9‰	11.0‰
横森-7	第46号土坑	(長管骨片)	2.2%	42.0%	11.8%	4.1	-19.5‰	11.7‰

表1 横森赤台(東下)遺跡出土人骨における分析結果。有機物含有量は、抽出物(g)/骨粉試料(g)を、炭素および窒素含有量はゼラチンコラーゲンにおける値を示す。

第41号土坑出土漆塗膜について

昭和女子大学 武田昭子

1. 試料について

漆塗の一部とみられ、全体の4分の1程度の残存量と推察される。ごく接近した場所で、2カ所に分かれて出土した。木胎部は朽ちて残存せず漆膜のみで、大きな断片でも長径が2.5cm内外で8片程あるが、他は1cmから数ミリの無数の破片状態となっている。断片はおむね黒色漆に赤色漆の加飾が施されているか黒色漆のみで塗られ、赤色漆塗の大きな断片は見られない。現況から器形、内外面の塗装および加飾状況等を明確にするのは不可能である。なお漆膜が剥離している断片は、肉眼観察では認められなかった。

ここで表面から観察して赤色を呈するものを赤色漆、黒から黒褐色を呈するものを黒色漆と表記する。また分析により硫化水銀を検出したものについては朱漆とした。(赤色漆には鉄分を混和した弁柄漆もあるが、本件の試料からは検出しなかった) 黒色漆は一般に油煙、鉄分等を混和したいわゆる黒漆と、木炭粉等の下地の上に漆を塗り、木炭粉の黒と漆自体の茶褐色で黒漆に見せているものがある。

2. 調査方法

2.1 試料採取

本試料は棺の一部とされているが漆膜断片のみで不明な点が多く、器体のどの部分の試料か判断し難い。サンプリング数を可能な限り増やし、塗膜構造を把握することに努めた。このため遺物に支障のない範囲で赤色文様のあるもの、黒色だけのもの双方含め8点から、1~2mm四方の破片をサンプリングし、分析に供した。

2.2 観察および分析の方法

漆製品の塗膜構造を調査する場合、塗膜表面および断面を顕微鏡で観察し塗膜構造を把握することは基本的な調査となっており、必要不可欠な項目となっている。混和物については顕微観察でもある程度判断できるが、X線マイクロアナライザー(EPMA)による同定で、漆に混合された顔料等が確実に判断できる。またフーリエ変換赤外線分光計で現世漆の波形との比較により漆か他の有機物か判断可能となる。

1) 光学顕微鏡による試料表面と断面の観察

各断片試料について、実体顕微鏡下で表面状況を観察した。その後乾燥しエボキシ樹脂に包埋した後研磨し、実体顕微鏡で塗膜の落射光観察を行った。またその試料をスライドグラスに接着し薄片に仕上げ、生物顕微鏡で透過光観察を行い塗膜構造を調査した。

使用機種：ニコン製SMZ-2T(実体顕微鏡)、ニコン製OPTIPHOTO-2(生物顕微鏡)

2) X線マイクロアナライザー(EPMA)による分析

採取した試料について、断面混和材の元素の定性分析をX線マイクロアナライザー(EPMA)で行った。

使用機種と条件：日立製走査型電子顕微鏡S-3200N型、HORIBA製エネルギー分散型X線

分析装置、EMAX-5770W、加速電圧20kV

3) フーリエ変換赤外分光計(FTIR)による分析

測定試料は実体顕微鏡下で塗膜の部分を1~5mg採取し、KBr法により調整し測定した。試料中には微細土砂などを混在していたが、絶対量が少なく分別せずに測定に供した。既知標準対照試料として市販の生漆を用いその波形との比較で同定を行った。

使用機種と条件：島津製作所製FTIR-8000、アルミニウム直径3mm試料ホルダー、測定範囲4600~400cm⁻¹、

積算回数200回

3. 調査結果

3.1 光学顕微鏡による表面観察

断片試料表面の状態は、写真1に示すような状況である。写真上半部は赤色漆の文様部分で、下半部は黒色の地色部分の漆である。表面は荒れて無数の亀裂が走り、欠損箇所も散見される。8点の試料すべて同様な状況であるが、地塗りの表面色は茶褐色と黒色の両方認められた。

3.2 光学顕微鏡による断面観察

塗りの技法が比較的分かり易い落射光観察写真を写真2に、6点の試料断面を写真3～8に示す。写真3～8はすべて透過光観察である。(試料7の断面写真は未掲載) また塗膜断面観察の調査結果を表1に示す。ここで断面観察を記載するにあたりa木地、b下地層、c漆層とする。

断面観察の結果、塗りの構造、膜の厚さ、木炭粉の大きさで違いが見られ、次の4グループに分けられる。

①塗膜が“厚い”から“中くらい”(最大厚560～370μm)で赤色漆の文様がある断片(試料1～4)

②塗膜は薄く(最大厚290μm)赤色漆の文様がある断片(試料5)

③塗膜は薄く(最大厚300μm)赤色漆がみられない断片(試料6、7)

④塗膜は薄く(最大厚270μm)赤色漆がみられなく下地が炭粉漆下地の2重構造の断片(試料8)

以下にグループ別に塗膜について詳述する。

① 試料1～4(写真2、3、4、5)

塗膜はa木地(試料4はなし)、b下地層(全試料2層)、c漆層(試料1、2は6層。試料3は3層。試料4は4層)が認められる。

a いずれの試料も木地も残存せず、漆で地固めした部分の一部のみ残る。

b1 地粉と漆を混和した下地層で、試料1から60～150μm、60～360μm、140～220μm、60～250μmの厚さとなっている。

b2 木炭粉(試料1から最大長210μm、150μm、200μm、210μm)と地粉、漆を混和した下地層で、試料1から50～100μm、50～150μm、150～180μm、100～120μmの厚さとなっている。大粒の木炭粉の周囲に空隙が認められ、特に試料2、3、4は木炭粉の下部に空隙が目立つ。

c1～c3(試料1) : c1、c2(試料2) : c1(試料3、4)

下地層を整えるための漆層で、透明漆にまばらに木炭粉の黒い粒子が混じる。各試料の最上面は研がれて平滑にされている。厚さは試料1から10～80μm、最大厚50μm、5～40μm、5～25μmとなっている。

c4、c5(試料1) : c3～c5(試料2) : c2(試料3) : c2、c3(試料4)

透明漆層で、厚さは試料1から35μm前後、19μm前後、40μm前後、24μm前後となっている。試料2のc4層は、微粒子が密に混和されている。

c6(試料1、2) : c3(試料3) : c4(試料4)

漆に朱を混和した赤色漆加飾の層。厚さは試料1から20μm、12μm、25μm、11μmとなっている。

② 試料5(写真6)

塗膜はa木地、b下地層(2層)、c漆層(3層)が認められる。

a 木地は朽ちて残存せず、漆で地固めした部分の一部のみ残る。

b1 地粉と漆を混和した下地層で、70～100μmの厚さ。

b2 木炭粉(最大長260μm)と地粉、漆を混和した下地層で、80～160μmの厚さ。大きい木炭粉周囲に隙間が認められる。

c1 下地層を整えるための漆層で、透明漆にまばらに木炭粉の粒子が混じる。5～30μmの厚さ。

c2 透明漆層で、厚さは25μm前後。

c3 漆に朱を混和した赤色漆加飾の層で、9μmの厚さ。

③ 試料6、7(写真7)

塗膜は両試料とともに b 下地層（2層）、c 漆層（5層）が認められる。

- b 1 地粉と漆を混和した下地層で、試料 6 は $110\mu\text{m}$ 、試料 7 は $40\sim110\mu\text{m}$ の厚さ。
- b 2 木炭粉（試料 6 は最大長 $130\mu\text{m}$ 、試料 7 は最大長 $200\mu\text{m}$ ）と地粉、漆を混和した下地層で、試料 6 は $90\sim130$ 、試料 7 は $100\sim210\mu\text{m}$ の厚さ。大きい木炭粉の周囲に隙間が認められる。試料 6 は比較的密に木炭粉と漆が混和し充填されている。
- c 1 下地層を整えるための漆層で、透明漆にまばらに木炭粉の粒子が混じる。最大厚で試料 6 は $50\mu\text{m}$ 、試料 7 は $30\mu\text{m}$ となっている。
- c 2、c 3 透明漆にまばらに微粒子が混じっている。c 3 の上面は研がれて平滑になっている。厚さはともに最大厚で試料 6 は $25\mu\text{m}$ 、試料 7 は $50\mu\text{m}$ 前後。
- c 4 試料 6 は透明漆に微粒子が部分的に密になり混和し、試料 7 は微粒子が平均的に密に混和している。厚さは試料 6 で $30\mu\text{m}$ 、試料 7 は $25\mu\text{m}$ 前後となっている。
- c 5 透明漆層で、両試料とともに表面の劣化が激しい。厚さは、試料 6 で $10\mu\text{m}$ 、試料 7 は $10\sim30\mu\text{m}$ 。

④ 試料 8（写真 8）

塗膜は a 木地、b 下地層（2層）、c 漆層（4層）が認められる。

- a 木地は朽ちて残存せず、漆で地固めした部分の一部のみ残る。
- b 1 細かい木炭粉（最大長 $30\mu\text{m}$ ）と漆を混和した下地層で、 $15\sim70\mu\text{m}$ の厚さ。木炭粉の間には漆が充填されていない。
- b 2 木炭粉（最大長 $80\mu\text{m}$ ）と地粉、漆を混和した地下層で、 $120\sim150\mu\text{m}$ の厚さ。
- c 1 下地層を整えるための透明な漆層で、上面は研がれて平滑にされている。最大厚で $25\mu\text{m}$ 程。
- c 2、c 3 透明漆層で、ともに $20\mu\text{m}$ の厚さ。c 3 は劣化が激しい。

3. 2 EPMAによる元素の定性分析

写真 9 は試料 3 の断面における元素の分布状況である。ここに示す通り赤色漆層から Hg と S が検出された。

3. 3 FTIRによる漆の同定

図 1 に FTIR による測定結果の一部を示す。いずれも現世漆と同様な波形が得られ、膠着剤として用いられているのは漆であることが分かった。

4. 考 察

各グループの特徴をまとめると次のようになる。

①は地粉下地の厚さが全体の厚さに反映している。すなわち凹凸が激しい箇所の下地はそれらを埋めるため必然的に厚くなる。その上に位置する下地層と漆層には、厚さの違いはあまり見られない。

②では地粉漆下地の上下面はほぼ平滑になっており、木地表面が比較的平らな箇所と思われ、この層の上にくる木炭粉、地粉を混和した下地の厚さは①のグループとほぼ同様である。

③のグループは赤色漆層がないことを除けば、②とほぼ同様な厚さと構造である。ともに上部層に向かって亀裂があり表面が荒れている。

④は最下部に細かい木炭粉を用いた炭粉漆下地を薄く施している点で、他の試料と異なった下地構造となっている。その上にくる木炭、地粉を混和した下地層、漆層および層厚は他の試料とあまり変わらないが、地粉に混和した木炭粉は試料 6 に近く、若干細かい。

上記より①～③グループの塗膜の違いは、器物の木地表面の凹凸、部位による塗りの違いからと見られる。

④については部分的に下地の手法を変えたと思われる（あくまでも出土断片が一個体と考えた場合）。

試料 3、4 に顕著に見られる木炭粉下部の隙間は、漆を塗り木炭粉を薄いた薄地の技法と思われる¹⁾。薄地の技法は一般的に地粉と木炭粉を薄く方法があるが、木炭粉は地粉と比べてその強度は劣る。本件の試料には漆膜自体に剥離現象は見られないものの、膜に粘りがなく、すぐ折れる。大粒の木炭粉を使い、隙間が発達し

ている塗膜構造からすれば当然の現象である。しかし、中塗り、上塗りと研ぎを加えながら塗っているところをみると、ある程度吟味して造られたものであるといえる。岡田による京都市内出土の漆器で、地粉漆下地と炭粉漆下地を混和した下地を併用した例は、9世紀前半から中葉にかけてみられる¹⁾。一方四柳による佐助ヶ谷遺跡出土漆器塗膜分析によると、13世紀後半から14世紀初頭では地粉や木炭粉を用いた漆下地漆器が多く、これ以降から15世紀後半にかけては安価な炭粉漆下地より地粉漆下地の漆器が主体になる。しかし両時期を通して特殊な器形や特注品は漆下地であると報告されている²⁾。ここで炭粉漆下地より地粉漆下地の方が強度があり、製作時間も必要とするためより高級品とされている^{3) 4)}。本件の試料もこのような意味で製作年代については、今後類例を重ねて検討して行く必要があると思われる。

試料2、6、7に見られる微粒子の密な層は油煙とも思われるが、いずれもかなり薄く、他の試料には顕著に確認できない。現時点では断定しがたいが、黒色を表現するため顔料を入れ上塗りした可能性もある。

EPMA分析の結果で硫化水銀(HgS)が検出されたので、本試料の赤色漆はすべて朱を用いていることがわかった。またこれらの試料すべて、同様な均一でかなり細かい朱を用いている。

5. まとめ

8点の試料の分析調査から、本遺跡より出土した漆器について次のことがいえる。

本件の断片はおむね地粉漆下地の上に木炭粉、地粉と漆を混和した2重の下地構成をとっている。なお試料8のように部分的に地粉漆下地ではなく、炭粉漆下地を施している可能性もある。木炭粉については、100μm以上の粗い大粒と細粒が入り混じったものを用いているが、場所によっては粒度を変えて使用した可能性もある。

本件の出土時期から推察すると、量産漆器として炭粉漆下地塗りが回っていた時期である。本試料は、下地を地粉漆と炭粉漆で2回塗り、中塗り、上塗りと研ぎを加えながら塗りの基本にそって吟味されて造られたものであるが、高級品とまではいかないと考えられる。なお製作年代、産地等の検討は、今後類例を重ね検討していく必要がある。

謝辞

この報告書をまとめるにあたりEPMA分析で東京都立産業技術研究所の金城康人氏、FTIR分析で東京都埋蔵文化財センターの門倉武夫氏にご協力いただきました。ここに記して感謝いたします。

参考文献

- 1) 岡田文男：第3節 京都市内出土の平安時代前期の漆器、“古代出土漆器の研究”、p. 90
- 2) 四柳嘉章：鎌倉市佐助ヶ谷遺跡出土漆器の塗膜分析、“佐助ヶ谷遺跡発掘調査報告書”、373-388 (1993) 佐助ヶ谷遺跡発掘調査団
- 3) 沢口悟一：髹漆、“日本漆工の研究”、233-293、(1966)、美術出版社
- 4) 小松大秀、加藤寛：地場産業における漆、“漆芸品の鑑賞基礎知識”、213-218、(1997) 至文堂

写真9 X線マイクロアナライザー（EPMA）による塗膜断面分布（試料3の塗膜）

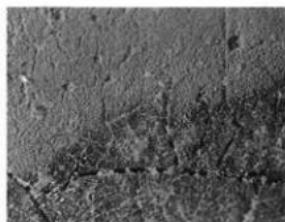


写真1 塗膜の表面状況×200

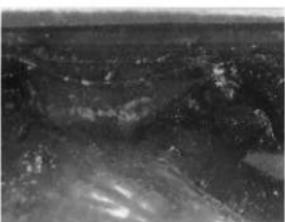


写真2 赤色塗の塗膜断面(試料1、落射光)×400

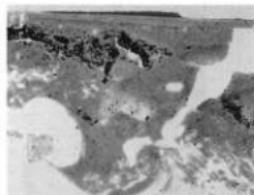


写真3 赤色塗の塗膜断面(試料2)×200



写真4 赤色塗の塗膜断面(試料3)×200

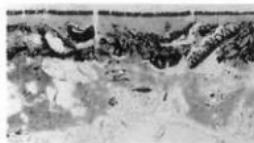


写真5 赤色塗の塗膜断面(試料4)×200

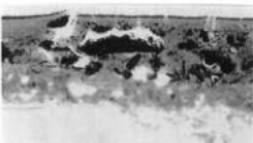


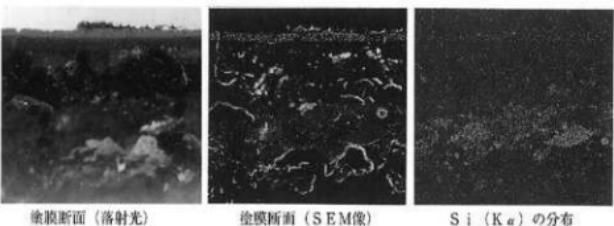
写真6 赤色塗の塗膜断面(試料5)×200



写真7 黒色塗の塗膜断面(試料6)×200



写真8 黒色塗の塗膜断面(試料8)×200



塗膜断面（落射光）

塗膜断面（SEM像）

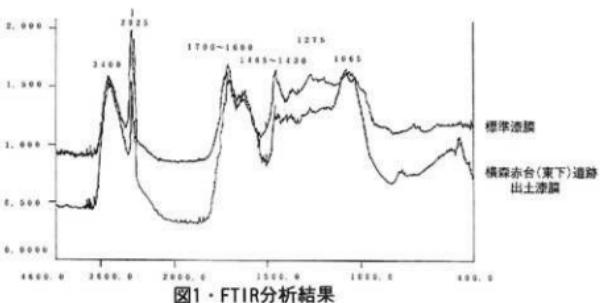
Si (K α) の分布



Hg (M α) の分布

S (K α) の分布

Hg (赤)、S (緑)、C (青) の分布



報告書抄録

ふりがな	よこもりあかだい(ひがしした)いせき
書名	横森赤台(東下)遺跡
副題	国道141号(箕輪バイパス)建設に伴う発掘調査報告書
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第171集
著者名	野代幸和・網倉邦生
発行者	山梨県教育委員会
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
所在地・電話	〒400-1508 山梨県東八代郡中道町下曾根923 TEL 055-266-3881・3016
印刷所	株式会社少国民社
印刷日	2000年1月25日
発行日	2000年2月4日

報告書概要

ふりがな	よこもりあかだい(ひがしした)いせき
所在地	山梨県北巨摩郡高根町箕輪字赤台700-1ほか
	25,000分の1地形図 若神子
	位置 東経138°22'00" 北緯35°49'44" 標高705m
	市町村コード19404
調査原因	国道141号(箕輪バイパス)建設
調査期間	1996年10月29・30日 1996年12月19・20日(試掘調査) 1998年5月11日~7月8日(発掘調査)
調査面積	7,000m ² (試掘調査) 1,600m ² (発掘調査)
調文時代	
種別	集落跡
主な遺構	獨立柱建物跡1基
主な遺物	土坑46基
	土器(縄文時代中期・晚期)
	石器類(打製石斧等) コンテナ[46×30×26cm]1箱
特記事項	晚期水I式土器出土
平安時代	
種別	その他
主な遺構	堅穴状遺構1基
主な遺物	土師器片 コンテナ[46×30×26cm]1箱
特記事項	遺構の性格は不明
中世	
種別	墓地
主な遺構	土坑17基
主な遺物	溝状遺構1基
	五輪塔200基・人骨10体 コンテナ[46×30×16cm] 18箱
	漆桶・古錢(無文錢・ペトナム錢ほか) コンテナ[46×30×26cm] 34箱
特記事項	五輪塔内に墨書きが残っており、土坑内から人骨・炭化材が検出された
近世	
種別	畠地
主な遺構	畠状遺構2力所
主な遺物	内耳土器小破片
特記事項	調査区北側に存在している

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第171集

横森赤台(東下)遺跡

国道141号線(箕輪バイパス)建設に伴う発掘調査報告書

印 刷 日	2000年1月25日
発 行 日	2000年2月4日
編 集	山梨県埋蔵文化財センター
発 行	山梨県教育委員会・山梨県土木部
印 刷	株式会社少国民社

